マンガ大賞

Cartoon grand prize

2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

あなたが選ぶマンガはなんですか？

マンガ大賞決定！

ノミネート12作品を含む、全投票作品の

選考員コメント掲載！

マンガ読みが選ぶ 2007 年の一推は

「岳」石塚真一

「©石塚真一 / 小学館」

2008 年のマンガ大賞は ダントツの 68pt 獲得！

「岳」が受賞！

68pt

マンガ大賞最終選考ノミネート作品

一次投票 76 人 二次投票７３人

- 49pt 『よつばと！』 あずまきよひこ
- 43pt 『海街 diary1 蝉時雨のやむ頃』 吉田秋生
- 43pt 『フラワー・オブ・ライフ』 よしながふみ
- 42pt 『君に届け』 椎名軽穂
- 40pt 『大奥』 よしながふみ
- 35pt 『皇国の守護者』 佐藤大輔、伊藤悠
- 27pt 『とめはねっ！ 鈴里高校書道部』 河合克敏
- 26pt 『もやしもん』 石川雅之
- 23pt 『夏目友人帳』 緑川ゆき
- 20pt 『ひまわりっ - 健一レジェンド -』 東村アキコ
- 19pt 『きのう何食べた？』 よしながふみ

※ポイントの集計方法は
1 位→3pt　2 位→2pt　3 位→3pt
の投票された数の合計によって決められています。

非ノミネート作品

30 婚 /DOGS/BULLETS CARNAGE/GENTEGIANT KILLING/Kiss×sis/LIAR GAME/NON tea room/Odds/PLUTO/PONG・PONG /Real Clothes/RED/WORKING!!/Y 十 M(ワイじゅうエム)〜柳生忍法帖〜/ あしたの弱音 / アニメがお仕事 !/ アリーズ 2 2? 蘇る星座宮 / アレルヤ / あんどーなつ / イキガミ / いちごの学校 / いとしのニーナ / ヴィンランド・サガ / うさぎドロップ / エマ / おひっこし ?/ おまかせ精霊 / おやすみプンプン / お茶にごす / ガゴゼ / かぶく者 / カボチャの冒険 / かよちゃんの荷物 / カラクリオデット / カラスヤサトシ / キミキス -various heroines-/ ギャグマンガ日和 / キャノン先生トばしすぎ / ギャンブルフィッシュ / きょうの猫村さん / キラメキ銀河町商店街 / ゴールデンデイズ / サイコスタッフ / サナギさん / ジジジイ GGG/ それでも町は廻っている / ゾンビママ / ダイヤの A/ たんぽぽの綿毛 / チェーザレ 破壊の創造者 / チナミの風景 / チノミ / テガミバチ / デトロイト・メタル・シティ / トムソーヤ / ぬくぬく / のらみみ / パート怪人悪キューレ / バカ姉弟 / パチスロバカップル / ハチワンダイバー / ハツカネズミの時間 / パティスリー MON/ はなまる幼稚園 / ピースオブケイク / あなたでいっぱい / ヒストリエ / ヒャッコ / ふたりごと自由帳 / へうげもの / ボーイ × ミーツ × ガール / ボーイズ・オン・ザ・ラン / ぼくらの / ポコとワンダフル / ホタルノヒカリ / ママさん / ミス・ポピーシードのメルヘン横丁 / ムカンノテイオー / もずく、ウォーキング !/ モリのアサガオ / ゆるめいつ / ヨルムンガンド / らいかデイズ / ラウンダバウト / リカってば !/ ワイルドマウンテン / わにとかげぎす / 悪魔とラブソング / 異邦警察 / 羽衣ミシン / 嘘喰い / 駅から５分 / 榎本俊二のカリスマ育児 / 屋根の上の魔女 武富健治作品集 / 乙男 (オトメン)/ 俺はまだ本気出してないだけ / 仮スマ / 仮面ライダーをつくった男たち / 夏のあらし !/ 海獣の子供 / 街角花だより / 学園黙示録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD/ 楽園の条件 / 機動戦士ガンダムさん / 機動旅団八福神 / 気まぐれコンセプト / 巨娘 / 共鳴せよ！轟高校図書委員会 / 極道の食卓 / 金魚屋古書店 / 群青学舎 / 潔く柔く / 現在官僚系もふ / 黒鷺死体宅配便 / 黒執事 / 黒博物館スプリンガルト / 今日からヒットマン / 山へ行く / 死と彼女とぼく ゆかり / 執事様のお気に入り / 方恋の日記少女 / 邪眼は月輪に飛ぶ / 春行きバス / 女の子の食卓 / 少女ファイト / 深夜食堂 / 水惑星年代記 / 赤灯えれじい / 赤髪の白雪姫 / 真・異種格闘大戦 / 大阪ハムレット / 大東京トイボックス / 誰かがカッコゥと啼く / 誰も寝てはならぬ / 探偵儀式 / 竹光侍 / 町でうわさの天狗の子 / 帝王 / 鉄のラインバレル / 東京アリス / 盗賊の水さし / 日常 / 彼女のカレラ / 秘密 - トップ・シークレット -/ 蔵人 / 百日の薔薇 / 不成仏霊童女 / 弁護士のくず / 放浪息子 / 僕と彼女の XXX/ 僕のやさしいお兄さん / 僕の小規模な生活 / 本の元の穴の中 / 盆堀さん / 魔王 / 万福児 / 未来日記 / 夕日ロマンス / 預言者ピッピ / 臨死 !! 江古田ちゃん / 鈴木先生 / 惑星のさみだれ / 苺田さんの話

マンガ大賞受賞作品

ビッグコミックス / 小学館

「岳」 石塚真一

選考員コメント

一次選考

■ 完璧です！これだけハッピーエンドとはいえない結末が多いのに心惹かれる作品はありません。現実に近いからでしょうね、きっと。自然を前にしたときヒーローは要らない。『畏れ』と『現実』を見据えればよい、そう思わせる１冊ですね。

ＢＯＯＫＳ昭和堂 / 川﨑一利

■ 山に行ってみたくなる…そんな漫画です。主人公は、山岳救助のボランティアをしている島崎三歩。救助という厳しい現場を描いたヒューマンストーリーですが、山好きの作者が描く山岳漫画でもあります。だからかもしれませんが、三歩が見ている山の風景は、すごく魅力的です。三歩と同じ光景を見てみたくなるんです。登場人物に悪人が出てこないのも魅力の１つ。人間くさくて、でも安心して読める、人に勧めたいマンガです。

日刊スポーツ新聞社・記者 / 下岡真由美

■ 山岳漫画は数あれど、漫画という形式でしか表現しえない、と感じたのはこの作品のみ。これほど死にゆく人々を残酷に、容赦なく描き、それでいてヒューマンな感動を失わないのはすごいこと。実写でも、活字でも、同じようには表現できまい。それはひとえに、主人公・三歩の造形によるものだと思う。

読売新聞文化部 / 石田 汗太

■ 友達のすすめで読みましたが、どの巻を読んでも素晴らしいです。山における人間の生死が、淡々と当たり前のように描かれています。おおげさに嘆くのでもなく、悲劇的にするのでもなく、ただ人は大自然の前で死んでいくのだというその作者の死に対する姿勢が実に好もしい。

旭屋書店船橋店 / 安田 奈緒美

■ 心洗われる山岳救助ストーリー。人はいろいろな人生を背負いながら山へ登る。ボランティアで救助活動を続けるひたむきな男、三歩が救助を通していろいろな人と出会う生き様を美しい山岳と共に描いた作品。

有隣堂横浜駅西口コミック王国 / 徳永 あけみ

■ 読後の何とも言えないじわっ〜とした味わいがたまりません。

凸版印刷 / 紺野 慎一

■ 当初は増刊誌での連載ながら、今や本誌で好評を博す連載とまでなった山岳レスキュー漫画。まず、熱血漢やスーパーマン的な主人公の多いレスキュー漫画の中では珍しい、飄々としながらも芯のある主人公の人物像が面白い。作品内では、漫画でありながら遭難者を救助できず死に直面するシーンも多いのだが、かといって死を劇的に扱わず、山の厳しさを描きながらも同時に山の素晴らしさをも伝えてくれる物語のバランス感覚は見事である。これが初連載でありながら、読み切り形式でこれだけ毎回クオリティの高い話を作れる作者の力量には舌を巻く。四方を山に囲まれた長野県で育ちながらも本格的な登山経験は数えるほどしかない筆者であるが、この漫画を読むたび遠くに見える八ヶ岳へと思いを馳せている。

Web サイト「最後通牒」管理人 / 高嶺 颯

■ 心洗われる山岳救助ストーリー。人はいろいろな人生を背負いながら山へ登る。ボランティアで救助活動を続けるひたむきな男、三歩が救助を通していろいろな人と出会う生き様を美しい山岳と共に描いた作品。

有隣堂横浜駅西口コミック王国 / 徳永 あけみ

■ 連載中の雑誌の中で安心して読めるマンガ。なんでだろーなー。自分自身がこういう冒険とか好きだから、ついついじっくりと読んでしまう。ていうか普通にかっこいい。身も心もタフな人間はやっぱりかっこいいです。

デザイナー / 橘 千尋

二次選考

■ この作品もまた、マンガでしかなし得ない表現。とにかく、「人間の死」をこれほど克明に、生々しく、容赦なく描いたマンガを読んだことがない。おなじ山ほどの死を描いても、例えば「デスノート」の対極にあるマンガが「岳」だ。主人公・島崎三歩の底抜けの明るさがこの作品を救っているが、その前向きな明るさは、とてつもない哀しみと諦念の上に咲いていることを、我々は忘れるべきではない。過度に重苦しくならない物語と作画のバランスは、ほとんど奇跡的。バックの山の風景も、すばらしいというしかない。ぜひ顕彰されてほしい作品。

読売新聞文化部記者 / 石田 汗太

■ 主人公・三歩の山に対する気持ち、登山者に対する気持ちが温かくて、老若男女問わずにお薦めできる作品です。三歩はボランティアで、山での遭難者を助けています。時には間に合わないこともあり、山の厳しさも思い知らされます。また、２カ所で同時に遭難者が出た場合には、二者択一を迫られます。そんな時でも、三歩は迷いません。自分の信念を持って、片方を助けに行きます。なんだか格好いいんですよね。最後に。様々な登山者のエピソードが出てくるので、それぞれの心の琴線に触れる話が必ずあると思います。ぜひ、多くの人に読んで欲しいです。

日刊スポーツ新聞社・記者 / 下岡 真由美

■ 世代・性別・育った環境など一切関係なく、読後に満足できる作品。山の中では、常に死と隣り合わせ。自分の命を守るために、時には大事な人を見捨てなくてはならない。そんな過酷な場所になぜ行くのか。ボランティアの救助を請け負う主人公の、『よく頑張った。』『またおいで。』と言うことばと、振る舞われる温かいコーヒーが印象的。『感動した』『泣きました』なんて薄っぺらい言葉は使いたくない。自分の目で確かめて欲しい作品。

三省堂書店神保町本店 / 赤坂 真実

■ 大自然に立ち向かう人間のちっぽけさ、儚さを描いた最高傑作です！ハッピーエンドじゃないことが多いのに、悲壮感ではなく清々しさが読後に残る作品はなかなかないです！間違いないです！

ＢＯＯＫＳ昭和堂 / 川﨑 一利

■ どうしてそこまでして山に登るのかと三歩や登場人物に心の中で問い続けながら読みました。作品から伝わってくる極寒の冷気に震えながら…二人の遭難者がいて連絡が入ったのは後なのに自分から近いほうを優先して助けに行くシーンでは大自然の中では社会的地位なんか無関係なんだなと妙に納得しちゃいました。冬山の登山経験はないのですが、こんな恐ろしい山になんか絶対一生登らない的な気持ちと三歩たちに近づきたくてチャレンジしてみたいという無謀な気持がアンビバレントに揺れちゃいました。地上の様子はあまり描かれず、ほとんど山に登ってからの展開なのに一話一話ドラマが完成していてすばらしい。ところで三歩はナイキのＡＣＧばっかり身にまとっているのはなんでだろう？

高校国語教師 / 橋井 哲朗

■ この中では、だんとつで好き。読みやすい、好き。

ミドリ / 後藤 まりこ

■「ゴルゴ」しかり「マスターキートン」しかりスペシャリストの話は読んでいて素直に憧れてしまう。どちらかというと闇の世界での活躍が描かれていた両作品だけど、「岳」は自然の中での救助の話。単純な正への方向というだけでこんなにも違うものなのか。山での遭難死をかいた悲惨な話も多いが、全ての人間に対し平等に接する山々の姿には読んでいて清々しく、その中で動き回る三歩の姿には日々を生き抜く勇気をもらえる！経験者ならではと思われる、作者の登山の描写山への愛情を感じる一本。つーかオレも山に登りたくなった。友人知人には「このマンガは当たり。買いでしょ。」と吹き込んでいる。

デザイナー / 橘 千尋

■ わーこんなグッとくるの、よんでなかったんや！と思いました・・・ノミネート全作読破ルールに感謝したいです。人はなぜ山にのぼるのか。「そこに山があるから」とは登山家の有名なセリフですが『岳』をよんで思うのは、山とは自分と対峙する場所なのではないかということ。街での日常生活とは別の世界ですが、日々のくらしをどのように生きてきたか、自分はどんな人間なのかということを、山に挑むとき思い知らされるのでは、と感じました。マンガはおもに、山岳救助のエピソードを１話簡潔で描いています。自然と人間、濃厚なドラマを感じてください！

恵文社バンビオ店　文芸書・文庫担当 / 大瀧 彩子

■ 作品的には、漫画を読まない人でも引きづり込めるだけの作品です。漫画好きだけじゃなく、手に取ってもらえる可能性の高さで。もちろん、日本に居る時は、１巻の時から大きく仕掛けました！万人に読んでもらいたいです！

韓国漫画専門店ＣＯＭＩＣＣＯＺＺＬＥ店長 / 野田 真人

■ これが実態なのだろうと思わせる山という極限状況の恐怖を描く作者の姿勢は「山」に対する思いがあふれている。いわゆる「いい話」ものではあるが、その極限状況があるからこそ、感動が生まれる。主人公の「よくがんばった！」というせりふの重みがずしりと来る。

毎日新聞デジタルメディア局 / 渡辺 圭

■ 山、特に雪山は、死と隣り合わせの世界。それでも人は山に登り続けます。その理由を考えることは、形而上的なものを考えることで、答えのでないことであるように思えます。ですがこの作品はその問いに、一定の答えを示そうとします。それにこの作品では、普段私たちが目を背けている「死」が、実は身近にあるもので、山ではその距離が非常に近くなることを示します。死を見つめることは生を考えること。そのことを実感させてくれる作品です。

おたく文化史研究・男やおい読み / 吉本 たいまつ

■ 山と人のドラマ。物語に力がある。そして清々しい。安定感も抜群。

ライター / 芝田 隆広

■ 物語の王道と思います。生と死をきちんと描き、そして希望を見せてくれる。私は山に登りませんが、日々の暮らしのなかで、この作品のメッセージを思い出すことがあります。

ダ・ヴィンチ編集部 / 関口 靖彦

■ 何も説明はいらない名作です。まだ読んでいない人がうらやましい。あの感動をこれから味わえるんだから。

音楽プロダクション / 樋口 健

■ 悩みましたが、ぜひ誰かに読んでほしい！と思うマンガはやっぱりこれでした。山という大自然の中で、人の命がどんなにちっぽけか、そしてどんなに大きいかを思い知らされる物語。

旭屋書店船橋店 / 安田 奈緒美

■ ヒューマンドラマの決定版でしょう。危険なのに、行ってみたくなりました。

少年カミカゼ / 和教

■ 一巻だけ読んで、もったいないので後で読もうと思ってすっかり忘れていました。高校の頃三年間山岳部であったために、とても共感できる部分とても判る部分も多々あります。この作品は救助もテーマの一つになっているので、よく死んでしまっている人が出てきますが、実際もこんな感じです。一緒に登った仲間が冬行方不明になると、春に一斉に探しにいきます。高校生だったので、捜索には連れて行ってもらいませんでしたが、顧問の先生はいつも行ってました。しかし、見つかるのは冬に捨てられたゴミばかりで、なかなか仏様には会えないそうです。山の怖さや真実、厳しさはたまた美しさや優しさなどもしっかりと伝えてくれている素敵なマンガだと思います。主人公三歩の「よく頑張った」と言う台詞はガツンときます、それがたとえ亡くなってしまった人へ向けられたものだとしても。久々に山に登りたくなりました。時間が欲しいですね。

まんが王八王子店 / 日吉 雄

■ 山岳救助ボランティアの青年が主人公の本作。生死に関わる話が多いため、辛い場面にも触れざるを得ませんが目をそらさずに描かれる物語の結末に、ぐいぐいと引き寄せられ読まされてしまいます。読み応えがある。

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

■ このマンガの何とも言えない読後感がめちゃめちゃ大好きです。今回改めて再確認しました。読後のあの味わいを確かめに、子供の時から大嫌いだった登山だけれど、改めて山にちゃんと登ってみたいと心変わりさせるほど「岳」のストーリーには魅力が溢れています。

凸版印刷 / 紺野 慎一

マンガ大賞 manga taishou 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

■ 山での遭難事故は、山に行けば誰にでもおこりうる出来事。最近は登山ブームでそういったニュースを聞くことも多い。三歩は遭難した人たちを決して責めない。励まし、感動し、感謝する。助かった人にも助けられなかった人にも…。こんなにも人の生死と真っ正面から向き合っているマンガはそうないと思う。

主婦 / 紺野　泉

■ 自然の恵みと恐ろしさ、それらをひっくるめてこちらに伝えてくれる作品。登山とまでは行かないまでも、ハイキングくらいしてみようかななどという気にさせてくれる。ほとんどが一話一話で過不足なく完結しており、それに不満を感じさせない力量に脱帽した。

鳥取県立米子高等学校 / 野間 勤

■ 重厚で確かなドラマ作り、理詰めで安定感のある画面構成。ビッグコミックらしさとは何かを考えさせられる作品です。救助隊員・椎名久美が山での救助経験を重ねるうちに皮膚が引き締まり、寒さと疲労のなか、やや荒れ気味で薄くなった目元に毛細血管が浮かびあがるような表情の変化を示す描写に注目しています。

マンガライター / 会田 洋

■ 今回読んだ中で、一番印象にのこり最後までぶっ通しに読んだのがこれ。私が高校生の時、隣のクラスの担任の先生が参観日に向けて「自分の遺書を書く」という授業をしていた先生曰く、「自分の死を考えたとき、死と向き合った時、そのときにその人が考えたことが生き様である」とのこと。授業には参加できなかったが、授業で使ったプリントをみせてもらったけど、確かに人間性がでるんだよね。悲しまないでと言い残す人愛する人に好きだと訴える人フォアグラ食ってみたかったという人いろんな考えがあるものだと思ったものです。話を戻してこの「岳」というマンガ。山岳救助隊の話なので、救助する側とされる側は常に山の美しさと山の恐怖、そして死と向き合うことになります。そのときの感情描写が本当にリアル。恐怖でパニックに陥ってしまったり、家族のことを思い出し、片足だけで必死にもがいて帰ろうとする人、怪我をした仲間だけ見捨てて帰れないとその場に残る人。一話完結で５巻までででているのに話ごとのストーリーがしっかりしているのは秀逸。こんなに死と向き合うなか、主人公はひたすら明るく、山を愛している。ヒロインの女の子は死と向かい合う現実に負けそうになることがおおく、そのたびに主人公の明るさに救われているんだけど、主人公ですら、山に登り、色々な悲しい経験をしたからこその明るさ、ある種腹をくくっているところがあるのが悲しい。あと、このマンガ怪我をした人間や死体がでてくるんだけど、それがまた生々しい。グロとかではなく生々しい。それがまた死の恐怖を想像させてくれる。ここまで描けるのはすごいです。そんな死体に生者と変わらなく「よくがんばった」と声をかける主人公の、人と山に対する愛情がまたひしひしと伝わってくるのがなきそうになる。読み終わった後、小さい頃のように電気を消したら、眠ってしまったらそのまま暗闇の中、二度とおきれないような気がして電気をつけたまますっと眠れなかった。もう２５なのに。でもそんな思いを思い出させてくれるすばらしいマンガです。

高校美術教師 / 佐川 由加理

■ 救命モノとしては珍しいくらいに淡々と命の重みを描いていて、でもそれなのに読者を引き込んでいく強い説得力を持っていると思います。また、常に危険をはらみ時には失命のリスクもある山に登るという行為を、人が何故求めて止まないのかということを語りかけようとしている。そんな作品でもある気がします。個々のエピソードとしてはともかく長編としては語り口が若干単調な気がしたのでこのマンガを推すかどうか迷いましたが、「バナナ」(3 巻収録) が個人的には決め手になりました。山での生死を直接描くエピソードの多いこの作品の中にあって、メインゲストが山に登りすらしないある意味地味な一編です。それでも、私にとっては山の魅力というものを最も説得力を持って語りかけてくる一編でした。どの話を好きになるかは人それぞれだとは思いますが、沢山の人がそれぞれの好きな話を見つけられる、そんなマンガなんじゃないかなぁと思います。

眼鏡時空発生装置 / 田中 海渡

■ 人はみんなひとりぼっち。長い人生ですれ違ってゆくだけ。でも声を掛け合うことはできるんですね。それが全てですよね。三歩のようになんでも楽しむスタンスでいきたい。

ヴィレッジヴァンガード下北沢 / 久保 朝美

マンガ大賞ノミネート作品

月刊コミック電撃大王 / メディアワークス

「よつばと！」 あずまきよひこ

選考員コメント

一次選考

■ 題材といい、ストーリーといい、素晴らしい。寝る前に読むと幸せな気分で眠りにつけそう。よつばがリアルに子どもらしいところがいい。よつばがあまりにも可愛くて、自分の子どもがよつばみたいだったらいいなと思う。今一番新刊が楽しみなマンガ。

フィットワン所属・グラビアアイドルの威を借るヲタク / 喜屋武 ちあき

■ 子供の視点から見た世界はいつもどきどき、わくわくに満ちているということを思い出させてくれた作品。子供っていいなぁ。

ひょうたん書店 / 勝田 康一郎

■ よつばが何人かなど謎は回収されないがあまり気にならない。よつばはよつばでいいと思う！となるキャラのよさに完敗。自分の姪っ子を見ているときと同じ気持ちになるリアリティ・・・。個人的にはジャンボが大好き。巻を追うごとにサザエさんやちびまるこちゃん的な味が出てきたような気がします。

自遊時間三省堂書店 / 大塚 綾乃

■ もはや国民的マンガ言ってもいい作品。「豊かな表現」とはこのマンガのためにある言葉だと思う。特に、７巻の糸電話のエピソードは秀逸。

毎日新聞デジタルメディア局 / 渡辺 圭

■ でんわ・けいろうのひ・ねつ・ぱちしえ・おつかい・しゅっぱつ・ぼくじょうの７話収録よつばという女の子と、とーちゃん、そのお隣さんちの三姉妹（あさぎ、ふうか、えな）を中心に繰り広げられるほのぼのとした日常のお話。天真爛漫なよつばちゃんの言動にこどもってそうだよなー、こんなことあったなー、おんなじことやったなー、あるある、とおもわず頬がゆるみます。作品を通して数々の伏線がはられているのでゆっくり、じっくり、たまに読み返してみたり…をオススメします。

web プログラマー / 岩下 梓

■ 私は、宮崎駿映画のなかで、となりのトトロがいちばん泣けちゃうのですが。よつばと！も、「仲間に入れないけど、すっごいきれいな世界」です。読んでる時のあの平和でみずみずしい気持ちと、読み終わってふと気がつく、自分はどうなんだろう、遠くもないが近くもないぞ、というこの気持ち。喜怒哀楽では説明できませんが、行動で説明するなら涙です。あと、となりのお母さん、実は DMC の社長っぽくない？

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

■ よつば（５）の日々を書いたマンガ。読んでいて「よつばはバカだなぁ」「よつばはかわいいなぁ」と何度思ったかわかりません。何も考えず力をぬいて読める、ただただひたすら面白い。

施設職員 / 早道 奈美

■ 一般層にも人気が広がりつつあるというよつばとですが、次代ジブリアニメの代わりになったりはするのでしょうか？台詞がとても少ないのも特徴で、コマ毎の微妙な間やよつばちゃんをはじめとした魅力あるキャラクター達の、動きもいつも楽しみに読んでおります。

まんが王八王子店 / 日吉 雄

■ よつばはとってもかわいいし、昔のよいご近所関係とか、「あるよね」という楽しさを堪能させてくれるのはもちろんですが。子どもとはっきり区別してかっこいい大人たち（色んな段階の）が完璧に描かれることで、単なるノスタルジックな世界とかユートピアとは違う世界が出来上がっていると思う。大人と子どもの関係がこんなふうにちゃんとできているというのが、それはそれでもはや夢の世界なのですが。子どもをかわいく描くためにものすごく計算されているのに、あざとくならないのってほんとにすごい！７巻まで出ても、全然テンションが落ちない。出れば出るだけ、何回も何回も読み返すだろうと思う。ラストがどうなるのかにも注目。

漫画ライター / 門倉 紫麻

マンガ大賞 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

二次選考

■ 友達に借りて読んだのですが、新境地でした。つかみきれない感じに、つかまれてしまい、クセになっちゃいます。

BAZRA/井上 鉄平

■ これも自分にとっては 2005 年の作品であり、選ぶには違和感がありますが、毎月続きを楽しみにしていると言う意味ではこの中ではダントツです。アニメ化されていないこともあり、まだまだ売り伸ばし出来るところもあると思います。実は読み手の想像力が試されるすごい作品だと思っています。「ヨコハマ買い出し紀行」が好きな人に読んでもらいたいですね（もちろん逆もあり）。

コミックとらのあな・書籍バイヤー、「とらだよ。」SD/ 塚本 浩司

■ 巻数がかなり出ているのでどうだろうと思ったのだが繰り返し読んでもどの巻を読んでも面白かったのはこの作品だけだったので１位。

あゆみＢｏｏｋｓ仙台青葉通り店 / 土屋 修一

■ パロディ四コマの間を醸造する天才だった著者は、あの名作『あずまんが大王』を経て、固有のリズムだけでストーリー漫画の世界を構築してみせた。個々のビジュアルと台詞を読者の脳に定着させる表現力はもはや神懸かり的だ。

書評系ライター / 福井 健太

■ 主人公・よつばちゃんの行動が、ちょっとおバカでほほえましくて、面白くて一気に読んでしまいました。まとめ読みしたためかもしれませんが、笑いのツボにはまってしまって…なのになぜか感動してしまって、笑い泣きしてしまいました。きっとよつばちゃんのような子供時代は、誰にでもあったのでは？と思います。童心に帰れる作品です。

日刊スポーツ新聞社・記者 / 下岡 真由美

■ 何と言ってもよつばがかわいい！気づいたらよつばの成長を見守りたいようなこのまま大きくなってほしくないような父親気分で見守っちゃっています。日常の何でもないやりとりが中心なんですが、それを子どもの感性で見事に描いていて笑えて癒されます。悪人も出てこないし（やんだはチョイ悪？）。絵も丁寧で、手元に置いておいて何度も読み返したいマンガです。よつばの出生の秘密が気になる…

高校国語教師 / 橋井 哲朗

■ 今回推さないともう推せないので…もったいないので推します！マンガ読みにはもう鉄板だと思うのですが、一般の方はまだまだ知らなそうだし絵的にオタク臭い内容に思われていたらもったいないし…。それにどの年齢層も楽しめそうなので本命はこれかな、と思っております。だって子供が特別好きでなくてもよつばのかわいさは無敵ですよ！その他の登場人物もいなそうでいそうな感じで、ついついマンガの中の住人と同じ目線になって読んでしまうんです、これ。

自遊時間三省堂書店 / 大塚 綾乃

■ 日常のおかしみをシンプルに入り込んでくる素直な作品

デザイナー / 佐藤 優

■ 大人には淡々と重なる日々も子供には毎日が長くてそして奥深い。その心境をしっかりと描いて誰にもあったあの夏の日々を思い出させてくれる。

書評家 / タニグチリウイチ

■ やっぱりよつばはかわいい！かわいいはせいぎ！ということで、一票。こんなに癒されるマンガはありません。他を探してもこういったマンガは見当たらないと思います。

フィットワン所属・グラビアアイドルの威を借るヲタク / 喜屋武 ちあき

■ 純粋に、老若男女問わず、すべての人に読ませたいと思う作品。ていねいな作り方から生まれる、「何でもないけど、それが素晴らしい」という最も難しいテーマを具現化した名作。

毎日新聞デジタルメディア局 / 渡辺 圭

cartoon grandprix 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一冊

■ 図像的アイコンとキャラクターの属性の順列組み合わせによって作られる現在の「萌え」をめぐる状況において、「本当に萌えるものとは何か？ リアル子どもだ！」と提示しているところが素晴らしいです。現在の文化状況に対する鋭い批判になっているだけでなく、文化を消費するのが当たり前になっている現在、忘れられてしまいがちな「未来」＝「次世代にバトンを渡すこと」を思い起こさせてくれるのですから。また、ギャグとして楽しめるだけでなく、腐女子的萌えもしっかりと盛り込まれています。こうまでコンセプチュアルだとぐうの音も出ません。

おたく文化史研究・男やおい読み / 吉本 たいまつ

■ 大人から子供まで幅広い年齢層に楽しんでもらえる作品。特に大人には、子供の世界は毎日こんなにも刺激的で面白い世界なのか。と、忘れかけていた子供の目線を思い出させてくれる。

ひょうたん書店 / 勝田 康一郎

■ この漫画のすごいところは老若男女、世代を問わずオススメできるというところ。なにげない日常の描写に笑ったり、しんみりしたり、遠い夏の日を思い出したり。あずまんがの時にはオタク層に受けてきっとこの先もファン層は広がらないだろうなー、と思っていたらあっさり裏切られた。やられた。

恵文社バンビオ店　店長 / 宮川 元良

■ いちばん読み返したマンガです。何回読んでも、元気をくれる本。これからも読み返すでしょう。

ダ・ヴィンチ編集部 / 関口 靖彦

■ なんでも楽しめるっていうのは本当に「無敵」なんだなあと、「無敵」の意味を改めて考え直してしまいました。こんな子供が自分の子供だったら・・・毎日大変そうだなあ。

音楽プロダクション / 樋口 健

■ 正直、この作者さんのマンガは絵柄で敬遠していたので今回、候補になって仕方なく読み始めたというのが正直なところでした。いざ読み始めてみた印象は「なんなんだこのマンガは」。つまり「なんなんだこのアンチクライマックスは」。初めての感覚でした。で、読み進めるうちに予期しないところで噴き出させられる。不思議なマンガです。明快なオチのないエピソードのいちいちがおかしい。セリフなしで展開する無音のコマがもたらす間はこの作者さんの持ち味なのでしょうか。読む快感を味わえるかも。　極太の、しかも違う書体の活字でしゃべる、キャラクターグッズのような、いや、キャラクターグッズのキャラクターのようなよつばの「無邪気」が疲れた大人には良いのであろう。オタク絵、と切り捨てるのは簡単なのですが、こういうのも「あり」。シャープなのですがよくみると古臭いような、でも新しいような不思議な絵柄でもあります。とくに、キャラクターグッズのキャラクターではないまわりの大人たちの絵姿は古めですし。
　最初の方の巻に出てきたとーちゃんの「今度は何をおぼえてきた？」というセリフから大人が受ける印象がすべてを物語るように思います。個人的なことですが２歳半のコドモがいるので、よつばの反応のいちいちがリアルにビシビシと入ってきました。そんな個人的な受け止め方もあって、今回推してみます。

全国紙記者 / 天野 賢一

■ 最初は印象が弱かったですが、視界の豊富さを感じてから引き込まれました。

web デザイナー / 河本 知香

■ 今回唯一のコミカルなコミックスと言うことと、あと自分で初期に選出した一つなので、責任を持ってもう一度推薦しておきます。漫画はシリアスもあり、コミカルもありなんでもありなのが良いですよね！

まんが王八王子店 / 日吉 雄

■「よつばと！」は、去年に限定したことなく、ずーっとド高め安定なのだけれど、（ノミネートに惜しくも漏れた）「へうげもの」と同様に、言語感覚、空気感、「間」の取り方に大変優れた一作、ということで推しました。淡々と日常を描きながらも、飽きることなく何度でも読み返せるのは、キャラクター造形や物語それ自体の魅力もさることながら、その描写、構成、語り口に力があるから。思えば、ここまで隙のないゆるいマンガも珍しい。基礎的教養として読まれるべき作品。

gekka blog/ 齋藤 正篤

■ よつばはとってもかわいいし、昔のよいご近所関係とか、「あるよね！」という楽しさを堪能させてくれるのはもちろんですが。子どもとはっきり区別してかっこいい大人たち（小学生→高校生→大学生→社会人、いろんな段階の大人たち）が完璧に描かれることで、単なるノスタルジックな世界とかユートピアとは違う世界が出来上がっていると思う。子どもと大人は違うのだ、ということをきっぱり描いている。（大人と子どもの関係がこんなふうにちゃんとできているというのが、それはそれでもはや夢の世界なのですが）子どもをかわいく描くためにものすごく計算されているのに、あざとくならないのってほんとにすごい！７巻まで出ても、全然テンションが落ちない。これからも出れば出るだけ、何回も何回も読み返すだろうと思う。続いてほしいし、かつ、ラストがどうなるのかも楽しみ。

漫画ライター / 門倉 紫麻

■ 何というか、「クール」さが良かった。

コミティア実行委員会 / 中村 公彦

■ ある種の絵本のようなマンガ。なぜそんなことを書くのかというと、説明や説明ゼリフがほとんどない。いや、それらが必要ないほど、構図などが練られている。じっくり読んでみてそこに驚いた。また、ストーリーも説明的にならない。神は細部に宿るかのような作品。「よつば」という神の観察日記。

鳥取県立米子高等学校 / 野間 勤

■ 面白いなんてもんじゃすまない！　まさに究極のマンガ。マンガ以外では味わうことのできない芸術だと思います。ノンバーバルコミュニケーション、言葉にはならない情報を伝えられるのが、マンガの最大の強みなんだと思いますが。それが、どこまでもこまでも完璧なのが、よつばと！その証拠に、ほぼ、ナレーション、なし。隙のない絵とセリフでの完璧なコントが、隙だらけのキャラクターたちで進んでいきます。この、すっごいきれいな世界に触れているときのあの平和でみずみずしい気持ちと、読み終わってふと気がつく、仲間に、入りたいけど、入れないんだよなぁ、というこの気持ち。喜怒哀楽では説明できませんが、行動で説明するなら、涙です。なんでマンガを読むのか、というか、なぜ自分の人生だけじゃなく、ひとの人生までのぞき込む、つまり、マンガ読んだり映画見たり話を聞いたり、人間はするのか、なんてことを考えるくらい、すごーい作品です。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

このマンガがすごい！ Comic grand prize 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

マンガ大賞ノミネート作品

フラワーコミックス / 小学館

「海街 diary 1 蝉時雨のやむ頃」 吉田秋生

選考員コメント

一次選考

■ すっごく吉田さんらしい作品かと。痛さやせつなさが巧みに描かれていて、早く続きの巻が読みたくてたまりません…

ＢＯＯＫＳ昭和堂 / 川﨑 一利

■ とにかく完成度が高い。鎌倉に住む三姉妹と、幼いころ別れた父の残した母親の違う妹。ひとつの“家族”が舞台のオムニバス作品。登場人物の心の動き、会話の流れ、言葉の裏にある思い、全てが自然で、現実味がある。何度も読みかえしたくなる、心に響く作品。

三省堂書店神保町本店 / 赤坂 真実

■ 大人の「仕事」と、子供という時期。アッシュとはまた違う素敵さを「幸」と「すず」に見ました。これから生長していく皆のストーリーが楽しみでなりません。

音楽プロダクション / 樋口 健

■ １話目となる表題作の要所要所をおさえる長姉・幸のことばが印象深い。その幸たち三姉妹と出会った１話からそれ以降にかけて、「子供であることを奪われた子供」であった末の妹・すずが、「子供」でいられる場所を得てのびのびとしてゆく様子は、どこかほっとする。作品全体を通した時間の流れが、とてもやさしく感じられる作品だと思えた。

高校漫研顧問 / 幸

■『夢みる頃をすぎても』や『河よりも長くゆるやかに』にイカレていた、齢半分くらいの自分のことが自然と思い出されてしまうのが、しょっぱい。その意味では“おっさんホイホイ”な感も否めないが、こっち側の吉田秋生作品については、無条件に受け入れてしまうんだなぁ。好きなものは好きだからしょうがない。もちろん、二十数年を経ての成熟がもたらす静的なパワーは圧倒的なのだが。

同人誌研究家・まんが評論家 / 三崎 尚人

■ 古都、鎌倉を舞台に家族という深いテーマが淡々と切々と描かれていて、心にしみる作品です。

有隣堂横浜駅西口コミック王国 / 徳永 あけみ

■ 表題作になっている１編目は全てにおいて文句の言いようのない完璧なまでの完成度です。「ラヴァーズ・キス」の神がかり的な構成もそうですが、どうやったら考えられるのか、とにかく素晴らしすぎます。

書店員 / 池田 貴之

■ 数珠玉の一冊。宝箱に入れたくなるような切ない、やさしい、それでいていつまでも心に残り続ける名作です。

web デザイナー / 河本 知香

■ ＢＡＮＡＮＡ　ＦＩＳＨ以来、久々に吉田ワールドにのめり込んで読んでいます。心が洗われ、読んでいて、すごく心地よかった作品。韓国では、発売されていないのですが、日本語の解るスタッフに読ますと大絶賛！！！！

韓国漫画専門店ＣＯＭＩＣＣＯＺＺＬＥ店長 / 野田 真人

■ やさしさがしみる。本当にうまい、と口にしてしまうくらい巧い。そういう漫画は多々あるんですが口から自然と「巧い」と、でるのはそうはない。読んだ後、きちんと相手と向き合ってきちんと考えて口に出そう、言葉を。そう思ってしまう。

恵文社バンビオ店　店長 / 宮川 元良

マンガ大賞 Cartoon grand prize 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

二次選考

■ 温かみある情景描写と繊細な心理描写が最大の魅力。夢中に読んだあと、心の奥底から湧き上がってくるいろいろな感情。個性豊な四姉妹（いろいろ理由あり）山あり谷ありの日常生活を通じ、ほんとうの「やさしさ」「強さ」「思いやり」を改めて考えさせてくれます。

本と文具　ツモリ / 津守 晋祐

■ すごく迷ったがまだ１巻目ということで２位。今後の期待大です。

あゆみＢｏｏｋｓ仙台青葉通り店 / 土屋 修一

■ 等身大のドラマの名手吉田秋生の帰還に一票。アクションやホラーの派手さはなくとも、心情の綾を細やかに綴った日常風景は充分にドラマティックだ。人々の距離感が大人の視点を感じさせるのも味わい深い。

書評系ライター / 福井 健太

■ 鎌倉に住む三姉妹と、幼いころ別れた父の残した母親の違う妹。ひとつの“家族”が舞台のオムニバス作品。登場人物の心の動き、会話の流れ、言葉の裏にある思い、全てが自然で、現実味がある。何度も読みかえしたくなる、心に響く作品。

三省堂書店神保町本店 / 赤坂 真実

■ 少女漫画で、おもしろいです。

ミドリ / 後藤 まりこ

■ 日常の非日常を濃縮に簡略化された作品

デザイナー / 佐藤 優

■ 何か大きな問題がある訳でもないのだが、読んでいると何とも心地良い風が吹いてくる。姉妹って、イイよな〜って思ってしまいます。今年、一番でした。

韓国漫画専門店ＣＯＭＩＣＣＯＺＺＬＥ店長 / 野田 真人

■ 壊れていた家族がゆっくりと再構築され、次の一歩を踏み出していくさまがじんときます。家族のあり方が問われている現在の社会に、重要な示唆を与えるのではないでしょうか。

おたく文化史研究・男やおい読み / 吉本 たいまつ

■『夢みる頃をすぎても』や『河よりも長くゆるやかに』にイカレていた、齢半分くらいの自分のことが自然と思い出されてしまうのが、しょっぱい。その意味では“おっさんホイホイ”な感も否めないが、こっち側の吉田秋生作品については、無条件に受け入れてしまうんだなぁ。好きなものは好きだからしょうがない。もちろん、二十数年を経ての成熟がもたらす静的なパワーは圧倒的なのだが。

同人誌研究家・まんが評論家 / 三崎 尚人

■ 男性作家より女性作家のほうがキャラクターの心の機微を上手にすくいあげて漫画を構成している。そんな気がします。この作者、吉田秋生さんもそんな作家さんの一人です。この作品を読んで感じるのは優しさ。３０代のおっさんの瞳も潤みます。人に優しく！そう思わずにはいられない１冊。

恵文社バンビオ店　店長 / 宮川 元良

■ まだ１巻しか出ていませんが、久しぶりの鎌倉モノ。大人の「仕事」と、子供という時期。アッシュとはまた違う素敵さを「幸」と「すず」に見ました。これから生長していく皆のストーリーが楽しみでなりません。

音楽プロダクション / 樋口 健

■ １話目となる表題作の要所要所をおさえる長姉・幸のことばが印象深い。その幸たち三姉妹と出会った１話からそれ以降にかけて、「子供であることを奪われた子供」であった末の妹・すずが、「子供」でいられる場所を得てのびのびとしてゆく様子は、どこかほっとする。作品全体を通した時間の流れが、とてもやさしく感じられる作品だと思えた。※申し訳ありませんが、一次選考のコメントで書きたいことを書ききっておりましたので、再度おなじコメントを書かせていただきました。

高校漫研顧問 / 幸

■ 続きが読みたくてじたばたしています。マンガなんだけど、まるで読み応えのある小説を読み終わったときのような読後感。物語に深みがあります。

旭屋書店船橋店 / 安田 奈緒美

■ 銃も爆弾も出てこない鎌倉という日常風景を舞台として、吉田秋生の丁寧な感情表現が冴えている。「BANANA FISH」や「夜叉」の路線とは違うけれど、こういう表現の幅が吉田秋生の新刊を必ず買ってしまう理由なんだろうなとあらためて気付かせてくれた作品。

鳥取県立米子高等学校 / 野間 勤

■ 宝物のような一冊。一冊だけというのが反って輝きを放ちました。

web デザイナー / 河本 知香

■ 巧い。「BANANA FISH」以前とほとんどブレがないのがすごいと思う。作者の描きたいものに芯が通っている感じ。何度でも何度でも繰り返し読める。マンガが好きな人になら確実に薦められる逸品。

ライター / 山本 文子

■ 2007 を代表する、傑作短編でしょう。1 冊まるまるというよりも、巻頭の 1 本目がとにかく素晴らしい。生活には本音も建前もどちらも必要で、白黒をはっきりつけるのはとても難しい。伝えても伝わらないことや、どうしても理解できない間柄もある。でも、不器用な愛情はそこに残った。そしてそれは確かに伝わったのだ。本当に巧みだと思います。公開されたての映画のように、折角ならば今ぜひ読んで欲しい 1 本です。

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

■ 今になって再びこういう作品を描く吉田秋生はやはり図抜けた才能だと思う。

マンガ愛好家 / タケウチ

■ 文句のつけようがなく、うますぎてなぜか逆にくやしくなってしまうぐらいの傑作。ちょっとした表情や会話で登場人物の性格や舞台設定が自然に理解できて、全く説明くさい場面がない。読むたびに日常の素晴らしさがじんわりと心に染み込んできます。この作品では救われないまま終わった藤井朋章の救いが描かれる「ラヴァーズ・キス」も込みで 1 位です。

書店員 / 池田 貴之

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

マンガ大賞ノミネート作品

Wings/ 新書館

「フラワー・オブ・ライフ」よしながふみ

選考員コメント

一次選考

■ よしながふみの技巧がすごい！　爆笑したり優しい気持ちになったり･･･じーんときて泣いたり。4 巻で最終巻なのですがもっともっと一緒に居たかったです。

アニメイト / 鈴木 寛子

■「大奥」でもいいのだが、最初に読むよしながふみとしてベストであるだけでなく、最良の 1 編であることは間違いない。「君に届け」とどっちにするか迷ったが、「君届」はまだ来年でも間に合うはず。昨年完結しており、二度と挙げられない本作をあえて推す。

読売新聞文化部 / 石田 汗太

■ 主人公が難病って言う設定、泣かせに来てる感じがして嫌いなのですがこれはそういうところがまるでない。とっても清々しいマンガ！登場人物がみんな魅力的でも派手じゃなくて、むしろ地味目で・・・。でもそれぞれ楽しそうにしてるところがたまらなく愛しいのです。

自遊時間三省堂書店 / 大塚 綾乃

■ よしながふみの作品は全巻投票したいのですが、ぐっとこらえて涙をのんで本書を選択。まさに夢のような学園生活。読んでると元気が出ます。連載が終わってしまって、ものすごく悲しかった 1 冊。

旭屋書店船橋店 / 安田 奈緒美

■ 凄みという点では「大奥」には負けるが、人と人とが係ることで生まれる喜びや悲しみを暖かく、時に切なく描いてくれた青春マンガの傑作。よしながふみのキャラクター達はどうしてこんなに魅力的なのだろう。無言のコマに描かれた表情やひとつひとつのセリフに、笑ったり涙ぐまされたり。何度読み返しても心がふるえるシリーズだ。

学校図書館司書 / 宇田川 恵理

■ 嗚呼、いい時代の少女マンガを読むようだ。かつて男子校で暗い 10 代を送っていた頃に憧れた、懐かしい正統派学園少女マンガの匂いを感じる。ラブ度が薄いのもまたいいよね。そしてエンディングに…不覚にも泣けた。

コミティア実行委員会　代表 / 中村 公彦

■ よしながふみファンとしては、大奥ときのう何食べた？とどれを推すか迷いまくりましたが、最終巻の展開でこれに一票。本気で泣きました。

web デザイナー / 河本 知香

マンボ賞 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

二次選考

■ ０７年に４巻で完結。よしながふみ版「中学生日記」と呼んでいます。いや、舞台は高校ですけども。フラワーオブライフ。「花」を描くことは、オランダ１７世紀・フランドル派絵画を引き合いに出すまでもなく、メメントモリの有名なアイコンであったな、と改めてはっとさせられました。死を忘れるな。わたしは、WINGS 誌上の連載で読んでいたのですが、完結したいまだからこそ、まだ未読のひとには、ぜひ、この機会に一気読みというか通読をおすすめします。連載もののまんがには、連載をリアルタイムで読む面白さと、まとまった巻数で読む面白さ、ふたつの楽しみがあると思うのですが、この作品のラストは、たまった巻数を通読するのにむいている気がします。はっと意表を突かれる感じが、より鮮烈に感じられるんじゃないかと。

料理研究家 / 福田 里香

■ 自分にとっては 2006 年の作品であり、2007 年に選ぶのは違和感がありますが、インタビューをした作品でもあり、自分とよしながふみ先生を引き合わせてくれた作品でもあるので思い入れが深いです。とらのあなとしても、これは売らないといけない作品ですし、オールタイムベストと言える作品なんじゃないでしょうか。今回の中ではダントツの１位です。

コミックとらのあな・書籍バイヤー、「とらだよ。」SD/ 塚本 浩司

■ 善人でも変人でも、内面の繊細微妙なカゲが巧みに描き込まれているので地に足のついた人物と感じられる。そのため、少しキレイゴト過ぎるような楽しい楽しい学園生活が、素直に楽しめ、素直に憧れを抱けるものになっている。教室の中の狭い人間関係を描き込んでいけば、ついつい息苦しく重くなりそうな展開となる（「鈴木先生」みたいな）ものだが、コミカルなデフォルメキャラに切り替えてその息苦しさをフッと逃す作者の呼吸の巧みなこと！　そのうまさに乗せられ、気づかぬうちに読者自身の学生生活の思い出もどこか美化され浄化されてしまう。そんな力を持った作品だ。

朝日新聞記者 / 小原 篤

■ はじめは友人から借りて読んだのですが自分用が欲しくなり購入…。登場人物のささいなやり取りにものすごくハッとさせられるのです。そして登場人物がハル太、翔太を筆頭として皆愛らしい…。その中にひときわ輝く、くせ者真島がまたいいスパイスになってます。今時こんないい子ちゃんな高校生いない！！と思わなくもないのですが案外本当はこういう一見地味な子たちが、それぞれ楽しくすごしているんじゃとちょっとうれしくなってしまうんです。

自遊時間三省堂書店 / 大塚 綾乃

■ よしながふみさんの作品の中でもかなり面白いと感じました。主人公のキャラクターもよいですが、周りのキャラクターもよく立っていて、読んでいて飽きない作品でした。ヲタクには嬉しいネタもあちこちに盛り込んであり、楽しめました。

フィットワン所属・グラビアアイドルの威を借るヲタク / 喜屋武 ちあき

■ 学校生活、夢、友達、恋愛…人生でほんの一瞬の青春時代がコミカルに描かれていて面白い。真島のキャラクターは強烈に感じたけど（笑）、ほとんどが平凡で、皆が皆人間臭くて、それが凄くリアル。だから共感出来るところが沢山あった。花園家の家族愛、クラスメイト同士の友情、なんだか温かくて素敵。

シンガー / 山野井 千佳

■ すげーいい

文筆業 / 海猫沢 めろん

■ 最後までよんで、やっとこのタイトルの意味がわかりました。あとから感動が追いかけてきます。

アバンティブックセンター京都店 / 中村 真依子

■ よしなが作品のノミネートが重なっていますが、いちばん楽しんだのはこれでした。「学校」というものの楽しさが、結晶化されていると思います。

ダ・ヴィンチ編集部 / 関口 靖彦

2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

■ よしながふみの金字塔！笑って、温かい気持ちになって、そしてじーんとくる。１コマ１コマに惹きつけられる最高のマンガです。友だちや家族に改めて感謝したくなります。

アニメイト / 鈴木 寛子

■ 文句なしに大好き！もう終わってしまったのが悲しすぎます。ありそうで実はありえない、夢のような学園生活。彼らに出会っている間、最高に幸せな気持ちになれました。

旭屋書店船橋店 / 安田 奈緒美

■ 読みながら何度涙したかわからない。笑えるくせに心に刺さる、そのネームのなんとうまいことか。登場人物の表情やセリフのひとつひとつが読後も心によみがえる。くりかえし読みたい名作であると思う。

高等学校図書館司書 / 宇田川 恵理

■ もう好みとしか…。好き嫌いは別れると思いますが、中毒性のある作品だと思います。

web デザイナー / 河本 知香

■ いま選ばないでどうする！と思うので。主人公に恋愛をからめなくても、ドラマは描けるのだということをしみじみ感じさせてくれた、青春群像ものの傑作だと思う。「普通」であることを許されるやさしい作品。マンガのキャラには突出した能力や、人とは違う「何か」をつい望んでしまうけれど、そうじゃない作品もあることがとてもうれしい。

ライター / 山本 文子

■ これこそエヴァーグリーンでしょう。悩み多き青少年はみんな読むべき。よしなが作品が三つもノミネートされているのはどうなのか、という気もするが、それはひとまず置いておいて、投票が割れる可能性がひじょうに高いように思うが、レギュレーションを考えたら今回しか投票できないのは本作だけなのだから当然これしかない。記念すべき第一回の受賞作としてもっとも相応しいと思うし、これからどう展開するかわからない作品に一回目から授賞するのは賞としてどうなのという気もする。

マンガ愛好家 / タケウチ

■『大奥』はまだまだ先がありそうなのでこちらを。名品と呼ぶにふさわしい出来でした。

無所属漫画好き / 山形 武大

■ 短い学生生活の儚さ、楽しさ、切なさを書ききった作品ですね。なによりも全４巻で終わらせている（今回のノミネートで完結作品唯一ですし）のが凄い。

書店員 / 渋谷 孝

■ よしながふみという作家の才能にはもちろんだが、なによりその「全力」ぶりに圧倒される。絶対に伝えたいことがあって、でもそれだけに持っていかれないようにふんばって、漫画としてのおもしろさを損なわぬよう、全力で、気をくばって、描いている感じがする。流す、ということがない。特に４巻の怒涛の展開は、必然性があるだけに読むほうにもかなりの気力を強いるだろう。けれど、ラストのせつなく美しい花吹雪に、いろんな気持ちが溶けていく。

漫画ライター / 門倉 紫麻

■「人間は好きな人以外とでもセックスすることがある」これは真理じゃないかなぁ。先に何があるかわからないからやっぱり今を大事にしたい。過去をせめるよりも許す優しさ深さを常に持っていたい。

ヴィレッジヴァンガード下北沢 / 久保 朝美

マンガ大賞 Cartoon grand prize 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推し

マンガ大賞ノミネート作品

別冊マーガレット / 集英社

「君に届け」椎名軽穂

選考員コメント

一次選考

■ 女同士の友情が心にしみる少女漫画です。なぜか不気味な人というイメージのため、クラスで浮いた存在の主人公・爽子が、クラスの人たちと「友だちになる」過程が、すごく良い。少女漫画なので、恋愛も絡んではきますが、まずは女の友情部分をじっくりと読んで欲しいです。

日刊スポーツ新聞社・記者 / 下岡 真由美

■ しばらく少女マンガから離れていた私がぐっとはまったのはこのマンガがきっかけです。爽子の素直な感情に心が洗われたり、やさしい気持ちになったり、自分も素直になろうと思ったり。そんな爽子が好きになる相手の男の子が、もう、もう、マンガの中でしか絶対会えない男の子です。さわやか１２０％。「星の瞳のシルエット」の久住くん以来にはまりました。

演劇集団キャラメルボックス / 青山 千洋

■ くらーい（見た目が）主人公が何と言ってもユニーク。ヤンキーな友人２人とのボケとツッコミも笑わせてくれます。拳と拳で仲良くなる少年マンガのように、涙と涙で凶悪ライバルと仲良くなってしまう展開は、見事な力業です。

朝日新聞記者 / 小原 篤

■ 青春やね。二巻で号泣。

シンガー / 山野井 千佳

■ なんという愛らしさ！なんといういじらしさ！ここしばらくの少女マンガのなかで一押し！です。恋愛と友情をゆっくりと育てていく様があまりにもまっすぐで、見ているこっちが照れてしまう場面多数。とにかく応援したくなるマンガです。

書店員 / お茶屋の煎

■ 爽子が！かわいすぎる！　本当に謙虚なひとは、自分のことを「謙虚」だなんて思わないはず。ってことを、本当に徹底して描くと、こうなるのでは。「謙虚」エンターテイメントです。まずは友達、そして少女マンガらしく、恋愛に立ち向かってますが、恋愛が終わってもこの話は終わらせないで、ほかの問題にも、この謙虚さでぶち当たっていくところを、ぜひ、ぜひ、読みたい…

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

■ 実はあまり期待せずに、ジャケ写買いならぬ「表紙買い」したのがきっかけ。昔「エンジェル伝説」という話があったが、ああいうストーリーを予想して読んだら大間違い。爽子ちゃんの純粋さと風早君のつっこみを入れたくなるような爽やかさっぷりがおもしろい。また、登場人物に悪い人がいなく読んでいても全く嫌な気持ちにならず楽しく読めるところが良い。

宣伝 / たけ

■ とにかく主人公爽子のキャラクター設定がいい。他者と係れることを素直に喜び、一歩一歩成長していく姿には心励まされる。恋愛マンガの要素もありながら、女の子同士の友情をあたたかく描いている点がいい。共感を持って読む女子高生も多い。

学校図書館司書 / 宇田川 恵理

マンガ大賞 cartoon grand prize 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

二次選考

■ これも自分にとっては 2006 年の作品であり、選ぶには違和感がありますが、売り手として、3 巻がわずか 30 冊！の売れ数だったのを 4 巻で 400 冊にできたのは嬉しかったです。少女マンガに触れる機会が少ないアキバ系のユーザーでも、きちんと紹介すれば売れると実感できた作品として印象深いです。インタビューしたい作家さんですけど、札幌在住のようなんですね。残念・・・。

コミックとらのあな・書籍バイヤー、「とらだよ。」SD/ 塚本 浩司

■ 少女漫画の定番的なストーリーながら、「人と出会うこと」「人を愛すること」の喜びをここまでキラキラと描いた作品はそうそうなかった。

コントユニット「アンチバッティングセンター」代表 / 増山 寿史

■ 文句なしにこれです。数年ぶりにまんがを読んで熱くなりました。

演劇集団キャラメルボックス / 青山 千洋

■ 文句なしの 1 位に推します。「ありえね〜」などと呟いてしまいながらそれでも楽しく読めてしまう。だいたい漫画というもの自体が「ありえない」ものを「視覚的にありえる」と思わせるのではなく「視覚的に楽しませる」ものだと思っています。なので、この作品はオーソドックスな少女漫画でありながら男性でも読後に爽快感＝視覚的に楽しむことができた感覚を味わえるということで、やはり一押しさせていただきます。

メガマソ / 涼平

■ ここ数年の少女マンガの中では、ダントツのおもしろさ。少女マンガの根本である『恋愛』『友情』『いじめ』『純粋さ』が詰め込まれた良作。なんと言うか、とにかく爽やかな風が吹き抜ける。少女マンガにエロは不要！やっぱこれだね！と言う感じ。汚れた心を、涙と一緒に洗い流される。男性にも是非読んで欲しい、純・少女マンガ。

三省堂書店神保町本店 / 赤坂 真実

■ きた！直球で来た。こういう恋愛学園物ってなんだか美男美女がそこまでうまくいくのか！？って内容が多くて嫌いだったけど君に届けは何か違った。爽子の不器用なまっすぐさにキュンとし友情にウルッときたっす！いやー、なんかすげー良かった。

カメラマン / 平沼 久奈

■ まっすぐな気持ちが読んでいて胸を打ちます。読んでいて何回泣いたかわかりません。

啓文堂書店府中店 / 山本 仁美

■ 今回心がけたのは、ひとつ、「知らないマンガは一回読むだけ、知ってるマンガも一回一気に読むか読まないで読み返さず評点入れる」と、だって迷うんですもの。さて、この『君に届け』と『フラワー・オブ・ライフ』は僕の中では同ジャンル (学校モノ？）のため、はじめから「どちらか一方、あるいは両方選びたい」と思っていて、どちらもはずすという選択肢はなかった。そもそも違うマンガを比べるなどということ自体、ナンセンスなんだけど、よしながふみさんの作品はそのぐらい懐深いということで許してください。ごめんなさい『君に届け』の話。でした。エンターテイメントって結局、「お約束」と「裏切り」だとおもうんです。マンガにも当然それはあてはまるわけで、『君に届け』はお約束の題材を選んでおきながら現在？現代のティーンが引っかかってる悩み、楽しみ、面白さ、せこさ、ダサさ、その根っこにある年齢関係なしに結構表に出さないけど誰もが大事にしてる、「ああわかるわかる」という部分を非常に今度は非凡に見せていってます。でも基本は「お約束」。ただし超一点突破。２巻。２巻です。２巻の一点突破具合がすごいです。４巻５巻は２巻ほどの突破力はないもののだからこそ６巻以降を期待させるその「期待度」に一票入れることにしました。ちなみに自分２巻の最後でマジ泣きしました。30 過ぎのいい大人がマンガで泣くなど、、あっていい！！

ADK アーツ・DDF/ 小林 智之

■ くすぐったくなる様な純愛、温かな友情、不器用で優しい主人公の成長と共に広がっていく世界。何度読んでも涙が出るし、笑顔になれる。主人公の純粋さには心が洗われます。どのキャラクターも凄く愛らしいです。勇気と優しさと感動を与えてくれる作品。最高！！

シンガー / 山野井 千佳

■ まず､このまんがを載せることを是とした｢別マ｣編集部の懐の広さに敬意を。もちろん､それは､作者のキャラクターの作り込みの個性と、あれだけ変哲もないエピソードから巧みに物語を構築していくネームの力があればこそであり、編集者がそれを信頼しての幸せな結果ではあるのだが。そして、｢君に届け｣というこれまたありきたりのタイトルに込められている思いと力強さを今改めて感じたい。｢届いてほしい｣対象である｢君｣とは誰なのか？　シンプルな言葉とは裏腹に（いやだからこそ）、含まれている意味は多分に重層的である。その意味でも、このまんがのヒットはうれしくてたまらない。

同人誌研究家・まんが評論家 / 三崎 尚人

■ 主人公爽子の純粋さに、心あらわれます。少女マンガの主人公が純粋すぎると、その設定だけでイラっと来る事もありますが、爽子にはその嫌味さが全くなく、読み進めていくうちに、私の黒い心がキレイになったような錯覚に陥りました。夢中になって一気にペロッと読んでしまったマンガ。

施設職員 / 早道 奈美

■ メディアが報じるような、あるいはケータイ小説がしつように描くような、そんな、仮にあったとしても１０代のしょせん一側面なのだろう“超しんどい現実”を後追いする｢リアルな｣作品を目にしますが、この作品は読み手がマンガで読んでみたい“ありそう・だけど・実はない”人間関係をごく自然に描ききることで、かえって｢あんがい１０代ってこうかも｣的なリアリティーを獲得しているように思います。いまさら言うまでもないことですが、有名ホラー映画のキャラクター名をあだ名に持つ主人公の境遇をはじめ、いくらでもシリアスにダークに展開できる設定なのに､その線を軽くスルーして｢こんなふうに“ともだち”とかかわり合いたい｣と読む者に思わせてしまう、でも現実にはないだろう人間関係とコミュニケーションを、読み手の気持ちをぐっとつかむように読み通させてしまう２巻のエピソードはやっぱり秀逸。斜に構えて読むことを許さない正面突破の正攻法の描写がクサくならないのは、そこに至るまでの日常のあれこれ（小技の効いたギャグを含む）を、作者が丁寧に、照れずに描いているから、かもしれない。　ひとりだけ抜き出せば、やっぱり今やいささか現実離れしているのかもしれない主人公・爽子の設定や描写を、取り巻く矢野･吉田の２人やピンといったキャラの立った脇役が中和していることが、いまどき珍しい｢放り出さずに読めるまっとうさ｣の理由なのだと思いました。こういう人間関係はやっぱり現実社会ではファンタジーなんだけど、大人の立場で読んでいても醒めないファンタジーなんだろう、と思っています。

全国紙記者 / 天野 賢一

■ なんという、可愛らしい話なのか！最初の１０ページ足らずを読んだところですでに夢中でした。心理描写の巧みさと物語の面白さ (笑いの部分含め) が秀逸です。いじらしい爽子が、幸せになりますようにとただ祈らずにはおられません。(ああでもどうかそのままの爽子でいて！と思う自分もいたりして…←肝試しで脅かして欲しいらしいです (笑))

啓文堂書店　吉祥寺店　コミック担当 / 山川 美香

■ やっぱり青春＝学生 × ラブです。暗い女子はポテンシャル高いんでしよ。これははずせない。

少年カミカゼ / 和教

■ 爽子はで学校人たちからので目が合うと呪われるなどと誤解を受け村八分。でも爽子の心はきれいで前向きです。そこがこの話の良いところ読書感がさわやかです。風早くんは付け足し。このまんがは女の子がみんな一生懸命青春してて良い。

福家書店福岡店　販売係長 / 日高 礼子

■ 登場人物全員が可愛すぎる！多くの読者が、かつて、あるいはまさに今、そうであったように、そうであるように、正確には｢そうでありたかったように｣まっすぐに、真っ当に、ひとを好きになっていくやつらのマンガです。少女マンガのまさに王道。

gekka blog/ 齋藤 正篤

■ ｢君に届け｣はドロドロした少女漫画の苦手な私にはとても読みやすい作品です。貞子ちゃんのちょっとズレた真っ直ぐさが良い味出していて従来の少女漫画とは一線違い、ハラハラしつつもイヤな気持ちになる事なく読み進められる貴重な作品です。個人的には風早くんとの色恋沙汰より矢野ちん達との友情関係の方が心配でならなかったので、2 巻では不覚にも泣いてしまいましたが、その分 3 巻では矢野ちんともちづちゃんともかなりラブラブしていて嬉しかったです。ただ、貞子ちゃんが風早くんへの感情を自覚してしまったので、今後どういう風に話が進んでゆくのかちょっと気になります。

株式会社 TSUTAYA/ 豊島 さやか

■ 見たことのない性格や能力の組み合わせのキャラクターに出会うと、興奮します。野球のエースといえば、実力があるのが当たり前なのに、武器になる癖はあるけど絶対的な実力はなく、しかも性格は卑屈、という『おおきく振りかぶって』の三橋、悪役はクールで強いか、おちゃらけてて弱いか、だったのが普通なのに、おちゃらけてて強い悪役だった、『機動警察パトレイバー』の内海課長、そういうキャラクターが出てきたマンガには、今までに味わったことのない、新しい、すごい面白さがありました。　で、この『君に届け』。

明るい中心的な存在だったり、逆にコンプレックスがあったり、というのが学園マンガの女性主人公の定番のはずなのに、このマンガの主人公、黒沼爽子は、ルックスはめちゃくちゃ暗く見えるのに、コンプレックスは一切なく、謙虚！　徹底的に、謙虚！　その謙虚な性格で、友達、恋愛、とか、そういう問題に対応していきます。　ヒーローが強力な能力で打ち倒していく爽快さはもちろんエンターテイメントなんだけど、『謙虚』に物事に対応していくのが、こんなに、こんなに、見てて爽快だなんて……！　今描かれている問題だけじゃなくて、その先の人生のいろんな問題に、この性格でぶち当たっていくところを、ぜひ、ぜひ、見てみたいです。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

マンガ大賞ノミネート作品

MELODY / 白泉社

「大奥」よしながふみ

選考員コメント

一次選考

■ 男女逆転の「大奥」。もちろん将軍さまは「女」。ＢＬ系でも人気が高い、よしながふみ先生だからこそ生まれた作品。人情の機微だけでなく巧妙かつ精緻に描き出されてる大奥逆転世界。本物志向がさらにこの作品の奥行き生み出している。まさにＳＦ大河作品。

本と文具ツモリ / 津守 晋祐

■ 単純に男女を逆転させただけだとしても、それなりにおもしろくはなるだろう。しかしここまで、整然とした逆転の理由が用意され、逆転したがゆえの懊悩・違和感がきっちり描かれしかも無理がないというのは凄い。１巻が発売され、読んだ時点ですでに、なんという作品かと脱帽した。さらに、時折史実とリンクする――例えば、女性達が髪を結い始めたことについて。実際に武家女性の髪形がこのころに変化していったと思うが、それがこの作品ならではで且つさらりと納得できてしまう根拠によって為されている。このくだりを読んだとき、粟立つようなかんじがした。これからこの「歴史」がどう描かれてゆくのか。そしてそれを知った吉宗は何を思うのか。先が最も待ち遠しい作品である。

高校漫研顧問 / 幸

■ 日本というこの国で、女が社会の中心となるにはどのような可能性があり得るかということを実験している作品のように思えます。読んでいるこちらも「その手があったか」とゾクゾクしています。

おたく文化史研究・男やおい読み / 吉本 たいまつ

■ どう展開されるのかまったくよめないので続きが気になって仕方がない！でもそれが気持ち良い「男女逆転大奥」の物語。積み重なった人の想いが歴史になるんだと思いました。

恵文社バンビオ店　文芸書・文庫担当 / 大瀧 彩子

■ 男女の役割が反転すたもうひとつの江戸時代を描いた SF 時代劇。おいしい料理を描くことで人気の高いよしながふみさんが、この作品では、一転、料理をほとんど描かない。しかし、ごく稀に登場する料理の布石がものすごい。３巻では、いよいよ男女反転世界の謎が解明されつつある。読み始めるなら今。

料理研究家 / 福田 里香

■ よしなが流大奥絵巻。男女逆転のパラレルワールドなんてこと忘れるくらい、とにかく物語の世界に引き込まれてしまいます。時代に翻弄されながら強くしなやかに生きる登場人物たち、ひとりひとりが魅力的に描かれています。特に女性のたくましさは美しい！読むたびにやっぱりよしながふみはすごい！と思ってしまいます。

主婦 / 紺野 泉

■ 男女逆転した江戸時代という奇想天外な発想、秀逸なキャラクター設定、感情のひだの奥底まで描く画力とせりふ、どれをとってもすごいというしかない。この作品が読めて幸せだと新刊が出るたびに思うシリーズだ。

学校図書館司書 / 宇田川 恵理

■ 今一番続きが気になるマンガです。テレビでなく映画でなく、漫画だからこそゾクゾクする場面があって、よしながふみはすごい！と改めて感じる作品です。

アバンティブックセンター京都店 / 中村 真依子

二次選考

■ 男女の役割が反転した徳川幕府を描いた SF 時代劇。文句なくおもしろい。０７年に出版された３巻には、なぜ、そうなったかの謎が解き明かされつつあり、今が読み頃。今後の展開への期待感を込めて、一位に押しました。どう決着がつくのか、考え出すと眠れませんね。うまそうな食事シーンを描くことで人気のよしながさんが、この作品ではほとんどまったく、フードシーンを描いてない、という展開にも刮目。たまに出てくると……すごいことになったりして。他のよしなが作品とフードの登場の仕方を読み比べてみるのも、おもしろいです。

料理研究家 / 福田 里香

■ 最終候補１２作のうち３作がよしながふみという異常事態。これだけで、この作家が「ベスト・オブ・ザ・ベスト」であることが確定したが、ではどの作品が「ベスト・オブ・よしなが」なのか？と考えた場合、「フラワー・オブ・ライフ」に未練を残しつつも、やはりここは「大奥」だ。物語のスケールといい、人間ドラマの面白さといい、深いテーマ性といい、比肩するもののない傑作。しかも、実写でもアニメでも再現不可能。この人のこのマンガでしかあり得ない表現だ。一見、「影武者徳川家康」みたいな趣向に見えながら、ジェンダーをめぐるテーマがきちんと現代的というのも秀逸。３巻という区切りも、賞を与えるにいい機会だと思う。

読売新聞文化部記者 / 石田 汗太

■ 男女逆転大奥という発想はもちろんの事、時代に翻弄された人達の心情をよく描いていてぐいぐい世界に引き込まれます。

啓文堂書店府中店 / 山本 仁美

■ 単に男女逆転をのみ描きシチュエーションの面白さを見せるのではなくそうならざるを得なかった背景を描きそうなったが故に起こる状況を描きそしてそうなった果てに至る世界を描こうとしているＳＦ的なマインドに溢れた作品である点を評価して１位に推す。問題はその帰結で２１世紀の現代をそのままに途中で世界が戻るのかそれとも作品の状況がそのまま続いて現実とは違う２１世紀が訪れるのか、想像するだけでも楽しくまた厳しくもある。

書評家 / タニグチリウイチ

■ 仮想の江戸時代を背景にしたことで、定評のあるストーリーテリングのみならず、ドラマチックなコマ割りも他作品より効果的に感じる。また、近年のヒット作に多い主役の長いモノローグがなく、セリフや表情で感情を演出しており、マンガとして素晴らしいと感じた（モノローグをやりたいならマンガではなく小説のほうがいいのでは、と思っているので）。先行作品や研究も進んでいる時代背景を下敷きにしているので、どこまで史実や風俗と折り合いをつけながら話が進むか期待したい。

生活日報 / 佐々木 愛

■ 男女逆転大奥という発想がなんといっても秀逸。また、設定のユニークさによりかかることなく、それ以降の物語がしっかり構築されているのも良い。

ライター / 芝田 隆広

■ 設定にドギモぬかれました。よしながふみというひとがいる日本に生まれてこの作品を読めてよかった。

アバンティブックセンター京都店 / 中村 真依子

■ なぜこうも理路整然としているのか。納得させられてしまうのか。男女の逆転、社会の変化、そしてキャラクターたちの変化。全てにおいて、きっちり整備された道を、涼やかな顔で飄々と、そして堂々とゆくような展開。はらはらしながらもそれを辿っていくのが、たまらなく愉しい。もちろん、人々の葛藤も懊悩も変化も含まれていて、繊細さも併せ持つわけだが。ともかくも目が離せない。

高校漫研顧問 / 幸

■ 男女逆転した江戸時代というとんでもない設定と、よしながふみらしい情感が一体となった堂々たる作品であると思う。また、絵で魅せるコマで魅せるという、小説でもアニメや実写でもできない、マンガならではの表現のできる作家よしながふみの本領が十分に発揮されている点も評価した。今後の展開が本当に楽しみな作品である。

高等学校図書館司書 / 宇田川 恵理

■ 将軍と、それに使える者たち。そこにあるべき男女の性別が入れ替わっている。将軍が女で、大奥に仕えるものが男。この物語の表面だけを取って、簡単に説明をしたら、もしかしたらそういうことになってしまうのかもしれない。しかし、それだけではないのだ。はっきりいえば、この物語はそういう物語ではないのだ。ただ、生き延びるために。「こんな状況で」どうやったら、家族が養っていけるのか。どうやったら、今までと同じ暮らしが続けられるのか。こんなに、ひとがばたばた倒れていく状況で。それは、将軍家光の時代――襲いかかった前代未聞の災厄。『この国は　おそらくもうすぐ滅びる』そうつぶやいた春日局の言葉が本当になるのか。それは、ぜひ皆さんの目で確かめてみて欲しいのです。これほどのスケールを持った話は、そうあるものではありません。

啓文堂書店　吉祥寺店　コミック担当 / 山川 美香

■ このラインナップから「物語力」がもっとも優れた作品を選ぶのであれば、「大奥」以外にあり得ない。崩壊しないぎりぎり一歩手前まで、人の情というものを描いていると思う。この絶対値はなかなか超えがたかろうなぁ。全部すごいので、推薦の言葉があまり出ません。読まれるべき作品。

gekka blog/ 齋藤 正篤

■ 正直、これまで「女性マンガ」を（食わず嫌いもあり）面白いと思えず、避けてきた自分にとって、良い意味で裏切ってくれました。これは面白いです！　自分と同様、少なからずいるであろう「女性マンガ」アレルギー的な男性に是非読んでもらいたいですね。

凸版印刷 / 紺野 慎一

■ 男女逆転の「大奥」で歴史に翻弄されながら強く生きる女たちと、様々な登場人物の人間模様がドラマティックに描かれている。読み始めるとその世界に引き込まれてしまう、そこがよしながふみの凄いところだと思う。自信をもっておすすめしたい！これは凄い一冊ですよ。

主婦 / 紺野　泉

■ よしながさんの作品を読むと、いつもこの方は本当に頭が良いなぁと思います。圧倒的なセリフの多さを、苦もなく読ませてしまうのは本当に凄いです。大奥は、まず最初その設定に驚かされましたが、読み進めてゆくと本当の歴史はこうだったんじゃないかと思わせる程の設定の綿密さとその説得力にただただ感心しました。個人的にはお楽の末期のセリフに不意打ちでほろりとさせられました。

株式会社 TSUTAYA/ 豊島 さやか

■ マンガが生み出す仮想空間を強力に具現化するのはリアリティである。大奥はその複雑な世界をすんなりと見せてくれる。多くの作品はストーリーを無視し、絵のぱっと見や戦いで勝利するものが好評を得る事にあふれる。私は多摩美とダンスで表現を学び、さらにどっぷりエンターテイメント会社に就職しているが、最近特に強く感じるのは読み手や受け手の感性を昇華させ、成長させる作品がいかに大切かと言う事である。マンガ会の文学や芸術として価値を高めてくれるのはこういった作品だと実感する。

ウォルトディズニー・ダンス哲学者 / 新井 文月

マンバ大賞 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

マンガ大賞ノミネート作品

ウルトラジャンプ / 集英社

「皇国の守護者」佐藤大輔　伊藤悠

選考員コメント

一次選考

■ 戦争漫画にもいろいろありますが、「皇国の守護者」は面白かった。主人公の直江中尉の心情描写、戦闘が始まる前には震えながらも顔が笑ってしまうというシーンなど、ゾクゾクしました。　原作の小説は読んでいないのですが、原作も読んでみたくなりました。

日刊スポーツ新聞社・記者 / 下岡 真由美

■ 格ゲーや「009」等のパロディ同人の頃から抜群のうまさを誇り、商業デビュー後も高いレベルの作品を発表していたにもかかわらず、いつも今イチ人気には欠けていた伊藤悠。その才能が正しく評価されたはじめてのヒット作がこんな形で終わりを迎えようとは。淡々とした最終回とは裏腹に、最終巻後書きの平静さを装いつつもにじみ出る無念さには、比喩でなく涙がこぼれた。その有り余るパワーは、是非とも次作、オリジナル作品においてこそ結実させて欲しい。

同人誌研究家・まんが評論家 / 三崎 尚人

■ 打ち切りに近い形で終わってしまったマンガをこの賞に推すのは随分悩んだんですが、あまりにも残念であまりにも悔しくてつい選んじゃいました。これほど所詮読者なんてカヤの外なんだな、ということを思い知った作品はありません。最初にこのマンガをすすめてくれた、どまにやな知人も、「佐藤のことだからどうなるかわからんけど」みたいなことそういえば言ってた、って終わってから思い出したわ！でもこのコミカライズが近年稀に見る素晴らしい出来なのは疑いの余地のないことなのです。「リアルなファンタジー」という矛盾した言葉を体現する骨太なストーリー、女性だと知ってビックリしつつ納得した引き算のセンスが抜群な絵柄、ああもうほんとに残念です。万が一の連載再開の希望をこめて推します。

ヴィレッジ・ヴァンガード立川ルミネ　店長 / 大山 敏樹

■ これまた、完結したので最後のチャンスと思い投票。原作小説の力もあるだろうが、漫画としての面白さの本質は伊藤悠の画力によると信じる。とにかく、この絵が好きだ！　原作は続いているのに、途中で終わってしまうのは残念だが、原作はこの後、かなり凄惨な感じになるので、これはこれでいいのか……？

読売新聞文化部 / 石田 汗太

■ こんなに続巻が読みたくて胸掻き毟られる思いをしたマンガは近年ない！まさかの完結も 07 年 No.1 のビッグインパクトでした。主人公の青さも、乾いているようでどこか色気、湿り気を匂わす絵も素敵すぎでした。

ヴィレッジヴァンガード下北沢 / 久保　朝美

■ これからという時のまさかの完結。続きが読みたかったです。戦争全体の動き、戦場の状況、戦闘の個人の心理までが並列でわかり易く読める構成・画力が素晴らしいです。

書店員 / 池田 貴之

■ 丁寧で的確な描写で、素直にうまいなーと思った作品。人に勧めるにはもってこいです。

web デザイナー / 河本 知香

二次選考

■ ５巻で完結してしまいました。原作はまだまだ続くので、正直もっと続きが読みたかった作品ではありますが、オリジナルなエピソードを交えたエンディングで、これはこれでありかな、と。展開される戦闘も、どうやって敵の補給経路、すなわち、食料を断つのか？という点に戦略が展開していて、文字どおり、地を這うような戦争の悲惨さをうまく描き込み、登場人物が誰もなにも食べないで、ボタンひとつで、いつのまにか戦争が進む、おしゃれ☆戦争系のまんがとは一線をかくしています。そして、サーベルタイガーがすっごくかわいい。ちゃんと餌をあげている描写を省かずに描いているところに好感が持てます（餌の世話をしないひとに動物がなつくってありえないですから！）

料理研究家 / 福田 里香

■ 架空戦記っぽくて、描かれるのは犠牲的な遅滞戦闘、トリッキーな頭脳戦を仕掛けたりもしないとあれば、好きになれる要素はなさそう…と思ったところが大違い。小心を冷笑で隠す主人公の冷徹果断、屈折した言動、自嘲まじりの独白が、ありがちな陶酔を打ち消すスパイスとして効いている。決めゴマのカッコよさにもシビれた。４巻から５巻の展開は異例の終わり方と言えるのだろうが、原作と切り離し、１～５巻を通して読むと、着陸用の滑走路をうんと長く使った、ぜいたくな余韻として味わえる。

朝日新聞記者 / 小原 篤

■ ノーマークだったのですが、ストーリーが渋く、また絵柄から想像を裏切らない？展開も息をつかせずコンパクトにまとまっていて読みやすかったです。こういったタイプの作品はあまり読まなかったので新鮮でした。

メガマソ / 涼平

■ 迷うところだが、他候補に比べてややマイナーなところ、完結しているため二度と候補にならないことを勘案し、この作品に肩入れする。候補作中、唯一「原作あり」の点もマイナスだろうが、それを補ってあまりある、伊藤悠の躍動感あふれる絵がすばらしい。それに加えて、「現状は、どう控えめにみても地獄だ」等々、熱い名セリフの嵐。これで燃えるなという方がムリ。戦場における真のヒロイズムとは何かを問う傑作で、水木しげるの「総員玉砕せよ！」など、真逆の作品と併読するのも意味がある。願わくば、新城とユーリアとの、立場が逆転した「再会」を、いつか続編で見たい。

読売新聞文化部記者 / 石田 汗太

■ ５巻で完結しているのが、とても惜しい！！　ぜひ、続きを書いて欲しい作品です。

日刊スポーツ新聞社・記者 / 下岡 真由美

■ 私も千早が欲しい！合間合間に見せる直衛の葛藤にぐっときた。正直あの感じで終わってしまったのが残念でたまりません。もー、続きが気になるってば。

カメラマン / 平沼 久奈

■ 一次審査まで、知ってたけど手に取らず、一次審査ノミネートされたことで読むことに決めた「出会えてよかった」系の作品です。選考員の皆さんありがとう。実はさらにその数ヶ月前 10 年来の友人にすすめられていて、その彼は、オタク友達としても僕と趣味がばっちりあうので、まあ、まず間違いないだろう。とそう思っていたわけです。自分からは絶対手を出さないタイプのカテゴリーですね。読まず嫌い。読んでみたら案の定、設定も内容も濃い濃い、濃ゆい。一冊読むのに 1 時間近くかかるのなんか他に知りません。内容が荒唐無稽だと最初は思っていたのだけど、主役の新城の心情（あ、韻ふんじまった）は意外と素直に受け止められる。日本でまともな企業勤めてて部下が少しでもいるなら誰でも共感できる、中間管理職ならさらに、そんな種類のものでした。日頃おもってても忙殺されてるけど、日本の企業のご都合はそもそもの軍国主義にアメリカ型の合理性をくっつけて、その矛盾の中ですり合わせた、いびつな形をしてると思う。世界を探しても結構稀有なスタイルだとおもうけど、なぜだか皇国をみてて、日本てのは資本主義じゃなく社会主義に近いんだなと改めて感じてしまいました。その中で身のおきよう、戦場という狂気、時間がないという現代人にも十分通じる不条理さと追い詰められた感じのなかで主人公が正解か不正解かわからずに行動を選択していくのが非常に自分達を見ているようで気持ちが悪いけど、目が離せない、そんな気分になりました。僕自身は最近は大企業に属しているけど、どちらかというと一兵卒ではなく、戦場から逃亡した挙句に戻ってきた「傭兵」のような立場なのでよけい何か見えてしまうかもしれません。表紙やタイトルやそれからくる雰囲気に過去の僕のように躊躇してるのなら、迷わず「読み」です。

ADK アーツ・DDF/ 小林 智之

2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一冊

■ 単純に言えば、もっともっと続きが読みたかった。もっと壮大なストーリを描けたはず、あの終わり方が納得できなかったので、逆に賞をとれば、また描いてもらえる可能性が出てくるのを期待しています。

韓国漫画専門店ＣＯＭＩＣＣＯＺＺＬＥ店長 / 野田 真人

■ 完結作だがあえて選ぶ。およそマンガの主人公とは思えぬ新城直衛の外見も含めた描写が素晴らしい。つくづく惜しい作品だと思う。

毎日新聞デジタルメディア局 / 渡辺 圭

■ 3 位は何にするか迷った。正直なところ、物語中途で終わりになってしまった本作に入れるのはどうかと思ったが、連載の間ずっと、すごく楽しませてくれた作品であることは間違いない。漫画を担当した伊藤悠の今後への期待も込めて。

ライター / 芝田 隆広

■ 非常に魅力的な作品だった。キャラクターの設定が絶妙で、セリフもうまい。、日露戦争を思わせるリアルな戦闘の中にサーベルタイガーや龍、超能力者などを配する絶妙な異世界感にも魅かれた。正直３位に選んだフラワー…」とどちらを取るか迷ったが、おそらく原作と大格闘の末描かれたであろう本作のスケールの大きさを評価した。

高等学校図書館司書 / 宇田川 恵理

■ これほどの作品がああいう最期を迎えたのはひじょうに残念。伊藤悠への投票ということで。

マンガ愛好家 / タケウチ

■ これから始まるであろう本土決戦を前に終わってしまい、トレーラームービーならぬトレーラー漫画という感じで非常に残念です。それでも、卓越した画力による戦場の臨場感は漫画を読む楽しみを再認識させてくれます。けれど決して戦争賛歌ではなく、命がけで戦っても守った市民から罵られる報われなさや、無意味な時間稼ぎで命を奪われる一般兵たちの虚しさ等、戦争というものが戦わされる一般市民である兵士たちにとっていかに無意味なものかが強く伝わってきます。

書店員 / 池田 貴之

■ 様々な小説のマンガ化企画が試みられる現在、その中でもマンガ表現としての魅力に溢れ、そしてなにより面白い作品でした。「負け戦」をいかに生き抜くのか、物議を醸した終わり方も含めてマンガと他メディアの今後の関係を問う際に大いに参照されることでしょう。

マンガライター / 会田 洋

■ 別のマンガ目当て読んでいた連載の掲載誌で読むまで、お恥ずかしいことに原作者も作画担当の漫画家の方も知りませんでした。それでも、第一話を読んで思いっきり引っ張りこまれました。私が読んだ漫画の数なんて知れていますが、それでもそんな経験はほとんど記憶にありません。戦争はどうしたところで無様でロクでもないものであること、そんな戦争に投げ込まれながら「自分の戦争」を断行することで血路を切り開く主人公・新城の姿、そして、それらを通して映される戦場の姿と英雄譚の矛盾を描き切っているところに読者を離さないこのマンガの魅力の本質がある気がします。画の勢いも話の説得力も十二分にあって、原作の魅力をキッチリ引き出しながら漫画としての面白さもたっぷり持っています。原作を描き尽くすのにどれだけかかるだろうかと心配するぐらいに楽しみにしていたマンガですが、諸事情で連載が終了してしまったのが残念でなりません。

眼鏡時空発生装置 / 田中 海渡

■ 色んな意味で07年最大の衝撃作。次の巻ががよみたくて悶絶する作品はダントツでこれでした。極上のリーダー論でもある。

ヴィレッジヴァンガード下北沢 / 久保 朝美

マンガ大賞 Cartoon grand prize 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推し!

マンガ大賞ノミネート作品

週刊ヤングサンデー / 小学館

「とめはねっ！鈴里高校書道部」河合克敏

選考員コメント

一次選考

■「帯ギュッ！！」で一世を風靡した河合克俊先生の満を持しての新作です。青春 × ラブコメ × 書道 !!!＝おもしろくならないわけがない !! 自信を持って人にプレゼントできる漫画ですな。ちょびっとですが、「帯ギュッ！！」のキャラも出てきて、そこも小学館ファンとしては壷です。今回は、ヤングサンデーでの連載ってことで、多少お色気もあって、すごく GOOD!! 三ツ星あげちゃう。

少年カミカゼ / 和教

■ ふつうの高校生書道部員たちの日常を描いているだけなのに、なぜこんなにおもしろいのか！しかももう一回書道やりたくなりますし…。地味に見える題材なのにちゃんとエンターテイメント。河合克敏は本当に上手いなぁ。

恵文社バンビオ店　文芸書・文庫担当 / 大瀧 彩子

■ 本屋で見つけたときは書道の漫画ってどうなのよ？位の気持ちで買ったのですが読んでビックリ。書道ってこんなにアクティブなのね、おもしれーって思っちゃいました。読んでいてそこまで読み手に考え込ませたりせず事が自然に繰り広げられてて人をいやな気持ちにさせずフラットだけど少し楽しい気持ちで読ませてくれてこれぞ漫画！！って感じでした。飛びぬけて凄い内容ではないけど 2007 年一番、目からうろこくらいに感じた漫画でした。

カメラマン / 平沼 久奈

■ くくくっ！と、忍び笑いを噛み殺すこと数度。そして耐え切れなくなり爆笑することも幾たびか。もう、ほんと、高校生って馬鹿よねえ！と、まるでわが事のように楽しんでしまいました。みんな本気で、だからこそとにかく可笑しい。すっきりと笑えるのが堪らない１冊。

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

■「書道」こんな取っつきにくいテーマで、ぐいぐいと引っ張り込まれると思わなかった。今イチオシ！

凸版印刷 / 紺野 慎一

■ 高校の文化部の理想像。中高生男子はみんな読むべき。

マンガ愛好家 / タケウチ

■ 高校生の書道部漫画です。読んだ後書道の通信講座をやりたくなります。

All Japan Goith/TA-SHI

二次選考

■ 河合克敏先生の代表作でもある「帯ギュ」は、自分が学生時代に柔道をやっていた頃めちゃくちゃ読んでいたのでした。とにかく大好きだったのです。俺は好きになった漫画家の先生は、もう、トコトンずっと追いかけていかないと気が済まないので、例えば連載が終わると次はどんな漫画を描いてしまうのっ！？と、無責任にワクワク妄想していたり、連載がはじまると狂喜乱舞してコンビニでも踊り出します。柔道漫画の次は「モンキーターン」競艇を題材にした作品。これにもびっくりしたけど…今回の「とめはねっ！」。この作品は、書道漫画っ！ありえねぇ〜！！でも…、おもしれ〜ぇ！！！毎度、現場のリアルな空気感が緻密に描かれていてるんだけど、さらっとしていて気持ちいい。傍観決め込んでいたとしても、いつの間にかひきこまれて河合ワールドのど真ん中にいる自分に気付くはずですな。「凄ぇや」と、いつも感心して感嘆の声を漏らし感銘を受けて感極まってます。

ＢＡＺＲＡ / 井上 鉄平

2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

■ 河合克敏先生には、いつも驚かされます。柔道、競艇、そして今度は「書道」。もちろん、面白い！「書道」が漫画になるなんて！！弘法筆を選ばず、との言葉がありますが、まさにその域に達する漫画家さんです（もちろんウラに緻密な計算があるのでしょうが・・・）。ぜひとも皆さんに読んで頂きたい作品です。

本と文具　ツモリ / 津守 晋祐

■ 書道という地味なテーマでよくぞここまで！学園ものがいくつかある中でどれも良かったのだが一番印象に残ったのはこの作品だった。

あゆみＢｏｏｋｓ仙台青葉通り店 / 土屋 修一

■ 書道でここまで広げられるとは。新しすぎる！そして感情の起伏が少ないのでこれぞ日常の中で楽しめるTHE マンガって感じがしました

カメラマン / 平沼 久奈

■ 書道という静の世界を取り扱いながら、笑いの要素があり、テンポのよい展開で集中して読むことができました。どんどん続きが読みたくなりました。

フィットワン所属・グラビアアイドルの威を借るヲタク / 喜屋武 ちあき

■ 読んですぐ完璧なマンガだと思った。ストーリー、画力、構成、キャラ…。よくマンガ雑誌の新人賞のページで応募作品が星マークで評価されているけど、それで評価されると全ポイントで５つ星という感じ。横綱マンガですね。そんな風に思うぐらい自然と引き込まれた作品でした。書道、習字のマンガとしてはもちろん、それを抜きにしても青春マンガとして面白い。いいなーこんな高校生活楽しいだろうな！これ読んだだけでも充分字が上手くなりますね。「おびぎゅ」「モンキーターン」と長大な良作を描ききった後、満を持して挑んでいる「とめはねっ！」いやー良いマンガですね。このマンガももちろん「買い」です！

デザイナー / 橘 千尋

■ こうきたか！と連載が始まったとき驚いた、高校青春書道マンガ！書道なんて一見地味な部活がマンガになるのか？とちょっと思ってしまったのですが参りました。おもしろい！コミカルタッチで高校生らしい青春な一面も垣間見せつつ、主題の「書道」について、書体や文字の意味、筆の種類まで、書の「道」の豊かさをきちっと描いている河合克敏の手法はさすがです！

恵文社バンビオ店　文芸書・文庫担当 / 大瀧 彩子

■ 作者の旧作同様、綿密な取材の成果が見られ、書道を習うにあたっての細かい描写はさすが。ずぶの素人の主人公が一歩一歩習得していく過程を描くのは、ハードルが高いと思うが、飽きさせずに読ませることに成功しているのでは（今のところ）。また、高校の部活をノスタルジックに書いているわけではなく、きちんと書道を軸に話を進めている点も評価できる。だいたい、読んでいてぜんぜんワクワクドキドキしないのにおもしろい、というのはすごいのでは。

生活日報 / 佐々木 愛

■ 文化系競技による学園ドラマでありながら、スポーツ漫画的な成長の物語に、性格の対照的な男女によるラブコメ、個性的なキャラの織り成す部活コメディと、いくつもの側面を持ったマンガであると同時に、それらが高いレベルで融合している良作。これは面白いよ。将来的にはドラマ化なんかもありえるかも。ウォーターボーイズといったあたりの青春群像劇として秀逸なのだ。また、書道というテーマに対しても、本物の書を CG 合成を用いて原稿に載せるなど本格的。読んでるとキレイな字を書きたくなるのだ。そしてなんつっても、登場人物がみんな魅力的ってのが一番。加茂ちゃんいいよな加茂ちゃん。

ひょうたん書店 / 勝田 康一郎

■ がんばれー

文筆業 / 海猫沢 めろん

■ 書道やる主人公が帰国子女って設定がいい！漢字なんか書けないでしょって思うけど、そこがすぐひっくり返され、またそのエピソードがよい感じ。マイナーなテーマを扱い、それを今の高校生が行っている実際の話をおりまぜてるのが、リアリィとして面白くなっていて共感できるのであろうと思う。漫画のタイトルが、「書道」！って感じがして思わず手にとってしまった一冊！オススメです！

デザイナー / 平沼 寛史

cartoon grand prize 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

■ これは本当に面白いです。最初「書道でマンガって？」と思ったのですが、読み始めたらとにかく楽しい。個性的な周りの人たちに巻き込まれていく主人公にめずらしく感情移入していて、読み進めるたびに「あらまあ」とか「ちょっとそれは」とか、笑ったり突っ込んだりしながら読んでいます。それにしても、もしかして本当に書道部は体育会系なのでは…(笑)望月さんの大きい『○』を書く姿が好きです。

啓文堂書店　吉祥寺店　コミック担当 / 山川 美香

■ すごく新鮮味を感じます。異色の題材であるにも関わらず、変にマニアックになり過ぎず、マンガとして素直に楽しめます。これから先の展開が楽しみなタイトルですねー。

凸版印刷 / 紺野 慎一

■ ベテランが手堅くも新鮮な味わいを出している良作だと思います。

無所属漫画好き / 山形 武大

■ フラワーオブライフもそうですが、学園青春モノに弱いのかもしれません…。題材は書道ですが、人間ドラマが読んでいて気持ち良い作品です。まだ 2 巻なのに登場人物多いっすよね。この著者は昔からそうですけど。

書店員 / 渋谷 孝

■ ある意味では、とっても典型的な青春部活モノではありますが、それでもお勧め。それも誰にでもお勧めできるというところでこのマンガを推します。舞台としては比較的珍しい書道部ではありますが、ボーイ・ミーツ・ガールと少年少女の成長という王道２大テーマを丁寧に描きながら飽きさせないのが素晴らしい。画とお話が高いレベルでバランスしていることと、特別すぎない設定でけれんみ無くドラマを仕立て上げてるところが、誰にでも勧められる最大の理由です。キャラクターやお話の魅力をここで語るのは野暮というものでしょう。まずは読んでみて下さい、と言いたいマンガです。

眼鏡時空発生装置 / 田中 海渡

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

マンガ大賞ノミネート作品

イブニング / 講談社

「もやしもん」石川雅之

選考員コメント

一次選考

■ 農業大学が舞台のお話。今まで、農業関係の漫画といえば、「夏子の酒」とか、何かものを生産することを主に描いているものというイメージが強かったけれども、この漫画は大学が舞台の青春（といっても、酒ばっかり造ってる）＆菌が主という今までになかった漫画。主人公は、菌を目で見ることができる特殊な能力の持ち主。顕微鏡並みにめちゃくちゃ目がいいというわけではなく、菌の妖精のようなものを見ることができる。この菌達がハンパなくカワイイ！主人公の肩にのっかり、いつも生意気な口を聞いたり、味噌やチーズにのっかってたり、S ケンしたりと、１．５頭身の菌どもが生き生きと自由に動いてるのも、この漫画の面白さの一つ。菌に対して作画はしっかり描き込んであり、ややこってり系。ストーリーもしっかりしていて、世界一くさいといわれる食べ物「シュールストレミング」といったマニアックな知識や菌についての知識も細かく文中に書かれている。ウワサでは県内の農業高校の図書室にもやしもんが置いてあるだとか…プロのお墨付きの知識量。色々な面白い要素がつまっていて連載が本当に楽しみな作品一つ難点をあげるなら、私の中で作品中かわいいと思える要素が菌＞女装した男の子＞ヒロイン達であること。がんばれ女の子！

高校美術教師 / 佐川 由加理

■ ２００６年１月１日、菌に出会う。菌にはまる。今にいたる。以上。タッパーの中から直保に話しかけた場面を目にした瞬間に、もうかもされた。いや、書店でポップを目にしたときからかもしれない。菌を愛し、ときに彼らに遊ばれている直保と、菌たちがいとしくてたまらない。なんでそんなにすきなのかわからないけど、あの菌のたたずまいと表情を目にしてしまったら、理由も根拠もどうでもよくなる。好きなもんは好きで、なんで好きなのかとかどこが好きなんだとか、そんなこと知らんわ！…と言うしか、もう。少し落ち着いて考えるとすれば、ときに繰り広げられる薀蓄が興味深い。１６話での直保や亜矢の言葉は素直に頷いたり共感したりした。プライドと、よいものに出会いたいと言う気持ち。酒でもそう、酒でなくてもそう。たとえば、本でも。ああでも、やっぱり第一に叫びたいのは、菌（と直保）がかわいくてたまらんということかもしれない。…文のなかの、無関係な「かもし」の部分にすら反応してしまう自分はもう、すっかりかもされきっている気がした。

高校漫研顧問 / 幸

■ 菌をディフォルメしたかわいい（マスコット）キャラクターにした発想力に脱帽です。

ひょうたん書店 / 勝田 康一郎

■ 今や社会現象とも言える、菌ブーム到来？王道だとは思ったのですが、投票せずにはいられませんでした（笑）アニメも予想以上の良いできで満足でした。個人的には、青カビ「クリソゲヌム」がかわいい♪

SHIBUYA　TSUTAYA　コミック担当 / 実松

■ 小学生の娘も大好きな 1 冊。農大の大学生活って、こんなカンジなんですかねえ（いやきっと違う）。すごく楽しそうです。

旭屋書店船橋店 / 安田 奈緒美

■ 主人公沢木を中心とした、ちょっと変わったゆかいなキャンパスライフが話の基本。だけど、どうやらそれだけでは終わらない模様･･･？語り口辛目な菌たちの活躍も魅力的な、他に類を見ない農大マンガ。今度のおまけは菌劇場の小冊子とかが付くといい。

書店員 / お茶屋の煎

■ 菌キャラのかわいさ、そして、菌蘊蓄のあまりの面白さに、へぇー！　って思いながら読めちゃう、言わずとしれた大ヒット菌マンガですが、実は、ボンデージだったりとか、ジブリ作品とか、大人同士の会話のやりとりだったりとか、フェチな自分だけのこだわりを徹底して推し進めてるのに超読みやすい、というところも、すごいマンガだと思います。しかし、欄外で笑い飯そっくりのキャラを、知らずに描いた、って書いてありますが、それもむしろ、芸人さんが好きすぎるが故の照れ隠しじゃないかなぁ。酒屋さんの息子も、ケンドーコバヤシさんそっくりだし。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

マンガ大賞 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

■ 選考にいれるか迷ったがやっぱり書いてしまった。もやしもん！菌を扱ったマンガですが、それだけではなく、内容が深いです。最後の落ちがつく所がいつも偉いなと思わされます。自分は、お酒をあまり飲まないのですが、日本酒を飲みたいと思わされた一冊。個々のキャラクターの特徴がとても面白く、次の巻が待ち遠しいと思えると思います。

デザイナー / 平沼 寛史

■ この軟弱系理系マンガがこんなに世間に受け入れられるとは嬉しい誤算でした。農学部卒といういまいち地味な学歴もこれでちょっぴり自慢になったり。

ヴィレッジヴァンガード下北沢 / 久保 朝美

二次選考

■ はやっているな〜と思いつつ手にとってみればもう「もやしもん」の世界です。作者の方の短編集や単巻完結の作品はすでに読んでいたのですがこういったながれでもやはり楽しく、設定などもこううまくおもしろいとおもわせる隙間をついてくる所がよかったです。

メガマソ / 涼平

■ デビュー当初から才気を振りまいていた著者は、革新的なアイデアをユーザーフレンドリーな表現に昇華してみせた。卓越したセンスと力量が生んだコミック界の特異点。こういう作品の誕生は極めて心強い。

書評系ライター / 福井 健太

■ 局地的なマニアな話題を分かりやすくコミカルに翻訳された作品

デザイナー / 佐藤 優

■ 菌が見えることによってもたらされる非日常もさることながら大学で起こる日常の愉快さがしっかりと描かれている点を評価。単純の蛍のゴスロリ姿が可愛らしいというのもあるのだが。

書評家 / タニグチリウイチ

■ 菌がかわいいすぎる。

生活日報 / 佐々木 愛

■ 蘊蓄漫画、キャンバスライフものとしても読めるが、やはり菌のかわいさが圧倒的。菌をあんなにかわいいキャラクターに仕上げた作者の発想がすばらしい。

ひょうたん書店 / 勝田 康一郎

■ 目に見えるものだけで判断してはいかんなと気づかされるマンガです。

アバンティブックセンター京都店 / 中村 真依子

■ 目下、単行本の発売日を最も心待ちにしている作品です。新刊が出るたび、ページの端まで、コマの隅までスルメのように味わって読む（時間かかる！）、そんな「マンガを読む醍醐味」を満喫させていただいてます。うんちくマンガのうんちくの処理の仕方というか、ストーリーへの溶け込ませ方が巧みなのが、そんな読み方を可能にしている所以でしょう。そして、エキセントリックなのに「ほんとにいそう」と思わせる登場人物の作りこみが、そんな「うんちくとストーリーの融合」を違和感ないものにしている。そして、そんなキャラクターがリアリティーを持ち得たのは、やっぱり大学という、とりわけ「農大」という特殊（？）な舞台装置だったからなのだろうと思います。こんなギスギスでアップアップな現代社会にあって、大学だけは未だに超然とした異空間なわけですし。一般社会でうんちくと言われるようなものを、大真面目に探求するのが大学という場なわけですから、登場人物が語るうんちくがうんちくとして筋立てから浮かび上がらずに済む。仮に舞台が企業の研究所かなんかだったら、やっぱりこうまで破天荒にはいかないでしょう。　それとやっぱり菌の絵姿の勝利。読み手を悶えさせずにはいられないあの際立った「かわいい」ぶりに、この国の「カワイイ文化」の成熟ぶりを見出すのは私だけでしょうか。石川雅之おそるべし。

全国紙記者 / 天野 賢一

■ 菌が題材というのが面白い！個々のキャラクターに個性があるが、決してそれがチグハグしてない。菌が見える少年と菌の絡みによって、自分も日頃こんなに多くの菌と近く暮らしているんだなと思い、食べ物一つとっても興味が持てるようになってきた。漫画を読む事で他の事にも楽しみができる素晴らしい漫画だと思う。とにもかくにも、２００７年で一番はまっていた漫画だったので一番に選びました！

デザイナー / 平沼 寛史

■ アニメが終わったのにブームは終わらない。恐るべき菌どもよ。今日オリゼー付き６巻買いました。今の心境はもやしもんが１位です。オリゼーがかわいい。

福家書店福岡店　販売係長 / 日高 礼子

■ 「人類が唯一成功した錬金術」、酒の魅力を余すところ無く伝える教養マンガ。ありがちなウンチクばかりを垂れ流す他の酒マンガとは一線を画すわかりやすさと説得力は人間よりもしゃべりまくる菌たちのおかげ？主人公の菌が見える能力を活かしきれていない、と評されたり、自らネタにしたりしてますが、そんなのどうでもええやないですか。それでも物語は転がっていくし、登場人物は魅力的だし。確かに主人公が一番キャラ立ってないのは事実ですが（笑）。日本酒飲めない僕が初めて日本酒飲みたいって思いました。夜の日吉酒店は全ての酒飲みの理想郷です。

ヴィレッジヴァンガード立川ルミネ　店長 / 大山 敏樹

■ 菌にばかり目が言ってしまいますが、こちらも青春モノとして面白く読まさせて頂きました。でも大学生の頃って何にも考えて無かったよなーと思い出させてくれる作品です。

書店員 / 渋谷 孝

■ やっぱり菌かわいいわ、菌。その一言に尽きます。この人の読みきりマンガも読んだんだけど、この作家さんの線の力はすごい。ざっくりしたおおざっぱな線ではないんだけど、力強さを感じるんだよね。しっかり書き込みができる人なのに、一本のせんでさくっと菌を書いている。だから菌にはエネルギーが吹き込まれあんなにかわいらしく愛嬌たっぷりに動き回るんではないだろうか。アニメ版をみて実際に動く菌どもに感動した（っーか、萌え死んだ）けど、原作の菌もどうしてなかなか。実際には動いてないのに動き回るって表現がぴったりなんだよね。丸と四角の組み合わせだから、コンピューターでさくっと書くこともできるんだけど、その方法では吹き込まれない命を感じます。話は基本ギャグっぽいんだけど、しっかりしていて本筋からまった崩れてないのもいいなぁと思う一冊。

高校美術教師 / 佐川 由加理

■ 偉大なルポルタージュ！　自分が面白いと思ったもの、ことを、どうやって人に伝えるか。図と絵を、自分の好きなスピードで読んでいける。マンガは、情報を伝えるメディアとしても、すごく優秀だと思います。この作品で取りあげてるのは、「菌」の世界。科学の世界で、宇宙とか、ロケットとか、そういうものを伝えた作品はいっぱいあったけど、まだ世の中がぜんぜん語っていない、細菌のとてつもない面白さを、世界で一番存分に伝えられているのが、この、もやしもん、だと思います。見つけてきた対象が激面白い、というのはもちろんなんだけど、それを伝える手段とセンスと勉強量が、ハンパがない！菌のあのデザインのかわいさ、勉強してなくちゃ書けない蘊蓄。これを入り口に、農大を目指しました、というリスナーもいました。ブラックジャックを読んでお医者さんになった人がいるように、オリゼーかわいい！って思った高校生が、大学者になる可能性も、大いにあると思います。これからの農大の世界、科学の未来が、もやしもんによって変わった、と歴史に証明される日が、くるかもしれませんよー。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

マンガ大賞ノミネート作品

LaLa DX/ 白泉社

「夏目友人帳」緑川ゆき

選考員コメント

一次選考

■ 心の痛みを描かせたらある意味緑川さんは最高峰の方なのかもしれません。そう思います。しかもそのスタイルがデビュー当初から全く変わってないのが素晴らしいです！作品を読むといつもクラクラしちゃいます…このスタイルは最後まで貫き通してほしいです。その間はずっとファンでいます！

ＢＯＯＫＳ昭和堂 / 川﨑 一利

■ 刊行速度と比例するかの如く、心にしみこむ妖怪譚。このペースで続けてください。

文筆業 / 海猫沢 めろん

■ 幽霊が見えることで悲しい目に遭っていたのに、夏目が幽霊を相手に憎むどころか優しく成長していくところが嫌味なく描かれていて毎回ジーンとしてしまう・・・。正直画力はつたない感じなのですが、画面構成にはハッとさせられることがありこの人はマンガが巧いんだなぁと関心もしてしまう作品です。

自遊時間三省堂書店 / 大塚 綾乃

■ 優しくてほんのりじんわり心があったまる物語。妖たちとの交流にほっと癒されます。

主婦 / 紺野 泉

■ 私は親族に縁の薄い主人公に弱い。夏目くんは小さい頃から親戚中タライ回し。今いる家の人はすごく良い人なのですが、今まで厄介物扱いされてきたので甘え方がわからない夏目くん。おばーちゃんの形見の友人帳のおかげでニャンコ先生にも出会ったしその他いろいろな妖怪に出会って感情をだんだん表に出してくるようになった夏目くんがかわいい。

福家書店福岡店　販売係長 / 日高 礼子

■ 正直地味なコミックスです。人と人、妖怪と人、それぞれ理由があって生きている。一見強面の妖怪達、でも時には人間よりもピュアな彼らの生き様と祖母の残した友人帳を、上手く組み合わせて展開されていくストーリー。年甲斐も無くホロリと泣いてしまう事も？主人公の相方にゃんこ先生も良い味出していて、暗くなりがちなストーリーにもちゃんと花を持たせているのも見所です。にゃんこ先生いいなぁ・・・。最近こういったコミックスは余り流行りませんね。ちょっと残念ですが、自信を持ってお薦めできる作品です。

まんが王八王子店 / 日吉 雄

二次選考

■ 画力には成長の余地があると思ったが、その叙情的な語り口の見事さに素直に涙した。

コントユニット「アンチバッティングセンター」代表 / 増山 寿史

■ 人と妖とのつながりを淡々と描いています。本当に淡々と。でも、ジワ〜〜〜っと温かくなる。そんな作品です！

ＢＯＯＫＳ昭和堂 / 川﨑 一利

■ 切なくて優しくて哀しい妖と夏目くんのお話。胸がきゅうっと痛くなって、読んだ後優しい気持ちになります。

啓文堂書店府中店 / 山本 仁美

■ 切なく、寂しく、哀しく、儚く、そして懐かしい。ふと気付くと涙が滲んでしまう様な、そんな印象を受けた作品。本来恐ろしい筈の妖の存在が時々優しさで溢れ、温かく感じるのは主人公・夏目の純粋な視界からこの世界を見ているからだろう。絵や言葉の表現が美しい。この世界観が大好きです。

シンガー / 山野井 千佳

■ ちょーなける

文筆業 / 海猫沢 めろん

■ この人の作品を読むたびに、心のやわらかい襞を持ち続けているのだなぁと思うのですがこの作品は特にそう思う。『人は』この言葉のあとに何を繋げるのか。それを懸命に考えて可能な限り描き出そうとする。その姿勢がとても好きです。

ライター / 山本 文子

■ 正直選考に残るとは思ってなかった一作です。嬉しい反面、これならもっと売れてくれても良いなとも思います。この作品のひたむきさ加減はとても好きです。ただ盛り上がりに少々欠けてしまいますが、淡々とした部分も含めてこの作品の良さではないかと思います。この賞を通じて読んでくれる人が増えると嬉しいですね。妖怪なのにヒューマニズムですよ。

まんが王八王子店 / 日吉 雄

■ どれが一番好きかと改めて考えたら、これ以外ありませんでした。相手を想うこと。お互いを大切にすること。難しいことを、ぎこちなくも常に大事にし続けること。ここで描かれていく人の生き様が好きです。言葉と間の取り方も、すごく美しい。他愛ない物語かもしれない。ファンタジーかもしれない。それでも、そういう形で伝わるものも、たまにはいいんじゃないかなあ。ぜひ、多くの人に読んで欲しい作品。

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

■ 切なくて心にじんわりしみいる物語。優しくきれいな言葉が胸にしみます。にゃんこ先生〜、抱きしめたい！

主婦 / 紺野 泉

■ じんわり暖かくてちょっぴり切ない、時にしんみりさせられるけど読後はけっして淋しくない。そんなお話です。夏目のなんだかんだ言いつつも妖怪達にかまってしまう優しさが好きです。一番のお気に入りはもちろんニャンコ先生ですが。

株式会社 TSUTAYA/ 豊島 さやか

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

マンガ大賞ノミネート作品

モーニング / 講談社

「ひまわりっ - 健一レジェンド -」東村アキコ

選考員コメント

一次選考

■ 無自覚天然ボケ爆裂の父・健一が宮崎県で繰り広げるドタバタホームコメディ。東村先生の放つ細かいコネタの応酬は、電車の中では読めないことうけあい。おもしろすぎますマジデ。ギャグがこまかいっす。さすが、少女漫画誌から青年誌に切り込んでくるだけはあります。キャラも変人ばっかです。

少年カミカゼ / 和教

■ まだこんな企画の存在すら知らない時から、「本屋大賞にマンガ版があったら絶対これを推します！」ってポップに書いちゃったのでとりあえず有言実行しときます。「無慈悲」という言葉が一番しっくりくる健一（父）の天然ボケの数々で「諦念」という言葉を学んでもらいたいものです。「西岸良平タッチで」とか「魔夜峰央先生並みにムラのないベタ」とかボンクラなマンガ読みのツボをくすぐるどうでもいい小ネタもたまらなく好きです。猿渡副主任はヘタな芸人より当店では人気あると思います。ホントに受賞して『東村アキコと工作員の集い』（東村アキコをメジャー化しようというコンセプトの決起集会のような…）が全国各地で開催されたりしたら工作員冥利につきます。

ヴィレッジ・ヴァンガード立川ルミネ　店長 / 大山 敏樹

■ ユカちゃんのおまけマンガ時代からファンです！カレー事件とケーキ事件は何度見ても笑えます・・・。ていうかコレ実話なんですよね・・・健一の話はほとんど実話なんですよね・・・。でもそんな健一の話が一番おもしろいし、変です！！リアルに変だから笑えるのかな・・・。他のところもどこからホントでどこからウソなのか、ふと東村先生の私生活を気にしてしまうことがありますが、笑った後は忘れています。ええ。

自遊時間三省堂書店 / 大塚 綾乃

■ 現在の東村アキコは無敵な感じがします。コネタがくどくなく、うざくなく、まったくはずさない…というかはずしたとしてもそれがなにか？とでもいいたげな、のってる人に特有の迷いのないギャグの投入の仕方がたまりません。脳と手が一体化して、一筆書きのようにつるつるっと連載一回分を描き上げていそうに見える！

漫画ライター / 門倉 紫麻

■ 巻数を重ねても質の落ちないギャグレベルがすごい。本当にすごいのは実在の作者の父、健一かもしれませんが。特に５巻の「何も言えなくて・・・夏」の流れるシーンは大爆笑。未だに頭の中で曲がリフレインしています。

書店員 / 池田貴之

二次選考

■「このマンガが全国の書店員さんだけには異様に人気がある件について〜」（3 巻オマケページより）。様々なジャンルのマンガを中心に優れたパロディ表現を多く含みながらマニアックなだけでない普遍性をもつ本作。いかにもマンガ大賞らしいノミネート。この場で「きせかえユカちゃん」から精力的に活動の幅を広げた 2007 年の東村アキコを称えたいと思います。

マンガライター / 会田 洋

■ すいません、今回、初めて読みました…でも今まで読んでいなかったことを激しく後悔しました！健一ＬＯＶＥ！

ＢＯＯＫＳ昭和堂 / 川﨑 一利

■ この笑いかなりツボです。ギャグのセンスはかなりシブい！作者のことは詳しく知らないのですがいくつだろう？オーバー３５かな？副主任たちの小芝居でファミコンのデータをセーブするのにパスワードをメモってるのがサイコーでした。健一のキレるポイントのズレやぶっとびぶりにそれこそ往年の名作『お父さんは心配症』を彷彿させられました。彼らがいるかぎり宮崎は「どげんかなる」と確信いたしました。

高校国語教師 / 橋井 哲朗

マンガ大賞 Cartoon grand prize 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一冊!!

■ 素敵で無敵な東村作品の原点は父・健一あってだと思います。なのでこの健一レジェンドには一番いいところが詰まってるわけです！全部嘘みたいな健一氏の発言はほとんど本当らしいからすごいですよね。カレーの話とケーキの話はユカちゃんのおまけマンガでオチを知っていたはずなのに笑ってしまったのでした…。東村先生のテンションをさらに上げるためにもこの作品を推したいです！

自遊時間三省堂書店 / 大塚 綾乃

■ とにかく、笑えます！！

アニメイト / 鈴木 寛子

■ おもしろいです。

ミドリ / 後藤 まりこ

■ バカな人ばっかり出てます。みんなある意味暴走族です。一番まともなのは主人公アキコでないでしょうか。このマンガでははずせない、副主任とえびちゃんの突然始まるショートストーリーは必読です。

施設職員 / 早道 奈美

■ うーん。すいません”やっぱ好きなんですよねえ。このばかさ加減。しかもノンフィクションなんですよねえ。

少年カミカゼ / 和教

■ 単純に楽しすぎる。上手い人はどこで描いても面白いですね。

無所属漫画好き / 山形 武大

■ 実際に自分が宮崎に行った時、じゃりぱんをみつけ、はしゃいだくらい！お父さん大好きです…こんなに衝撃的で、魅力的で、完全にひどいことを言っているのに、悪気ゼロだから憎めない。こんな愛すべき人に会えたことにメリットメリット！

ミュージシャン aluto/ 佐藤 ほのか

■ 現在の東村アキコは無敵な感じがします。コネタがくどくなく、うざくなく、まったくはずさない…というかはずしたとしても「それがなにか？」とでもいいたげな、迷いのないギャグの投入の仕方がたまりません。脳と手が一体化して、一筆書きのようにつるつるっと連載一話分を描き上げていそうに見える！手を止めさせることなく一気に読ませて、短いページにも関わらず読後には「はー、おもしろかった」と充足の息をつかせる……。一話分の構成、ネタの量が完璧だと思う。もちろんまとめて単行本で読んでも素晴らしい作品ですが、ぜひ一度雑誌掲載時にも読んでみてほしい！

漫画ライター / 門倉 紫麻

マンガ大賞ノミネート作品

モーニング / 講談社

「きのう何食べた？」よしながふみ

選考員コメント

一次選考

■ よしながふみの真骨頂ですね。淡々と料理を中心に描いているのが凄いです。設定が作品の濃い味付けになってるのが良いですね。今後もちょっとだけドラマチックな淡々とした話を続けて欲しいです。そう言う意味では「フラワー・オブ・ライフ」はラストのオチに向かう部分が個人的にはちとダメでしたね。

書店員 / 渋谷 孝

■ 昔から、少女マンガより BL の方が好き。なんか少女マンガによくある壮絶な男をめぐるバトルや、そこらへんの道を、たまたま歩いていた王子様やミュージシャンと恋に落ちるというような非現実的なシチュエーションに共感できなかったのが理由。そのてん男同士とはいえ、同じ学校の友達を好きになったり、女の子と一緒にいるのを見てショックを受けたりとか、ちょっとした不安や嫉妬にわたわたされるほうが共感できる。あと微妙にエロいのも面白かったり（男の人は読む機会がないかもしれないので簡単に説明すると、ヤングアニマル系のエロが少し慎ましくなったようなエロさ具合） でも、女２５才にもなってくると、こんなきれいな恋愛もだんだん共感できなくなってくるのです。ヤングアニマルじゃ物足りんのですよ。職業柄、こんなきれいな男の子たちはいないこともわかる。かといって、大人向けの BL となると王子様やオークションやらと、それはそれで面白いけど共感とはかけ離れていく。そろそろこの世界からも足を洗うのか…と思ってたときに見つけた一冊 BL というよりはほのぼのゲイ漫画　主人公とその恋人は些細なことで喧嘩したり、親からの電話がしつこかったりと、色々ありながらも、必ず毎回二人で仲良く夕食を食べているのが印象的。簡単ながら作り方も載っている料理漫画でもあります。それをまた恋人がおいしそうに食べるんだこれが。多少のすったもんだがありつつも、大きな事件は起きず、淡々と毎日を過ごし、好きな人と美味いものを美味しく食べる日々。これって究極の幸せかもしれない。とても共感できたかわいいゲイのオジサン達の漫画を推薦。散々色々書きましたが、この漫画はエロいシーンが全くないので男の人にもお勧めです。

高校美術教師 / 佐川 由加理

■ お腹が空いているときによんではいけないごはん漫画。とにかく出てくるごはんがどれもこれもおいしそう！毎日ちゃんとごはんを作って、おいしいって言って一緒に食べてくれる人がいて、それが一番幸せなこと。

恵文社バンビオ店　文芸書・文庫担当 / 大瀧 彩子

■ 数多く、傑作を生み出してきたよしながふみ氏の描くゲイの食事と日常。ゲイといってもとくにノーマルの男性が読みにくいかというと、そうでもなくその辺りはさすが！よしながふみ！と拍手。腹ペコで読むのは危険な１冊。あとこれを読むと誰かのためにゴハンを作りたくなります。

恵文社バンビオ店　店長 / 宮川 元良

■ よしなが先生天才です！ゲイなところをきっちり押さえ腐女子の心つかみ、モロなところがない上に食欲で男性などに読ませ、あまつさえレシピ本で読者に料理さえさせてしまう力量。笑いながら作らさせてもらっています。

福家書店福岡店　販売係長 / 日高 礼子

■ 同著者の『大奥』も良い。『フラワーオブライフ』も良い。でもそれはもう多くの人に（たぶん）解っていること。だからここは一つ、今年登場の一冊を推しましょう！というわけで、かるーく読める１冊。だけど時々唸るよしなが節がたまりません。お母さんの描写に、笑って泣ける。人って見栄っ張りで可笑しい、いとおしい生き物よねえ。食べるって、凄く大事なことだなあとしみじみします。

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

■ 何を読んでもはずれのない稀有な作家の一人ですが、その中でこの１冊を。毎回毎回日常の何気ない出来事しか起こっていないのに面白い、不思議な漫画です。

書店員 / 池田貴之

二次選考

■ ゲイカップルの日常を明るくソフトなタッチで巧みに描いている。毎回出てくる料理のレシピも実に美味しそう。実写化の際にはケンちゃん役は是非大泉洋に！

コントユニット「アンチバッティングセンター」代表 / 増山 寿史

■ 帰る家があって、待っていてくれる人がいて。作ったごはんをすきな人と食べて、寝て・・・という日々のくらしの何とコウフクなことか！主人公のゲイカップル、ふたりの職場の同僚、近所の方々など登場人物がただ生活しているだけなんですけど面白い。買い物ひとつにもその人となりが出る、「日常」の描き方がほんとうまいです。あとごはんが本当においしそう！！空腹時によむとよけいに腹ヘリに…。作中に登場した料理のレシピも載っていて、何度もおいしい１冊です。

恵文社バンビオ店　文芸書・文庫担当 / 大瀧 彩子

■ 大奥もフラワーも良いにおいぷんぷんなので、今回の３ノミネートはどれを選んでも、よしながふみ作品はおすすめ中のおすすめなのですが、僕はあえて『きのう何食べた？』を選ばせていただきました。よしながふみさんは設定がそもそもすべて濃いんです。なのにさらっと食べさせるのです。とんこつギトギトをフランス家庭料理か、いいとこの素敵アジア料理をたべさせるように。繊細な調理。料理。だから最初さらさら食べていて、だいたい２巻３巻ぐらいから、突然違う話になるようにあっさり＞濃く濃くなってく。これがなんとなくこの作家さんの料理の仕方のような気が自分はしてました。その中ではとてもめずらしく『きのう何食べた？』は「誰も寝てはならぬ」サラ イネス著で日常のどの部分を切り取っても、普通と非普通が同居してるように、エピソードのどこから読んでもほとんどテンションが変わらない、めずらしき作品でした。この後 2 巻あたりで大どんでん返しがあるのか、それとも前述「誰も〜」のようにこのままで進むのか、どちらも見てみたいなというのがマンガ読みの心情なのです。そういえば、最近、うちの料理は和食が増えてきたけど、知らない間に影響うけてるのか？？

ADK アーツ・DDF/ 小林 智之

■ うーん、さすが！うまい！と、読むたびにいつも唸ってしまう、よしながふみさんの作品が３作品、ノミネートされていましたが僕はこの「きのう何食べた？」を選びました。他の２作品も未読なら読みな！読むべき！と、オススメしますが個人的に選ぶならこれかなー、と。青年誌でゲイの生活を連載と聞いた時にどんなのが始まってしまうのか･･･と思っていましたが、さすが、よしながふみさん、男性にも嫌悪感なく、かつ、おもしろくゲイの普段の生活（おもに食中心）を読ませるのはうまい！そしておもしろい！まいった！とひざを打つほかありません。あとは２作品と違ったのは気軽さ。基本的に１話完結。手軽に何度読んでもおもしろくそしておなかがすく。第１回、漫大１位はこれです！

恵文社バンビオ店　店長 / 宮川 元良

■ タイトルにだまされた！と思ってしまう一冊。料理が主体の漫画と思いきや、そこまで料理にふれずに内容が進んでいくのが面白い。主人公の普段の生活と裏腹に意外とゲイだったりと意外性がでてきて飽きない。食事と恋愛って同義なのねって思ってしまった。

デザイナー / 平沼 寛史

■ よしなが作品は食べ物を作る過程とか食べた物がどのように美味しいか語ってるところがたまらなく良い。この作品に載ってる料理（簡単なの）ひとつだけ作りました。ほかのも作ってみようと思っています。こんなのは○ッキング○パ以外にありません。しかも主役はゲイなのに男性誌掲載だし、男性に抵抗なく読ませているし女性から見たら濃いゲイだし、楽しい。フラワーオブライフも捨てがたいが、楽しく笑えし、これからの期待を込めてこの作品を１位に推します。

福家書店福岡店　販売係長 / 日高 礼子

■ よしながふみ先生は今年出版された作品が全て最終候補に残っていますが、その中でこれを選びます。短編連作形式で読みやすく、ゲイのカップルという設定を除けば、誰にでもあるような日々の出来事の描き方が見事。仕事場での人間関係や、親との関係、中年になって変わる体型（笑）。怖ろしいほどリアルです。そして食べるという行為への拘り。ちゃんとした食事をすることの大切さが、そのことによってどれだけ精神が安定するかという事がよくわかり、読後、そんな食事をした後のようなほんわかとした気分になる作品です。

書店員 / 池田貴之

■ 一次選考でも書いたけど、なんでもない日常生活の幸せを描いたマンガ。ゲイのカップルを取り上げているんだけど、周りからの理解に苦しんだり、苦悩する姿や、よくありがちな説教くさい感じもなく、二人を表す言葉は「幸せ」の一言に尽きる。料理も現実的な華はないけど、裏切らないおいしさって感じがして読んでるこっちまで幸せな気分になります。今回、よしながふみ作品は３作品もノミネートされたんだけど、その中でこれを選んだのは一番幸せそうだったから。大奥の設定やフラワー・オブ・ライフもおもしろかったけどラストがあまり自分の望む終わり方ではなかったので、これからいろんな方向に広がる可能性と、自分が BL 好きというのもあってこれに一票。

高校美術教師 / 佐川 由加理

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

マンガ大賞非ノミネート作品
全作品名・選考員コメント掲載

「３０婚」米沢りか

■ 三十路を超えて結婚しようとしてもなかなか出来ず壁にぶち当たり、そのたびに自分と向き合い、でも前に進もうとするマンガ。未婚ですので、タイトル的に最後の砦に手を出す気持ちで（ドモ○ルンリンクル？）興味を持って読んでみたんですが、ここまで結婚にがっついてない私がバーチャルでがっつきを体験できたような気がします。いやあ、リアルさがたまらなくいいです。

演劇集団キャラメルボックス / 青山 千洋

「DOGS/BULLETS&CARNAGE」三輪士郎

■ 作画の高さとセンス、黒と白のバランス。殺伐としたストーリーも絵柄とマッチしています。１コマ１コマにセンスと作者のこだわりを強く感じます。タバコを吸うしぐさから銃撃戦まで「かっこいい」、と素直に思える１冊。

恵文社バンビオ店　店長 / 宮川 元良

「GENTE」オノ・ナツメ

■ オノ・ナツメの最高傑作「リストランテ・パラディーゾ」の外伝（？！） 読み終わった後、おいしいイタリアンかジェラートを食べたくなります♪

アニメイト / 鈴木 寛子

■ サブタイトルは「リストランテの人々」。一軒のリストランテの従業員たち、ひとりひとりにスポットをあてた短編のシリーズである。ひとつの集団を多角的に見ていることには、なぜか楽しさを感じる。ある話ではメインだった人が、次の話では脇役としてさりげなくいる、そういうところに。もちろんそういう描き方だけに魅力を感じたわけではない。淡々としていて、それでいてどこか温かさと切なさのある空気にも惹かれたし、ここに集う男性陣――いや紳士達と言っておこう、彼らには、ほのかなときめきを感じてしまうのだ。そういえば、おじさま好きの知人二人（この二人には接点は無し）から強く勧められたなあ…。

高校漫研顧問 / 幸

マンガ大賞 2008 Japan Cartoon Prize マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

「GIANT KILLING」綱本将也　ツジトモ

■ 今一番面白いサッカー漫画。監督視点からクラブチームを描いていく物語が面白い。アツいだけでなくテンポも良い。

ライター / 芝田 隆広

■ 今一番面白いサッカーマンガ。原作の綱本さんは「Ｕ－３１」に比べて肩の力が抜けてきて、すごくよくなった。作画のツジトモさんとの組み合わせもぴったりで、可能性を感じる作品。

毎日新聞デジタルメディア局 / 渡辺 圭

■ 本邦初！監督目線で見たサッカーってこんなにも面白い！

有隣堂書店 / 水野 結花

■ サッカー好きはもちろんそうでない人もじゅうぶん楽しめる。今までにないリアルなサッカー漫画。

あゆみＢｏｏｋｓ仙台青葉通り店 / 土屋 修一

■ サポーター心をグイッとつかまれたサッカー漫画です。超人的なストライカーやドリブラーが出てきません。弱小チームを率いる「大物食い（ＧＩＡＮＴ　ＫＩＬＬＩＮＧ）」が好き（？）な監督が主人公。一風変わった練習方法と、試合を面白くする采配で、グイグイと作品世界に引き込まれてしまいます。久しぶりに、ドキドキするサッカー漫画に出会いました。

日刊スポーツ新聞社・記者 / 下岡 真由美

「Kiss×sis」ぢたま 某

■ 講談社刊 ＫＣＤＸ ぢたま某著原作付『まほろまてぃっく』を終えて、ぢたま先生がオリジナルのエロコメに戻ってきた！『気分 ^2』に劣らない、おバカな双子お姉ちゃんズのエロボケっぷりが最高です。ぢたま先生はやっぱりオリジナル！昔の成年向き作品も無印で再版してくれないかなぁ？

丸善お茶の水店　コミック担当 / 松岡 賢治

「LIAR GAME」甲斐谷忍

■ 『ＯＮＥ　ＯＵＴＳ』で野球版アカギを描いた著者は、本作で頭脳バトル漫画のトップランナーに躍り出た。高度な戦略をスピーディに展開する漫画はすこぶる貴重なものだ。

書評系ライター / 福井 健太

「NON tea room」SHOOWA

■ 揺れ動きながらもゆっくりと近づいていく男二人の心を、淡々と描き出しています。物語が大きく動いたり、派手な演出はありません。ですが二人の心の動きを細やかに描き出すことで、二人が強い絆を作っていくことが良く分かるのです。描写があっさりして見えるからこそ雄弁なんですね。数あるボーイズラブ作品の中でももっともじんわり来る作品だったと思います。

おたく文化史研究・男やおい読み / 吉本 たいまつ

「Odds - オッズ -」石渡治

■ 子供の頃から石渡治さんのマンガが好きです。今回連載中の Odds も期待を裏切らない作品になっていると思います。主人公の自転車にかける思いが熱く、その中には、なにかメッセージを感じさせるものをひしひしと感じます。読んでいると何か自分の中で熱い物がこみ上げてきました。秋谷との対話が心に響き涙さえ誘われてしまいました。石渡治さんのマンガを読むといつも自分が元気になり、がんばろうと思えます。素敵なマンガ書きさんだと思います。

デザイナー / 平沼 寛史

「PLUTO」浦沢直樹

■ 『20 世紀少年（21 世紀少年）』の終盤がイマイチだったのでこっちに期待します。手塚治虫の原作（未読）があるから安心かも。ただ、豪華版で買い始めたことを後悔してます…。あの値段であんな付録なら通常版でそろえておけばよかった。何巻まで続くのでしょうか…。

高校国語教師 / 橋井 哲朗

■ 21 世紀の金字塔にきっとなるだろうと思う。巨匠から巨匠へ引き継がれた作品の歩みをこれからも読み続けたい。

（株）ネビュラプロジェクト / 小森 和博

■ 浦澤直樹特有のストーリー展開が炸裂。話のところどころに気付かないフックが仕掛けられていて、ストーリーが進むうちにどんどんそこに引かっかていきはまってしまう。人やらロボットが次々殺されていくので、「まさかこの人まで殺されてしまうの！？」と常に緊張感が漂っている。早く続きが読みたい！！

宣伝 / たけ

「PONG・PONG」小沢 真理

■ 小沢真理さんのやさしい絵の感じだからこそ広がる美少年の世界です。美少年の繊細な感情に、ミソイチ（３１歳）の女がハラハラさせられます。基本、むっさい男子は一人も出てきません。そこもまたいいのかも。

演劇集団キャラメルボックス / 青山 千洋

「Real Clothes」槇村さとる

■ 絹恵の働く姿勢がとても気持ちが良い。配置換えなどがあって一から仕事を覚えていく大変さなどがあっても前向きにやりどげようとする姿に自分に振り返ってしまいます。今結婚が持ち上がっていますがすんなりと結婚しなさそうな雰囲気です。今一番連載が気になってる作品です。

福家書店福岡店　販売係長 / 日高 礼子

■ 傑作の予感漂う槇村さとるの最新作。真骨頂である女性と女性の関係性がもう少し出てくればもっといい。

毎日新聞デジタルメディア局 / 渡辺 圭

cartoon grand prize
2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推し

「レッド」山本直樹

■ かっこいい。面白い。

ミドリ / 後藤 まりこ

■ 日本赤軍浅間山荘事件に題を取った作品。「日常から狂気へ、だんだんと地すべりしていく物語」は山本直樹の得意なテーマだけれども、今回の作品はひときわ重い。現実の事件を下敷きにする＝物語の展開・結末が確定されてあるということであって、それを象徴するように、死ぬ登場人物にはその順番どおりに丸数字が振られている。これもまた「いっけん平穏無事な日常の向こうにある狂気と死」に読者の意識を絶えず引き戻すのに非常に効果的な役割を果たしている。　異常に牽引力がある一作。結末やプロセスは分かっていても、早く続刊を読みたくなる。

gekka blog/ 齋藤 正篤

■ まだ一巻しか発売されていないのですが、これから起こる大きな渦への序章という感じでした。連合赤軍が引き起こす、あさま山荘事件へと続いていく様子ですが、今後の展開に期待せずにはいられません。山本直樹と連合赤軍、面白くないはずがない！

施設職員 / 早道 奈美

「WORKING!!」高津カリノ

■ 最近多くなってきた web から転進の 4 コマコミックス、「WARKING!!」ネット次代からのファンですが、こんなおかしな人達のいるファミレスなら行ってみたいけど怖いもの見たさという、楽しい作風が魅力的です。各キャラクターに可笑しな癖がり、それをそれぞれ絡めて上手く料理して 4 コマにする。最近ではこういった４コマは増えてきましたが、中でも特別なものを感じずにはいられません。しかも基本舞台はファミレスの中の会話のみで、ネタがまだ出てくるのが凄いと思います。

八王子・まんが王 / 日吉 雄

「あしたの弱音」タイム 涼介

■ 全話収録ではないらしいですが、連載を読んでいなかった身でも本当に楽しめました。ギャグ漫画というよりも詩を読んでいるようです。中学生の時に読んでたら農業に目覚めていたかもしれません。

音楽プロダクション / 樋口 健

■ 無事単行本化されてよかった。弱音の生き様とタイム涼介の作家としての深化がオーバーラップしていく様がなんとも感動的です。

無所属マンガ好き / 山形 武大

「アニメがお仕事！」石田敦子

■ アニメ制作の現場の雰囲気ってどんなもの？という好奇心を満たしてくれますが、それだけではなく、もっと普遍的でもっと深い、〈働く〉ことのつらさと喜び、というものが丁寧に描かれ、グイグイ引き込まれました。数多い脇役も、あざとくなくやりすぎず、しかしくっきりと個性的で血肉を感じさせます。「これから望んで苦しむんだ」というセリフは、背中にビリッと電気が走りました。余談ですが、広島出身の女性はみんな野球＝カープが好きなんですか？こうの史代さんに以前うかがったら「当然です！」と言われたんですが。

朝日新聞記者 / 小原 篤

■ ものづくりをする人にはぜひ読んでほしい。ものを――この作品では「アニメ」だけど――つくる現場での楽しさ、汚らしさ、貧しさ、狡さ、気持ちよさ、そして人を好きになること、嫌いになること、好かれること、嫌われること、すべてが入っている。元気になる作品。

gekka blog/ 齋藤 正篤

「アリーズ 2 ―蘇る星座宮」冬木るりか

■ 私が中学生のころ、最初のシリーズが連載していて、クラス全員でまわし読みをして、はまっていたのを思い出します。その第二シリーズ。当時読んでいた人は「アリーズ」と見ただけで即買いした人も多かったのでは？

SHIBUYA　TSUTAYA　コミック担当 / 実松

マンガ大賞 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

「アレルヤ」能條純一

■「月下の棋士」でハマった能條先生の作品です。音楽漫画の金字塔になるんじゃないか！？と期待してます。

BAZRA/ 井上 鉄平

「あんどーなつ」西ゆうじ　テリー山本

■ 働くすべての人必読の書！『温故知新』とはここにあり、です。大事なことはすべてここに描いてあります。間違いないです。

ＢＯＯＫＳ昭和堂 / 川﨑 一利

■ 今どきリアルにはお目にかかれないような、真っすぐで無垢な主人公「安藤奈津」のキャラには心が洗われます。親として安心して子供にも読ませられる数少ないマンガです。

凸版印刷 / 紺野 慎一

「イキガミ」間瀬元朗

■「国家繁栄維持法」なる法律の定められた国家において、「生命の価値」に対する国民の意識を高めるために、18 歳から 24 歳の男女の命が無作為に奪われる。選ばれた人間には死亡時刻の 24 時間前に死亡予定証、通称「逝紙（いきがみ）」が届けられる……。　自分の死を目の当たりにした若者たちの最期の 24 時間が、リアルな筆致と力強い語り口で描かれていく。死を目前にして荒れる人間、優しくなる人間。タイプはそれぞれだが、その死がとことん理不尽であるだけに読後感は重い。「死」に直面することは同時に「生きること」に直面することでもある。まだ続刊中ゆえに物語はどう展開していくかわからないが、我々は「悔いのない死」を迎えることができるのだろうか？　そんなことを考えさせてくれる一作である。

コントユニット『アンチバッティングセンター』代表 / 増山 寿史

■ 久しぶりに漫画で感動しました。映画化はどうなんだろうときになりますが、このままのクオリティーで書き続けて欲しい。

（株）ネビュラプロジェクト / 小森 和博

「いちごの学校」きづき　あきら　サトウ　ナンキ

■ 全作品好きです。

文筆業 / 海猫沢めろん

「いとしのニーナ」いくえみ綾

■ フツーにヘタレ（？）な高校生男子が通学途中で見かける女子高生の拉致に巻き込まれ――というフツーではない設定ながら、でも乾いた筆致で重苦しくもなくシリアスな日常を描くという、これは作者にとっても野心的な作品なのかもしれません（大作の「潔く柔く」とどちらを選ぶか迷った結果、問題作を選びました）。Ｗｅｂコミック誌で２００５年１月号から連載開始したにもかかわらずいまだ既刊１巻、というスローペースのため、まだ全体像が見えてこないところもありますが、イケてない１０代男子のとほほな感じのリアルさが、きっと今の高校生をとりまく現実はある意味こんな感じなのだろう、と思わせます。醒めた表情で乾いているようだがその実、しっかり感情が揺れる高校生をクサくなくアツくなく描いてストーリーの展開も楽しみです。しかしクラスメイト牛島の堂に入ったワルぶりが昔の不良とは全然違っているので（当たり前ですが）、いまどきの高校生でなくてよかったと心底思ったです（笑い）

全国紙記者 / 天野 賢一

「ヴィンランド・サガ」幸村誠

■ この残虐の果てに何があるのか。夢と現実の人間模様。自分は何を守って生きているんだろうと考えてしまいます。でも現代に生まれてよかった。

音楽プロダクション / 樋口 健

マンガ大賞 Cartoon grand prize 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推り

「うさぎドロップ」宇仁田ゆみ

■ “少女マンガ” というくくりにとどめたくない作品。主人公ダイキチは、どちらかと言うと子ども嫌い。にもかかわらず、突然祖父の隠し子りんと二人暮らしをすることになってしまう。祖父以外と接したことのないりんとの生活、果たして上手くいくのか!?

三省堂書店神保町本店 / 赤坂 真実

■ 男性のお客様も購入されている光景をよく見ます。カップルはこれを読みあって、互いの家族観について話し合うのもよいかも。

アバンティブックセンター京都店 / 中村 真依子

■ ある日突然、祖父の隠し子である６歳の女の子を引き取ることになった独身 30 男の奮闘記。子育て経験の無い主人公がいきなり小さな子の面倒を見ることに…という設定自体はわりとよくあるが、ややもすると突飛でリアリティが薄れてしまう所を「現時的にありそうな話」として描いている。大げさな事件ではなく、細かな日常の生活描写を積み上げていく物語手法には説得力があり、男性主人公ながら子育て経験のある女性作家ならではの視点が感じられるのも興味深い。女性誌での連載であるが、かつて青年誌で活動していた著者らしいスッキリとした作風は男性読者でも違和感無く読めるので、多くの人に読んで欲しい作品である。

Web サイト「最後通牒」管理人 / 高嶺 颪

「エマ」森 薫

■ ほんとは今年盛り上がりを見せたマンガとか、注目すべき新鋭とか投票すべきなんだよなあ･･･などという、オトナの事情をすべて軽やかにすっ飛ばして１票投じさせてしまった恐ろしい漫画。一見古風で、でもまったく古くない画風と、憧れのイギリス紳士淑女の生活を、見たかった角度から見せてくれた素晴らしい漫画。エマさんに清き１票を！

書店員 / お茶屋の煎

「おひっこし?」山田ユギ

■ ほんとは今年盛り上がりを見せたマンガとか、注目すべき新鋭とか投票すべきなんだよなあ･･･などという、オトナの事情をすべて軽やかにすっ飛ばして１票投じさせてしまった恐ろしい漫画。一見古風で、でもまったく古くない画風と、憧れのイギリス紳士淑女の生活を、見たかった角度から見せてくれた素晴らしい漫画。エマさんに清き１票を！

学校図書館司書 / 宇田川 恵理

「おまかせ精霊」青本もあ

■ なんと言ってもキャラクターが魅力的。グラマーなお姉さんからロリっ子まで取りそろえた精霊にノックアウト。かといって萌えだけかというとそんなことはなく、ゆるゆるの展開の中に、今を楽に生きるためのヒントが示されているように思います。

おたく文化史研究・男やおい読み / 吉本たいまつ

「おやすみプンプン」浅野いにお

■ 浅野いにおは、紛れもなく日本の漫画界における古典となりうる作品を生み出せる才能を持ち合わせた、途方もない天才だと思う。圧倒的な世界観や、時に嫌悪感すら抱かせるリアルで濃厚な人間描写。従来の作品からそれらは見られたが、今回の新作に投入された「プンプン」はそうした彼の作品の方程式を「意図的に」逸脱した、究極的なキャラクターである。とことん精緻な世界観の中で、唯一シンプルな線で描かれた不思議な存在「プンプン」。だが、誰よりも何よりもこの「プンプン」には、我々自身を投影せずにはいられない魅力が満ちみちているのだ。

コントユニット『アンチバッティングセンター』代表 / 増山 寿史

■ 全く前例がないような作品。周囲の人物は普通なのに主人公「プンプン」とその家族だけは鳥のような、不思議な存在で描かれてます。また作品世界そのものも現実と空想世界が混在するようで、それでいてリアリティにあふれています。こんな素晴らしい表現ができる浅野いにお先生の作品に、大人になる一歩手前で出会えた人は幸福だと思います。

本と文具ツモリ / 津守 晋祐

■ 人間なの？鳥なの？なんなの？と突っ込みたくなる主人公プンプン。でてくるキャラクターすべてが個性的でいい。先の展開がまったく読めないこの話、いったいどうなっていくのかとても楽しみ。

あゆみＢｏｏｋｓ仙台青葉通り店 / 土屋 修一

■ 壊れてしまった社会を日常として生きる現代の若者群像にこだわってきたと思われる浅野いにおが小学生の世界を描いた、しかも青年誌で。そうすることで子供たちの周囲にいる大人（になってしまったかつての若者や子供）のジコチュー的な身勝手さや保身や理不尽さが、これまでの作品以上にビシビシと読む者に入ってきます。自己嫌悪なしには読めないと思いました。というか、自分の子供からもこんな感じで見られているのかと思うと、周囲の大人の言動によって子供が社会を知っていくその理不尽なプロセスに慄然です（脱線していますが）。単行本２巻（第２３話）からの中学生編がどう展開するのかが注目度大。しかしビジュアル的にもフキダシでしゃべらない設定ひとつとっても、読者の思い入れを拒むような主人公プンプンの造形は前衛です。

全国紙記者 / 天野 賢一

■ 2 巻の帯で伊坂幸太郎が「『前衛でありつつ王道を走り抜ける』という凄いことをやろうとしている気がします。」と書いているが、それに同意。例えば、プンプンの容姿があまでなかったら、もっとドロドロしたところの目立つマンガになっていたのではないか。そうしたら、掲載誌も変わっていたかもしれないし、前衛ではあるが王道ではなくなっていたかもしれない。また一方で、神様が出てこなかったり、叔父さんが叫ばなかったり、担任の先生がキレなかったら、凡百のボーイミーツガールな話になっていたかもしれない。これだと、前衛とはほど遠い。そういった意味では、このマンガの前衛と王道の配合加減はうまくいっているのでないだろうか。だからこそ、あらすじを他人に説明しようとすると陳腐なことしか出てこないのに、異様に印象に残っているのだろう。

鳥取県立米子高等学校 / 野間 勤

「お茶にごす」西森 博之

■ 今日から俺は！！　でおなじみのお笑いギャグが満載の漫画テーマは「和」と「喧嘩！」この対立する二つの歪みがこの上なく面白い。

デザイナー / 佐藤 優

■ コンスタントにおもしろかった。というか、約 20 年にわたって毎週おもしろいのはすごいとしか言いようがない。

マンガ愛好家 / タケウチ

「かぶく者」デビッド・宮原 たなか亜希夫

■ 「軍鶏」の作者たなか亜希夫先生が描く歌舞伎の世界。世間では「梨園」などと呼ばれ華々しい世界にみられがちだが･･･。一読してビックリ！「軍鶏」に代表される格闘漫画と比べても全く遜色ない切迫感、臨場感。どんな世界でもあるレベルに達する真剣勝負に差はないのだなぁと改めて実感。先入観を捨てて、ぜひ一度読んで頂きたい。

本と文具ツモリ / 津守 晋祐

「カボチャの冒険」五十嵐大介

■ 同時期に発売された「海獣の子供」とどちらを推そうか随分悩んだが、結果としてこちらを選んだ。「海獣の子供」を含めて「魔女」や「そらトびタマシイ」など、五十嵐大介の描く幻想譚はどれも好きだけれど、「カボチャの冒険」を読むことでその豊かな幻想譚を生む土壌がどのようなものか覗けた気になった。空想の翼をひろげて飛ぶための筋力はこんなものなのですよ、と作者がちょっと披露してくれたような感じとでもいおうか。

鳥取県立米子高等学校 / 野間 勤

「カラスヤサトシ」カラスヤ サトシ

■ 押入の中のひとり怪獣ごっこがどんどん悪化して取り返しがつかなくなってしまったような、主人公の奇行の数々に笑いが止まりません。

朝日新聞記者 / 小原 篤

マンガ大賞 Cartoon grand prize 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

「かよちゃんの荷物」雁 須磨子

■ 至極個人的2007年ベストワン。もう、笑った笑った笑いました！そして時折、涙なくしては読めなかった。身に覚えがありすぎて…！マイナーなコミックだと思いますが、２～３０代女子のみなさまにはぜひとも共有して欲しい１冊なので、全力で挙げると致します。もう、絶対酒の肴に最適な１冊ですから！

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

■ 昨年いちばん読み返したんじゃないかなあ。この空気感がたまらなく好き。

マンガ愛好家 / タケウチ

「カラクリオデット」鈴木 ジュリエッタ

■ アンドロイドのオデットがかわいい！いろいろな感情を知って少しずつ成長していく姿にほのぼの。

主婦 / 紺野 泉

■ 人間を知りたいアンドロイド・オデットのお話です。月並みな感想ですがオデットが可愛いです。ホントに。

All Japan Goith/TA-SHI

「キミキス -various heroines-」東雲太郎

■ 今回の選者のなかで、このコミックスを選ぶ人は皆無だと思います。原作がギャルゲーで、しかも何人も攻略していくタイプの。しかしながら、作者東雲先生の描く女の子の表情の豊かさは自分の中では今日本一なんじゃないかと勝手に思っております。各一巻毎に、ヒロインをがらりと変えてしまう大胆な手法も他には無く、それぞれの巻に魅力が詰まっているのも評価できると思います。　今のどの少女コミックスよりも、少女コミックスに近いかもしれませんね。　読んでいてこっ恥ずかしくなる事請け合いです。

八王子・まんが王 / 日吉 雄

「ギャグマンガ日和」増田こうすけ

■ 最高のギャグ漫画。

シンガー / 山野井 千佳

■ 腹筋ブレイカー但し、人を選びます。シュールな笑いが好きな人にはオススメです。

web プログラマー / 岩下 梓

「GAMBLE FISH」青山広美 山根和俊

■ 麻雀漫画『トーキョーゲーム』『バード』の青山広美が、新境地の少年誌で頭脳バトルモノ（原作）に挑んだ野心作。実力派の原作、相性の良い作画、自由度の高い掲載誌――それらの幸運な出逢いが生んだ逸品である。

書評系ライター / 福井 健太

「きょうの猫村さん」ほし よりこ

■ 猫村さんの前向きな頑張りっぷりに毎回「目から鱗」。どことなくシュールな他の登場人物もまた素晴らしい。登場人物がそれぞれのもっている背景的な話しが、ほのぼのとストーリーが進む中のシニカルな隠し味となっている。ほしよりこさんのすごいところは、すごいさっぱりした絵のタッチにも関わらず、とても表情のあるところ。人間よりも人間身のある「猫村さん」の今後の活躍から目が離せない！！

宣伝 / たけ

「キラメキ銀河町商店街」ふじもと ゆうき

■ 少女マンガらしい少女マンガだと思います。王道、です。読んだ後、『ガンバレ！』って背中を押されるような気持ちになります。へんないじり方をせずに、このままのスタイルでずっといってほしいです。こういうブレていない作品はちゃんと王道のまま残されるべきだと思います。

ＢＯＯＫＳ昭和堂 / 川﨑 一利

マンガ大賞 cartoon grand prize 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

「キャノン先生トばしすぎ」ゴージャス宝田

■ たとえ俺以外誰も票を投じなくても、先生は俺の永遠のマンガ大賞です。先生こそ俺の勇者です。誰がなんと言おうと、絶対に。

文筆業 / 海猫沢めろん

■ とにかく何もかもが濃厚なエロ漫画。機関銃のごとく繰り出される淫語、テンションの高いエロシーン、主人公たちの愛情。そしてエロ漫画への熱意。これほどまでに熱くエロ漫画への愛をうたいあげた作品は見たことがないです。泣けました。エロ漫画史に残る傑作。

ライター / 芝田 隆広

■ 成年コミックですが、この作品はそんな枠を越えた傑作だと思います。「漫画家」漫画は「G戦」・「燃えよペン」をはじめ数多くあると思いますが、ガチンコの「エロ漫画家」漫画はこれがはじめてじゃないでしょうか（小野寺先生の作品もありますがあれはギャグということで）。物語自体、当初は成年漫画らしく、エロマンガ家・キャノン先生と、そのアシスタントとなった貧太、２ 人の「爛れた生活」の様子がメインとなりますが、物語が進むにつれ、貧太のマンガ、特にエロマンガに対するアツい思いが描かれます。「マンガ家」ではなく、「エロマンガ家」になりたかったと貧太が搾り出すように語るその想いは自分も含めたいわゆるオタクと呼ばれる全てのヒトの心に強く響くものだと思います。そして本当のエロマンガ家になるために再びペンを取るその姿とそれを支える人たちの姿は読み手をアツくさせます。いや、それ以上にすごくカッコイイです。こんなカッコイイ作品、なかなかないと思います。

コミックとらのあな・書籍バイヤー、「とらだよ。」SD/ 塚本 浩司

「ゴールデンデイズ」高尾滋

■ 淡く美しい世界観。心が温かくなる。絵も綺麗。

シンガー / 山野井 千佳

「サイコスタッフ」水上悟志

■ とても気持ち良くまとまった物語。元々短編はすごくうまい人だったけれども、この作品は中編ということで適度なボリューム感もあり。努力する超能力者と宇宙人娘の物語が実に爽やか。

ライター / 芝田 隆広

「サナギさん」施川ユウキ

■ ほのぼの４コマのようなかわいい絵柄からは想像も出来ない黒い笑いにみちている。でも、いくら黒い笑いが多くてもサナギさんの天真爛漫さで漫画全体の雰囲気は明るいくすがすがしさすら感じる。言葉遊びが非常に巧みで読んでいてニヤニヤがとまらない。もっと多くの方に読んでもらいたいギャグマンガです。

ひょうたん書店 / 勝田 康一郎

「ジジジイ -GGG」小山宙哉

■ 勧善懲悪の読み切り短編漫画。正義のヒーローじゃなく70歳のおじいちゃん怪盗ハープが悪を懲らしめる。なんだか私にとっては夕方再放送をしている水戸黄門とだぶりまくりで好きな漫画。特に第一話のジジジイが一番すき。確実に悪党以外の周りの人を幸せな気持ちにするハープ。さらさら読めてじんわり幸せな気持ちになる漫画。ただ 4 話の暁　利一はその前までサラサラ読めてただけに人の命や友情がドカンときて少しだけ重く感じたなぁ。

カメラマン / 平沼 久奈

■ 今連載中の「宇宙兄弟」もスゴク良い作品。近い将来、モーニング本誌を背負って立つ作家さんだと思い、デビュー作から、全ての作品をチェックしています。読み切り短編も秀逸の作品を描く。

韓国漫画専門店ＣＯＭＩＣＣＯＺＺＬＥ店長 / 野田 真人

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2008
マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

「それでも町は廻っている」石黒正数

■ キレのいいギャグ、萌え状況を微妙に茶化した視線、ここぞというところで使われる萌え、そしてキャラクターと世界に対する暖かい視線。今一番次号が楽しみな作品です。

おたく文化史研究・男やおい読み / 吉本たいまつ

■ いよいよ今年ブレイクしそうな石黒正数氏。『それ町』は萌メイドマンガの皮をかぶった何か！って何？っていうかメイド関係ないし。おバカな女子高生主人公が繰りひろげるご近所コメディ。作中でスベる主人公のギャグが作品として面白さになっているという笑いのねじれ構造がすばらしい！

丸善お茶の水店　コミック担当 / 松岡 賢治

■ メイド喫茶でバイトする女子高生が主人公で、パンチラなんかのサービスカットも結構ある…のだが、いわゆる「萌えマンガ」とは（いい意味で）ほど遠い作品。石黒正数の素朴な画風で描かれる本作の舞台は下町の商店街であり、個性的でありながら身近にいそうなキャラクター達が織り成す、親しみを感じられる日常コメディ漫画である。物語は一話完結を基本とし、ミステリー、SF、ラブコメ、人情話…など毎回様々なバリエーションで展開されるが、あくまで下町的な舞台を逸脱しない“地に足の着いた感じ”が心地よく、毎回安心して読める作品である。何度も読み返すと、作中にさりげなく伏線や小ネタが仕込まれていることに気付くのも楽しい。

Web サイト「最後通牒」管理人 / 高嶺 颪

「ダイヤのA」寺嶋裕二

■ キレのいいギャグ、萌え状況を微妙に茶化した視線、ここぞというところで使われる萌え、そしてキャラクターと世界に対する暖かい視線。今一番次号が楽しみな作品です。

マンガ愛好家 / タケウチ

「たんぽぽの綿毛」小沢真理

■ 母親をなくした夫・息子（高校生）・息子（幼稚園）の３人暮らしの物語。まず、お父さんがはんぱなくかっこいい！実際もてるので失恋しても痛手にならないんです。息子たちもその血をひいてものすごくかっこいい！憧れの世界ですよね。

演劇集団キャラメルボックス / 青山 千洋

「チナミの風景」野本明照

■ チナミの住む町の変人達とチナミの交流漫画。短編。全ての変人達に愛がある感じがして明らかにみんな変人の変な行動なんだけど結構日常に溶け込んでる気がしてさらりと日常のものとして読めた。チナミの自分探しというか何か悶々とした感じが昔味わった感情のような未だに持ってる感情のようなそんな気がして自分も風を切って走ってみっかなーと思ったり。ちょいちょい悶々と自分の感情を重ねてみたりして読んだ。

カメラマン / 平沼 久奈

「チノミ」吉永龍太

■ 絶叫小田急フリーターホラー！私的 07 年のビッグルーキー。全てが過剰、むせるほど濃厚な若干３名様テイストな珍味ホラーはいまからチェックしといて損なし！もっと売れていいはず。

ヴィレッジヴァンガード下北沢 / 久保 朝美

「テガミバチ」浅田 弘幸

■ 大切な手紙に託された’こころ’を届ける「テガミバチ」「こころ」は武器・術となり、「希望」となる。深い悲しみを背負いながら立ち向かう泣き虫な主人公ラグの愛と勇気のファンタジー物語。

有隣堂横浜駅西口コミック王国 / 徳永あけみ

マンガ大賞 Cartoon grand prize 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

「デトロイト・メタル・シティ」若杉 公徳

■ 言わずとしれた大ヒット作。こんだけ流行っているんだから、エントリーしなくてもいいかな？と思いましたが、、、やっぱりおもしろいものはおもしろい！ずっとどこかで、新刊を待ち続けている自分がいました。これをおすすめしなきゃクラウザー様に殺害 -SATUGAI- されてしまいます。

少年カミカゼ / 和教

■ ビジュアル系バンドをやっている自分には別の意味で楽しめる作品です。作者のデビュー作も読ませていただきましたがその作品に比べ、あえて下ネタなどを押さえ気味にすることでこの作品は味が出てきていると思います。

メガマソ / 涼平

■ ＤＭＣは一巻が秀逸。ファーストインパクトがあまりにも強い。クラウザーさんを中心にした迷言をファンが叫んでいる様子が好き。真似しずらいけど。最近注目され始め、実写化、アニメ化ということで、２００８年かなり熱いマンガだと思います。

フィットワン所属・グラビアアイドルの威を借るヲタク / 喜屋武ちあき

■ クラウザーさんヤバイっす。

シンガー / 山野井 千佳

■ デスメタルはそんな音楽じゃないよとしょっちゅう突っ込みたくなりますが、内容がバカバカしすぎてそんなことどうでもよくなっちゃいます。内容が少しマンネリ化してきているのでそこを打破してもう一花咲かせてほしいものです。タワレコもプッシュのオゲレツ漫画です。根岸くんの恋の行方が気になって夜も眠れません。

高校国語教師 / 橋井 哲朗

■ 久しぶりに漫画で爆笑しました。これを映画化すると決めた制作者たちに拍手を送りたい。

（株）ネビュラプロジェクト / 小森 和博

「トムソーヤ」高橋 しん

■ まず、なんと言っても表紙がいいです。楽しそうな少年と女性の描かれた表紙はおもわず手にとってしまいます。トムソーヤの冒険を高橋しん風に描かれています。ハルとタロの年齢を超えたコンビの面白愉快な夏休みの日々が、懐かしさを思い出させてくれました。いつもの日常とは違う事が巻き起こる夏の日々に心をわくわくさせて読ませて頂きました。子供の頃読んだトムソーヤの冒険もこうやって呼んでいた気がします。大人になると失ってしまっていた冒険心、純粋さどれもが憧れてしまいます。夏休みを過ごしてみたくなりました。

デザイナー / 平沼 寛史

「ぬくぬく」秋本尚美

■ 山田さんとしま（ねこ）のお話。最近猫まんががブームですがこのマンガが一番良質な猫マンガだと思います。まず猫と人の間に意思の疎通がない。（ここは重要。）でも一緒にいるだけで幸せ。作者の猫への愛情がにじみ出ているしまの描写。上手くてなめらか。何度読んでも飽きのこない幸せが詰まっています。

福家書店福岡店　販売係長 / 日高 礼子

「のらみみ」原一雄

■ 居候キャラ満載。ってド０えもんのぱくり？と思ったのは最初だけで、むしろ、彼もそこから派遣されたのでは？（笑）本当に存在する会社なら、私も一人ほしかったな･･･できれば、四次元ポケットついてる子（笑）

SHIBUYA　TSUTAYA　コミック担当 / 実松

「パート怪人悪キューレ」ヨコシマン

■ 世界初のフリー漫画誌として話題を集めつつも、１年弱で消えた「コミックガンボ」にあって、刊行時より連載されて絵でもお話でも高い完成度を見せてくれた作品。リストラ寸前の戦隊ヒーローでイエローを勤める父ちゃんの稼ぎを補おうと、妻がパートに出向いた先はヒーローと対立する悪の組織。そこで女怪人の役を振られて“職場”で父ちゃんと戦いつつも家では仲むつまじく、といった設定の妙味で楽しませてくれた。復刊なり続刊への期待を込めて。

書評家 / タニグチリウイチ

マンガ大賞 2008 cartoon grand prize マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

「バカ姉弟」安達 哲

■ つるりとした無垢な子らに、ほほえみと涙がとまりません。当初はあの安達哲が子どもを…？という読み方をしてしまいましたが、徐々に「ああもうたまんない！」という読み方になり、15年後のふたりをさくっと、きちんと描いたのを見て、やっぱり安達哲はすごい！と。もっともっと多くの人に語られ、愛されてほしい。

漫画ライター / 門倉 紫麻

「チェーザレ 破壊の創造者」惣領 冬実

■ 猛毒“カンタレラ”を保有していたことで知られ、“悪魔”と名高いチェーザレ・ボルジア。そんな彼が形成された時代からのお話。歴史を知らずとも、絵の美しさ、話の展開のに自然と惹きこまれてしまう。もちろん、歴史好き、特に塩野七生好きにはぜひとも読んでいただきたい作品。

三省堂書店神保町本店 / 赤坂 真実

■ 「毒を盛る男」として有名な【チェーザレ・ボルジア】を君主論の視点で描いた作品。 （マキャベリが「君主論」でチェーザレを褒め称えている） 社会であがっていく為にはこんなことまで･･･と、ルネッサンス版の島耕作みたいなもの。 惣領冬実の描くチェーザレの格好よさと冷酷だけどかわいい部分もあるチェーザレに釘付けです。

アニメイト / 鈴木 寛子

■ 美形でいいとこの出で、帝王学学んでてケンカも強く、普段はクールなんだけどここぞという時に優しい、出世間違いなしなんだけど、一般庶民の生活をあんまり知らなくて、でもちょっと教えると何でもモノにしてしまう。そんな男が実際にいたって言うんだから。でもそういうヤツって老若男女誰の目から見ても魅力的なんだよな。

音楽プロダクション / 樋口 健

■ この手の絵は好きでないのにモーニングで一回読んでから気になって買いました。ルネサンス時代の話というだけで話についていけるか不安だったけど世間に疎いアンジェロのおかげで私も時代について学べたり利害関係がわかったり出来ました。4 巻まで読んで印象的だったのが貧民にその場限りのパンを与えても何の解決にもならず仕事を与えなければという所。確かに！言われるまで気づかない自分もどうかと思ったけど。。そしてあの時代にそんな事にそんな事を実行するチェーザレの凄さ。もっと実際のチェーザレについて知りたいと思った漫画でした。

カメラマン / 平沼 久奈

■ 複雑な政治事情を、精緻なキャラクター描写で自然に読んでいけるのが嬉しい。主人公の素直な言動が社会人には胸のすく思いで、虜です（笑）。

web デザイナー / 河本 知香

「パチスロバカップル」七瀬 あゆむ

■ 今年完結し、コミックスも全５巻で無事まとまりました。多分マンガ読みでスロッター（パチスロを打つ人）じゃないと読めない（理解出来ない）作品だと思いますが、良いったら良いんです。スロット好きな夫婦が、土日を利用して週末スロを打ちながら、周りの人たちと交流を持っていくと言う、ありふれた当たり前な話なんですけど凄くドラマがあるんですよね。舞台を変えてからの話が全１巻で終わってしまったのがホント残念ですよ。

書店員 / 渋谷 孝

「ハツカネズミの時間」冬目 景

■ 冬目景さんのマンガでいつも思うのは作画が素晴らしい。人物描写が上手なマンガ書きさんだと思います。主人公達の不安だったり、心情の変化が内容からではなく表情ではっきりとわかります。人間というものをかなりとらえられているのでは。内容としては、隔離された学校と言う名の実験場で、少年少女達がそのおかしさに気がつきはじめ、脱走し、今までいた世界との違いの中で生きていく内容。今後の展開がとても楽しみな一冊です。

デザイナー / 平沼 寛史

マンガ大賞 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推し

「ハチワンダイバー」柴田ヨクサル

■ 去年末以来、マンガのランキング投票上位に挙げられてはいるものの、これほど評価と実売の乖離していた作品も珍しく、今のマンガ状況の難しさがそこに見える。格闘まんがのロジックでの将棋場面の緊張感の描出など有無を言わせぬ力業ばかりに目がいくが、将棋そのものとのギャップ、各キャラクターの性格のギャップ、恋愛とのギャップ等、味付けが巧みなのも忘れてはならない。そのオールマイティなパワーに震えた。

同人誌研究家・まんが評論家 / 三崎 尚人

■ 2007 年はやっぱりコレでしょう。「面白い」といわざるを得ない剛腕ぶり。

ライター / 芝田 隆広

■ あっという間にファンの心をつかんだのは何よりものその筆力ゆえだろう。大胆なコマ割りで将棋を頭脳の格闘技のごとく描く柴田ヨクサルのパワーに脱帽。連載もコミックスもどっちも楽しみな希有な例。

毎日新聞デジタルメディア局 / 渡辺 圭

■ 何をどうしたって、間違いなく今年を代表する 1 冊。馬鹿馬鹿しい対局条件、されど反比例するほどに熱い本気の勝負がそこにある…！

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

「パティスリー MON」きら

■ きらさんの作品は、作品から作者の人柄まで漂ってくる。主人公には毒がないけど、作品には毒も含まれていて、バランスが取れていると思う。最近の少女漫画の中でも、純粋に楽しめる作品。

フィットワン所属・グラビアアイドルの威を借るヲタク / 喜屋武ちあき

「はなまる幼稚園」勇人

■ かわいさ No.1。ほのぼの暖かい作風に癒されまくりんぐ。漫画としてもうまいなーと思います。

ライター / 芝田 隆広

■ 品がよく愉快で和む良い漫画。2007 年の新人賞はこの人でしょう。

無所属マンガ好き / 山形 武大

「あなたでいっぱい」ひさわ ゆみ

■ これもまた今の少女マンガだと思う。「朝チュン」（死語）では許されない時代に、それでも自分なりの精一杯のメッセージを込めた恋愛論。私は読む人を幸せにしたいと思って描かれているマンガが好きだ。

コミティア実行委員会　代表 / 中村 公彦

「ヒストリエ」岩明 均

■ 寄生獣でおなじみ、岩明 均 の作品歴史上の人物像を岩明 均の独自の視点、解釈で描かれている。主人公エウメネスに降りかかる悲運な事件の数々。それによって生まれる、ごくごく平凡な（一般的な）感情。しかしそれを奇抜でそして合理的な行動で打開してゆくのが、登場キャラクターのみならず、読者をも驚かす。

デザイナー / 佐藤 優

■ 自分が生き残るというのは、誰かが死ぬということ。ふだん見ないようにしている真実を、目の前にゴロンところがして見せるマンガ。

ダ・ヴィンチ編集部 / 関口 靖彦

■ これぞ岩明均の真骨頂。世界史で一度は覚えた人名や地名が出てくるので、とっつきやすく読みやすいのでは。丁寧な感情描写でぐっと惹き付けながらも、すっきりと読ませてくれる作品。

web デザイナー / 河本 知香

「ボーイ × ミーツ × ガール」ろびこ

■ まるでベテランのような完成度をみせたデザートの新人。別マ的ピュア路線とシュークリーム的ヤングレディース路線がデザート誌上で見事にひとつになりました。

ライター / 会田 洋

マンガ大賞 2008 Cartoon grand prize マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

「ヒャッコ」カトウ ハルアキ

■ 昨年最大の発見と言いますか、全く知らないところからはまった作家さんです。自分の部下が「この作家さんを売るためにとらのあなに入社したかもしれません」とぐらい言い切るほど応援したくなる作家性。今年もっともっと売れると思われます。

コミックとらのあな・書籍バイヤー、「とらだよ。」SD/ 塚本 浩司

■ フレックスコミックス刊 Flex Comix カトウハルアキ著『夕日ロマンス』と共に今年ブレイクしたカトウハルアキ氏。個性的なキャラクターによるハイテンションスクールライフが、荒い描線とこだわりのアングルで描かれ、他の学園モノにない個性的な面白さが出ている。

丸善お茶の水店　コミック担当 / 松岡 賢治

「ふたりごと自由帳」小坂 俊史 重野 なおき

■ 同人誌用の地味な漫画だからこそ、著者コンビのセンシティヴさがダイレクトに反映されている。純文学的な視点と普遍性を両立させた快作揃いの１冊だ。

書評系ライター / 福井 健太

■ ある時間をそれぞれの視点で切り取るって、面白いなあと思う。その気持ちを凝縮させたのが、この１冊。どことなくブラックだけど思わずほろりとしてしまう小坂編、底抜けではないけれど変わることなく明るさが漂う重野編、どちらも本当にたまりません。ここでこれを推さずしてどうするよ！という気持ちになります。

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

■ ふたりだから、ふたりでこそ、生まれてくるものがある。同人誌（自主出版）というスタイルで、表現者としての自分たちを試し、鍛え、そして本を作るのを楽しむ。そんな風に生まれた珠玉の作品群が、その価値を損なわないまま商業出版され、広く読まれることを心から喜びたい。

コミティア実行委員会　代表 / 中村 公彦

「ボーイズ・オン・ザ・ラン」花沢 健吾

■ 社会性、風刺を感じる漫画。「気合と根性」を今の時代性に合わせたが故に、非常にリアリティのある漫画となっている。

デザイナー / 佐藤 優

「ぼくらの」鬼頭 莫宏

■ 久々に泣けました。

有隣堂書店 / 水野 結花

「ポコとワンダフル」D.P.

■ エロマンガ。女なのでこの漫画がどこまで実用性に優れたものかはわかりませんが、いままで見たこと無いエロマンガで面白かったので紹介。主人公の住んでいる社会では人型動物ペットを飼うのがブーム。主人公も狸のポコを飼っている。ここまで書いただけなら「よくあるけもの娘かよ！」という話ですが、このポコ１．５頭身しかなく色気のかけらもありません。わかりやすい体型で説明すると、もやしもんの菌と子供の中間のような体系。エロマンガなのに。狸なので変身でき、主人公とのエロシーンもありますが１．５頭身であほな事している方がページが多い気もします。かなりブラックなギャグも効いてるし。鳴子ハナハルやOKAMA、村田蓮華といったエロマンガ出身の作家さんが好きなのですが、エロマンガである以上、エロいシーンを重点的に描かないと成り立たないと所もあると思うんです。抜けなきゃ意味ないから。実際にストーリーや背景に力をいれていないエロマンガ家さんも沢山いるし。そのなかでもエロくないシーンににも力を入れ、ストーリーや登場人物のキャラをしっかりたたせ、なおかつエロいシーンもしっかりかいてエロい（作画力はかなり高いと思います。トーンもしっかり貼っているし。）というのを両立させている珍しい漫画なので推薦。

高校美術教師 / 佐川 由加理

マンガ大賞 Cartoon grand prix 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

「へうげもの」山田 芳裕

■「へうげもの」古田織部の生涯を描く作品だが、彼のみならず、戦国の世の魅力的な登場人物たちと、魅力的なモノを、独創的に描き出された一作。山田芳裕の絵としてのダイナミックな表現や、擬音表現の面白さには以前から定評はあるけれども、この作品は、それが人間などの動作にだけでなく、うつわや茶席といった静的なものにまで広がって、そしてその上、表現されたものの魅力を存分に伝えきっているのが凄い。
山田芳裕が歴史上の登場人物を、どのように見て、それをどのように描くのか、また大名物と呼ばれる茶器を、どのように見て、どのように描くのか。その「描き方」――つまり、山田芳裕の「言語感覚」のキレのよさを、何度も味わえる一作です。

gekka blog/ 齋藤 正篤

■ 現在の茶の湯を見て、戦国武将たちはこんな所作をしていたのだろうか、と不思議に思うことがある。時代が現代にぐっと近くなるが、電力の鬼と呼ばれた松永耳庵が、名物茶碗にやかんで湯を注いで茶を点てている写真を見るとその思いはさらに強くなる。茶の湯はもっとドキドキとワクワクに溢れていて、豪快なものだったのではないかと。そう考えると、「へうげもの」は戦国時代の茶の湯のドキドキやワクワクを現代に蘇らせているといえないだろうか。今では当たり前の意匠も、その当時は驚くほど斬新だったのではあるまいか。古田織部が主人公というのも絶妙で、これが利休だと深遠で重くなりすぎるだろうし、小堀遠州だと綺麗すぎて爆発力に欠ける。山上宗二は偏屈で面白そうだが政治的な絡みが少ない。傷のない茶碗をわざわざ壊して金継ぎの美しさを追求してしまうような彼だからこそ、こんな動きのある茶の湯マンガが生まれたのだろう。

鳥取県立米子高等学校 / 野間 勤

■ 織田信長や豊臣秀吉など、歴史に疎い私でも知っている人物が多々登場しますが、主人公は古田織部。実在する人物かどうかも知りませんが、この人マニアックでありオタクです。歴史の流れの中にオタクの真髄を組み込んだすごいマンガ！！おもしろすぎます。

福祉施設職員 / 早道 奈美

■ 美意識のユニバース。もう説明はいらない。全身はやりものの君、買うべきは服ではない。一枚ずつ脱ぎ捨てながら、この作品とともにレジへ突っこめ！！

ヴィレッジヴァンガード下北沢 / 久保 朝美

■ 戦国顔芸絵巻～めくるめく擬音の世界をお楽しみ下さい～

有隣堂書店 / 水野 結花

■ 戦国時代を舞台にしたマンガは数あれど、主人公を古田織部とし、戦国の世の動乱を「欲」の観点から山田流に解釈した物語は全く新鮮。戦国時代モノといえばとかく“戦(いくさ)”そのものに重きが置かれがちだが、名立たる戦国大名が“名物”に命を懸ける様や、“茶の湯”というものが当時いかに重要視されていたのかを描く本作は、これまでに無い興味をかきたてるものがある。そこに、作者お得意の強烈にデフォルメされたキャラクターと大胆な画面構成が相まって、登場人物の喜怒哀楽が遺憾な読者へ伝わってくるのも、マンガという媒体ならではの面白さである。余談だが、この『へうげもの』は雑誌で読む方が面白さが増す漫画でもある。山田芳裕のダイナミックな作画は大きな誌面ではより迫力を増すし、編集者による洒落のきいた煽り文句や欄外のあらすじ文など、単行本には収録されない部分でも楽しむことができる。単行本派の人もぜひ雑誌で読んで貰いたい作品である。

Web サイト「最後通牒」管理人 / 高嶺 颯

「ホタルノヒカリ」ひうら さとる

■「干物女」というフレーズにひかれてもうずっと読んでます。干物、なんですが、早々彼氏ができてそこから四苦八苦なマンガなので、干物を全面的に出したマンガではありません。しかし、ドラマ化する少しまえからがぜんマンガの展開がおもしろくなってきたと思います。ひうらさとるさんには私が小学生のころ（２０年以上前）「なかよし」でずっと夢をみさせていただいておりましたので、年とともに内容も一緒に成長してくれるマンガ家さんていいですよね。

演劇集団キャラメルボックス / 青山 千洋

マンガ大賞 cartoon grand prize 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

「ママさん」山田 まりお

■ 四コマです。ストーリーや萌えが増えており、昔ながらのギャグ四コマが減ってきているのが凄く残念なんですが、その中で頑なにギャグ作品を書いている山田まりお作品を選んでみました。安堂友子と悩んだんですけど…。ストーリーは馬鹿系下品なギャグメインです。時折ちりばめられたじじい向けの一発ギャグに笑わされます。何も考えずに寝る前に読んで欲しい1冊です。

書店員 / 渋谷 孝

「ミス・ポピーシードのメルヘン横丁」山本 ルンルン

■ 著者の武器である独特の絵柄と奇想は健在。ブラックユーモアに満ちたメルヘンの味わいは癖になる。ところで――単行本数冊分の『マシュマロ通信』が宙に浮いているが、出してくれる会社はないものだろうか。

書評系ライター / 福井 健太

「もずく、ウォーキング!」施川 ユウキ

■ 軽い着想や言葉遊びから観念を転がし、絶妙のギャグに収束させるセンスはまさに天才的。ここでは『サナギさん』よりも妄想の飛距離が長い本作を推したい。

書評系ライター / 福井 健太

「ムカンノテイオー」玉置一平

■ マスコミ業界のスタッフさん達のお話です。タイトルの意味もお話の中で出てきます。因みに同作者の「痣丸」という漫画も未完ですが面白いので是非読んでみてください。個人的に続編の希望大。

All Japan Goith/TA-SHI

「モリのアサガオ」郷田 マモラ

■ 文化庁メディア芸術祭マンガ部門大賞を取ってはいるが、昨年完結して最後のチャンスとあっては、挙げないわけにいかない。重い社会派テーマと様式的なタッチが噛み合った、ある意味奇跡のような作品。単純な死刑存廃というテーマでなく、人間の「救い」という内面的テーマに収斂していくのも良かった。及川と渡瀬との関係が、思ったよりあっさりしているとも感じたが……。面相筆で描かれた静謐な画面は、まるで仏画のようだ。

読売新聞文化部 / 石田 汗太

「ヨルムンガンド」高橋 慶太郎

■ ２００７年には第２集と第３集が刊行。武器商人の女ココに雇われた部隊にヨナという幼いながらも凄腕の元少年兵たちが加わって始まった戦闘と謀略の日々。流れるようなタッチの絵柄で、時にコミカルな展開を挟みながらも弱き存在は確実に殺されるクールさで、、凄絶な武器商人の住む世界を描き出した。第３集の冒頭で幼い命を散らす少女マルカが心底より痛ましく心底よりの怒りも浮かぶが、一方でクールに決めるココたちの活躍ぶりに惹かれる気持ちもあって、そんな人間の打算ぶりにやりきれなさを覚えたりもする。すぐに忘れてしまうけど。

書評家 / タニグチリウイチ

「ラウンダバウト 」渡辺 ペコ

■ 青春系ではこれも収穫。ようやく絵と声が一致した印象。リアルかどうかはどうでもいいと思います。

無所属マンガ好き / 山形 武大

■ 中学生の頃考えていたことを読みながら思い出します。あの頃一生懸命におばかだった自分が見えてくるマンガです。

アバンティブックセンター京都店 / 中村 真依子

■ ちょっと踏ん張って、立ちあがる、みたいなマンガが好きなのですが、まさにそんなかんじの思春期マンガ。ちょっとしたことで世界があっというまに変わる中学生時代が、正確に描かれている気がします。小さなギャグのチョイスや入れ方も好き！渡辺ペコはこの作品で「あ、こういうことか！」とマンガ家として目覚めた感じが。今後さらにおもしろいものを描いてくれそう。

漫画ライター / 門倉 紫麻

マンバ塔 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推し!

「リカってば！」長谷川 スズ

■ 繊細な絵柄と洒落たストーリー、ハラハラドキドキ（死語？）な展開にもう目が離せません。これが掲載されているのが四コマ誌ってのも驚きですが、普通の少女誌だったらここまで目立つ事は無かったのかも知れません。年内に３巻が出る予定との事なので、今後にも期待！な作品です。

書店員 / 渋谷 孝

「わにとかげぎす」古谷 実

■ 古谷実は稲中から読み続けていて、『ヒミズ』『シガテラ』と重くなっていくけどやっぱり好きで読んじゃいます。最近一本調子なのが気になるが…。稲中と比べてどんどん絵も上手くなっていて安心して読める感じがします。

高校国語教師 / 橋井 哲朗

「悪魔とラブソング」桃森 ミヨシ

■ あまいあまーい前作「ハツカレ」にやられて連載初回を読んだら、あまりの振れ幅に唖然呆然、冷たすぎて火傷するような超辛口ヒロインとは。「デレ」に転ばずもっともっと「ツン」でいてほしいです。

朝日新聞記者 / 小原 篤

「羽衣ミシン」小玉 ユキ

■ とにかく、一押しの作家さん。ベースに“鶴の恩返し”を思わせるファンタジー。白鳥を助けた主人公の目の前に、突然現れた一人の女の子。彼女はかいがいしく尽くしてくれるが…。冬がくるたびに読み直したくなる。切ないのだけれど、優しく、あたたかく、心に残る作品。

三省堂書店神保町本店 / 赤坂 真実

■ 少女マンガであり、更に設定が鶴の恩返しとなっています。これだけ聞くと、どんだけロマンチックなんだよ…と少々構えてしまいますが、読み始めると不思議と違和感なくスッと入り込めてしまうのは、この作者の力量でしょうか。読み終わった後、すぐにまたもう一度読み返したくなります。

福祉施設職員 / 早道 奈美

「嘘喰い」迫 稔雄

■ いま挙げておかないと、おそらく来年はない（巻数の関係で）ので、あえて投票する。「ハチワンダイバー」とか「ライアーゲーム」とか話題作揃いの「ヤングジャンプ」の中で、もっとも熱気があり、もっとも独創的なのがこの作品。ちょっと、一度見たら忘れられない（悪夢に出てきそうな）絵、何だかよくわからないストーリー展開、一体、作者は何者だ！と叫びたくなる怪作。荒木飛呂彦の再来？

読売新聞文化部 / 石田 汗太

■ 新人らしく勢いのある画力。そしてストーリー。どれをとっても、面白いです。ギャンブル漫画の特色を大いに生かし描かれている。ギャンブル漫画＝福本作品の概念を覆すぐらい、今後の活躍に要注目である。

韓国漫画専門店ＣＯＭＩＣＣＯＺＺＬＥ店長 / 野田 真人

「駅から５分」くらもちふさこ

■ 花染町の駅から５分圏内で起こる出来事をオムニバスで描いたご近所まんが。冒頭の中学生のラブストーリーに震撼。わーーーー、久々にみました、記憶喪失ネタ。ベタです。ベタベタです。でも、これは新しい。記憶喪失ネタでこんな話も作れるのですね。切ない、胸がきゅんとします。少女まんがの王道誌に描き続けるくらもちふさこさんの真骨頂。連載も再開し、今が読みどき。

料理研究家 / 福田 里香

「榎本俊二のカリスマ育児」榎本 俊二

■ 昨年もたくさんの面白い漫画に出逢えました。出逢いすぎて選ぶのに苦労したのですが、その中でもいろんな意味でビックリした作品を選びました。１位は尊敬する、大好きな漫画家・榎本俊二先生の育児エッセイ。ギャグのためなら我が子でも容赦しないその姿勢に爆笑しました。スピード感あるその作風も遺憾なく発揮されています。

コミックとらのあな・書籍バイヤー、「とらだよ。」SD/ 塚本 浩司

「屋根の上の魔女 武富健治作品集」武富 健治

■ 「鈴木先生」が知られるようになった漫画家だが、タイトルにあるようなファンタジックで童話的なイメージとは違い、「暗黒神話」の諸星大二郎とも共通する、歪みながらも狂ってはいない絶妙のタッチで描かれた、これも諸星大二郎が得意とする、現実に幻想が重なる不思議な短編群が収められている。巻末に収録された「蟲愛づる姫君」は、岡野玲子が「陰陽師」で描いたような、平安調のビジュアルと平安ならではの空気感を持ちつつ、心優しくて少しばかり洒落っけのある貴族の男性と、心強くてピュアな女性とが出会い、関わり合っていく様が描かれていて、１度ならず２度、３度と読み返さずにはいられない感動を与えてくれる。

書評家 / タニグチリウイチ

「乙男 (オトメン)」菅野 文

■ 可愛らしい。コミカルで面白い。

シンガー / 山野井 千佳

「俺はまだ本気出してないだけ」青野 春秋

■ ４０歳。私も、もうすぐなんです。世では「不惑」と呼ばれるそうですが・・・。主人公「シズオ」は、その４０歳で会社を辞めてしまい「漫画家」を目指します。オイオイ、大丈夫かよっ！もちろん漫画ですから、全然大丈夫じゃないストーリー展開が待ってます。笑って泣いて・・・ジェットコースター並みの起承転結ですが、読後元気、やる気、勇気が出る素敵な作品です。

本と文具ツモリ / 津守 晋祐

■ 『中二病』のおっさんの、奮闘記！？主人公は娘も、無職の父親も抱える、40 過ぎたおっさん。ある日突然、会社を辞め、漫画家になろうと思いつく。行き詰ったり、挫折したり、しっかりモノの娘の秘密を知ってしまったり…。果たして彼の自分探し、結果は出るのか。笑えて、そして身につまされる。読んでいるうちに、なぜか元気と勇気がわいてくる作品。

三省堂書店神保町本店 / 赤坂 真実

「仮面ライダーをつくった男たち」小田 克己 村枝 賢一

■ ものを作る、夢を追う。大切なことを、照れずに正面から言う。まさに特撮魂。まさに男泣き。

ダ・ヴィンチ編集部 / 関口 靖彦

「夏のあらし！」小林 尽

■ 思春期男子のひと夏の経験。中高生男子はみんな読むべき。

マンガ愛好家 / タケウチ

「海獣の子供」五十嵐 大介

■ 鳥肌が立った唯一の作品。あれだけ濃い内容でまだ序章とは、画力に圧倒されストーリー展開に圧倒されなにがなんやら・・・とにかく読んでほしい。

あゆみＢｏｏｋｓ仙台青葉通り店 / 土屋修一

■ ハンパない画力、ハンパない謎。読んでいるとき、何度も暗い海の底に引きずり込まれてしまう感覚を味わいました。今、続きが一番楽しみな漫画です。

書店員 / お茶屋の煎

「街角花だより」こうの 史代

■ こうのさんのマンガは、とにかく間合いが独特で、ギャグのテンポが絶妙。しんみりしたり、はっとさせられたり、一見ほのぼのに見えますが、意外にこの方、ものすごい策略家です。ふとした１コマにすごいテクニックが隠されてたり。

旭屋書店船橋店 / 安田 奈緒美

Cartoon grand prize
2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

「学園黙示録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD」佐藤 大輔 佐藤 ショウジ

■ 主人公達は普通の高校生。ある日突然、生きた死体のようになった生徒が他の生徒を襲い始める。襲われた生徒は次々に生きた死体になっていき、連鎖的に増殖していった。校内中が化け物だらけになった中で、かろうじて生き延びた主人公達はそれぞれの才能を活かして校舎からの脱出を試みる。しかし学校を離れて目にした光景は、機能を失い秩序の無くなった街と、そこに闊歩する死体の群れだった。というお話。それなんて B 級ゾンビ映画？学園ロメロ？といった内容そのままに、学園サバイバルアクション作として中々に面白い作品。まず最初に校内での事件が起きてから、主人公達が生還を果たすと次は町でのサバイバルとなり、そして次は――、という世界の広がり方がうまいですな。まるでこう、ステージ１クリア、って感じだ。ゲーム的というと登場人物も役割分担と個性による配置がしっかり決まっておりまして、見ていてそれぞれに頼もしくかっちょよいのだ。B 級パニックアクション映画をそのまま狙ったような節はいたるところで感じるものの、ロメロの映画にあるような、極限状態の中にあって生き延びた人々も自らの生存のためにその本性をさらけだし、裏切りや疑心暗鬼の中で主人公達は他者の悪意にも対峙しなければならない、といった構造もきちんと持っているのは偉いですな。

ひょうたん書店 / 勝田 康一郎

「楽園の条件」森島 明子

■ 惹かれ合う女性たちの姿を、いやらしくなく描いています。それに女性のやわらかそうなこと！ イデオロギーや思想を通じて「女性が好き」ということを描くのではなく、あくまでやわらかそうだから、かわいいから、女性が好きなのだということが伝わってきます。大人の女性どうしの自然な愛の姿に心を揺さぶられます。

おたく文化史研究・男やおい読み / 吉本 たいまつ

「機動戦士ガンダムさん」矢立 肇 富野 由悠季 大和田 秀樹

■ もはや日本人で「ガンダム」を知らないのは年配の方だけでは・・・！？

有隣堂書店 / 水野 結花

「機動旅団八福神」福島 聡

■ 設定がロボット物としては意表をつくものですが、それ自体が普通となってきてしまっている昨今の作品としては文句なしの面白さです。

メガマソ / 涼平

■ 最初はロボットものなのかと思ってたんですが、あくまでも福神という兵器を用いた戦争の話で、色んなところが泥臭くダサイのが妙にリアル。パイロットの選ばれる理由も乗っても肌がかぶれないとかちっともヒーローっぽくない。だから主人公の名取がダサイのもロボットものの流行って訳じゃないと納得。日本が中国に支配されている時代背景とかも、何か妙に納得してしまう怖さがある。リアルじゃないはずなのにリアルな感じがするのはなんでなんでしょうねぇ。

自遊時間三省堂書店 / 大塚 綾乃

「気まぐれコンセプト」ホイチョイ・プロダクションズ

■ 最後はウケ狙いで。たぶん、今年しか挙げる機会がないだろうから『クロニクル』刊行記念推薦。やっていることは二十五年一日。バブルだろうが平成不況だろうが格差社会だろうが、すべてがホイチョイにとってはネタである。広告代理店という舞台らしく、反省や自制があるはずもなく、ただただ、そのしぶとく時代と寝つづけるパワーに呆れつつ脱帽。

同人誌研究家・まんが評論家 / 三崎 尚人

「共鳴せよ！轟高校図書委員会」D.キッサン

■ 図書委員会をタイトルに掲げメインにした作品。それだけでも、ツボ。自分が図書委員会に属していた思い出とかぶるところは限りなく少ないのだけども（こんな濃い人たちに囲まれた濃い日々じゃなかったし）、そしてこの人たちの中に混じりたいのではなくて、客観的に見てるから愉しいんだよな、ってことも多いけども、でも。「図書委員会」という響きが、もう。このままま ったり過ごしていっておくれ、君たち。

高校漫研顧問 / 幸

マンガ大賞 cartoon grand prize 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推し!

「極道の食卓」立原 あゆみ

■ 07 年はもう、極道の親分で熟年離婚で夜間高校入学‥のクジラ組長と立原あゆみ先生のやさしさにやられっぱなしです。悔しさで涙にじむ夜もときめきに胸高鳴る夜も締めは食、味わい深い食がある。地味でも珍味でもなく滋味な本。出会えたあなたはしあわせもんです。

ヴィレッジヴァンガード下北沢 / 久保 朝美

■ 極道マンガ一筋の作者がちょっと力を抜いて、極道系をしっかりとおさえつつ愛すべき人間模様を描いている。この組長いいなぁ〜。こんなやくざいるわけないけど、なんかみまもっちゃいますね。だれかの家に行って「極道の食卓」があったら、そのヒトとずっとずっと友達でいると思います。

デザイナー / 橘 千尋

「巨娘」木村 紺

■ お、面白いっ！！あの『神戸在住』を描いた漫画家と同一人物とはとても思えない、炸裂ぶりです（笑）。爆裂ジョー姐さん、カッコイイ！ああ、こんな男気のある上司なら一生ついていきたいわ…なんといってもあの仕事に情熱的なところがたまらない…。

旭屋書店船橋店 / 安田 奈緒美

■ 最初はあまりのテンションの高さに買ったの失敗したか？と思ったのですが［し」の回で巨娘のジョーさんと同じく巨娘のトオルさんが焼き鳥屋３号店を立て直しにいくところが男らしくて惚れました。回が進むにつれて面白くなっていってます。私にとってジョーさんの彼氏はパセリ的なもの妹の策略的なところはかわいい。このマンガは娘たちがイケてます。

福家書店福岡店　販売係長 / 日高 礼子

「潔く柔く」いくえみ 綾

■ 今さら少女マンガ界で確固たる地位を築いているいくえみ綾先生のどメジャー作品を何でまたこの場で推すのか。はい、単なる数合わせです、って正直すぎだオイ、ってすいません半分本当だったりしますが、この作品はいくえみ先生の最高傑作ではないかと思う気持ちも本当です。浮き沈みの激しいこの世界で２０年も「フツーの女の子の等身大の恋愛」を描き続けてきた作家なんていくえみ先生だけですよ！フツーなめんなよ！と三歳から少女マンガを愛読してきた僕は思うわけです。いや、ほんとにいくえみ先生の作品の老けなさは最早超常現象です。そんな先生お得意の群像劇の真骨頂。１０人いる当店の女子バイトの内半分が新刊を買ってます。きっと１０年後もフツーの女の子たちに支持されてるんでしょう。

ヴィレッジ・ヴァンガード立川ルミネ　店長 / 大山 敏樹

■ まんがの中で携帯を、どう物語に絡めるか？　どんな役割を持たせるのか？　２０００年以降、若い男女のリアルな恋愛を描く場合、携帯をどう位置付けるかは、作者の腕の見せ所となっている。このまんがには、ひとつの答えがあります。携帯って切ない。ある意味、携帯まんがの最高峰。号泣しました。

料理研究家 / 福田 里香

「現在官僚系もふ」鍋田 吉郎 並木 洋美

■ あんなに真っすぐ自分の思いを信じて突き進められたら気持ちいいだろう。そんな主人公「もふ」から少しだけ勇気と元気がもらえます。

凸版印刷 / 紺野 慎一

「黒鷺死体宅配便」大塚 英志 山崎 峰水

■ 死体の生前の願いを聞き、その死体の望む場所に死体を宅配する。というお話。でも、案の定毎回宅配以上の厄介ごとに巻き込まれてしまう主人公達。主人公はイタコ、仲間はエンバーマー、ダウジング、チャネラー、ハッカーと灰汁の強いキャラたち。この作品をオススメする理由は、従来のサイコ系漫画と比べて、２、３話完結で読みやすく、読み終わった後の変な後味の悪さが無いところ。ハッピーエンドとまではいかないけれど、それなりに死体は幸せであったと思えるし、悪いやつに報いが来る因果応報の要素もある。その代わり、複雑な伏線もないし、なぜそうなったのかという説明の部分がなく、内容がものたりないという人もいるが、個人的には、何巻にもまたいで話を続けた後、仲間が裏切ったり、死んだりした時の「今までの時間を返せ！」的な無力な感じよりは好きだ。『遠野物語』や都市伝説、民間伝承的なものが好きな人にはオススメの一冊」

高校美術教師 / 佐川 由加理

マンボ大賞 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

「黒執事」枢 やな

■ スタンダードによくできたSF漫画。「執事」という新しいモチーフに新しさ、面白みが集約されている。

デザイナー / 佐藤 優

■ はちゃめちゃなギャグに、シリアスありアクションありの娯楽の一冊。ちょっとこわいけど、こんな執事にもてなされてみたい！最凶執事に萌えです。セバスチャンとシエルの過去に何があったのか？　謎も含めてこれからの展開が楽しみ。

主婦 / 紺野 泉

「黒博物館スプリンガルド」藤田 和日郎

■ 19世紀ロンドンを騒がせた怪人「バネ足ジャック」の伝説に基づく怪奇冒険譚。ニヒルな魅力のダークヒーローの活躍が圧倒的な筆致で描かれる。活劇場面の描写の旨さは特筆。恐怖と笑いと興奮と感動が一冊の漫画にバランスよく盛り込まれた秀作。是非映画化希望。ハリウッドで実写化か、もしくはマッドハウスあたりにアニメ化してもらいたい。

コントユニット『アンチバッティングセンター』代表 / 増山 寿史

■ 藤田和日郎先生の世界が満喫できる一作。先生の画力､才能に「圧倒」された印象が強いです。青年誌（モーニング）連載だったこともあり､いままでの少年誌連載時以上に制約なく描いてらっしゃる気がしました。「凄い」の一言。

本と文具ツモリ / 津守 晋祐

■ 少年漫画で第一線で活躍されていた作家さんが、どう青年誌で描くのか注目していたのですが、やはりというか素晴らしい出来に感激しました。活躍の場を青年誌に持って行った場合でも十二分過ぎるほどの作品が期待できそうである。ポテンシャルの高さを見せつけられました！

韓国漫画専門店ＣＯＭＩＣＣＯＺＺＬＥ店長 / 野田 真人

■ 少年漫画の王道中の王道。疑わしい人物がそのまま犯人で､最後のどんでん返しのようなものはないですが､そんな思いも吹き飛ぶ紙面の迫力があります。個性的で魅力的な登場人物、スプリンガルドの人間の動きを超えたアクションシーン､そして男の友情と純情。一緒に収録されている異聞がまた独立した短編としても､本編の長いエピローグとしても素晴らしい出来です。

書店員 / 池田貴之

2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

「今日からヒットマン」むとう ひろし

■ これが読みたくて､ゴラクを定期購読するようになりました。きっかけはある編集者さんのオススメでした。数々のピンチを鍛えた営業トークで抜け出すトーキチの姿もそうですが、この漫画の魅力はなんといってもトーキチの相棒となるヒロイン・ちなつのツンデレぶりだと思います。最初はルパンに対する峰不二子のようにトーキチを利用するだけだったんですが､段々とトーキチに惚れていく様子は本当に可愛いですし､トーキチの奥さんや女殺し屋などが絡んできた時のやきもちぶりはまた可愛くて面白いですね。一般的には相当に売れているようですが、アキバ系の読者とかまだまだ読んでいない人が多いので、もっと頑張って紹介していきたいです。

コミックとらのあな・書籍バイヤー、「とらだよ。」SD/ 塚本 浩司

「山へ行く」萩尾 望都

■ ファンなんだからしょうがない。というかややコミカルに描かれた日常から染み出る不思議が描かれていて、気楽に読めて後にしっとりと残るものがある。絵はなお衰えるどころか今なお進化している雰囲気。「柳の木」はページを大胆に使いつつ時間を重ねる手法の上で人間の深い情愛を描いて感涙。描かれる女性の顔もまた美しい。

書評家 / タニグチリウイチ

「死と彼女とぼく ゆかり」川口 まどか

■ ずっと書き続けてくれていることに感謝。誰もこんなふうに死者を書けない。もはやひとつの芸。

文筆業 / 海猫沢めろん

「執事様のお気に入り」伊沢 玲

■ 男でもこの執事には萌えた！腐女子の気持ちが良くわかる。

有隣堂書店 / 水野 結花

「邪眼は月輪に飛ぶ」藤田 和日郎

■ このマンガは疾走感を感じました。ミネルヴァという名のふくろうに戦いを挑む感じはドキドキします。最後まで結果がわからなく、期待しながら読めたと思います。マンガの雰囲気としてはうしおととらに近い感じがすると思います。残忍なふくろうとの戦いですが、中盤のふくろうの行動には少し温かみを感じました。映画をみているようなマンガだと思います。

デザイナー / 平沼 寛史

「春行きバス」宇佐美 真紀

■ 長編に比べてどうしても薄味になりがちで記憶に残りにくいと思われるマンガの短編を、濃度たっぷり読後の充実感たっぷりに描ききる作者の手腕にほれています。単行本の発売を毎回楽しみにしていました（最新作「恋＊音」もオーソドックスながら目が離せないですが）。自転車でも電車でもない「路線バス」のほどよいスピード感と日常感覚を、各回各回、ボーイ･ミーツ･ガールに至るまでの舞台装置にした点が、１０代の「小さいけれど切実な世界」を大事なものとして、また大人から見ればある意味うらやましいものとして提示することに成功した理由だと思います。

全国紙記者 / 天野 賢一

「少女ファイト」日本橋 ヨヲコ

■ 登場人物たちの、日本橋ヨヲコの熱さがたまらないバレー漫画！バレーシーンの構図のかっこよさも、仲間を信じきりたい主人公の葛藤も、恋愛模様も…全てのシーンにグッときます。

恵文社バンビオ店　文芸書・文庫担当 / 大瀧 彩子

■ 前作の作品も良かったが、人の気持ちをうまく描かれている。純粋にバレーボール漫画としても、面白い。韓国でも、先頃１巻が発売になったが、読者の喰いつきがよく、今後の伸びも楽しみである。

韓国漫画専門店ＣＯＭＩＣＣＯＺＺＬＥ店長 / 野田 真人

「深夜食堂」安倍 夜郎

■ はじめてビックコミックオリジナルで読みきりを見た時から、早くコミック出ないかな？と思っていました。酒のビール、焼酎そして豚汁定食しかないこの食堂。だけど客が頼んだメニューをなんでも作ってくれる店主。これを読むと、まじで飯が食いたくなります。深夜にしかあいていないネオン街にある食堂に集まるヒューマンドラマ。訳ありさんも、そうじゃない人も腹いっぱいになればみな同じ。ぜひ、一度読んでみてください。腹だけじゃなくココロもいっぱいになります。

少年カミカゼ / 和教

■ 『ＢＡＲレモンハート』の食堂版のような感じ。登場する食べ物が懐かしさと食欲を誘う。腹が減ってるときには読まないことをお勧めする。

あゆみＢｏｏｋｓ仙台青葉通り店 / 土屋 修一

「水惑星年代記」大石 まさる

■ 少年画報社刊 ＹＫコミックス 大石まさる著鶴田謙二の『水の惑星』(画集『水素』収録) へのオマージュ的な作品なのだが、順調に連載を重ねて単行本も４冊目。叙情的なストーリーと描写に世界観の広がりが加わって、さらに面白さの厚みが増している。これまでの大石作品の良いところのいいとこ取しているようで、きっと代表作となるでしょう。それにつけても、10 年前に鶴田謙二がこのボリュームで描いていればと、思ってしまう鶴謙ファンの私であった…

丸善お茶の水店　コミック担当 / 松岡 賢治

cartoon grand prize 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一押!!

「赤灯えれじい」きら たかし

■ 主人公がやたらと自分に似ているらしい。実際マンガ見て「あっ似てるかも」って思った。性格から人生まで。こんなやる時ゃやるって感じじゃないけど。だもんで最初は近親憎悪というかなかなか読めなかった。でも読んでみるとやっぱり面白い。人生のあんなことやこんなこと、良いも悪いもきっちり入っていてる。だから引き込まれるんじゃないかと思います。愛すべき作品です。

デザイナー / 橘 千尋

「赤髪の白雪姫」あきづき 空太

■ 「こんな新人、いない」という驚異の帯惹句で初単行本刊行だが、かつて、成田美名子やなかじ有紀が登場した時の衝撃には比べるべくもない。編集部やり過ぎ。しかし、作品の、聡明で前向きで自立した生き方を進むヒロインとそれを支える友達以上・恋人未満の男の子という構図は、白泉社的少女まんがの正統的系譜の上にある。読後感も清々しく個人的にもお気に入りの一冊。変に煽らず、この若いパワーを育ててほしい。潰したら怒りますよ！

同人誌研究家・まんが評論家 / 三崎 尚人

「真・異種格闘大戦」相原 コージ

■ 野生の動物たちが「地上最強」の座をかけて命懸けで戦う、まさに「異種」格闘マンガ。相原コージならでは突き抜けた発想力と、それを裏打ちする綿密な取材で、何というか「想像を絶する展開」を見せてくれる。10代の頃に少年マンガをゾクゾクしながら読んだ感覚をいま味わっている。

コミティア実行委員会　代表 / 中村 公彦

「大阪ハムレット」森下 裕美

■ O･ヘンリーというか、古典落語というか。歴史に残るレベルの「いい話」が、次々に繰り出されます。ちょっとやりすぎなぐらいウエットなのに、ぎりぎり、嘘とは思えないリアリティーがあって。オレ、大阪の人じゃないから、勝手に思ってるだけかもしれないけど、大阪に住んでる人が、誰にどんな批判をされようと、芯で信じている何かが、みなぎってる気がします。同じ下町が舞台でも、たぶん、『東京ハムレット』って作品は、描けないですよ、きっと。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

「大東京トイボックス」うめ

■ 待ってましたの続編です。で、１巻でそのまま話を続けなかったのがまた良し。ありそうで無かったゲームクリエイターを描いた作品。熱い魂が込められた作品は何であれ最高です。

書店員 / 渋谷 孝

■ 前作『東京トイボックス』が弱小メーカーのゲームデザイナーの話、というニッチな内容で、期待以上にオモシロくてまあ満足して、予想通り２巻で打ち切られ、ま、そんなもんだわな、なんてスレたマンガ読みは思ってたわけですが。オイオイ、続編始まってるよ、って一人でメチャクチャテンション上がったわけですよ！でまたその内容がメチャクチャ熱いわけですよ！マスターアップ寸前、デバッグも終わって後は納品するだけ、そんな時にふと思いついたグッドアイデア、「仕様を一部変更する！！」このきめゼリフ、マジで鳥肌モンです。大して好きでもないマンガは何もしなくても売れて、自分が好きなマンガはがんばってもなかなか売れなかったり…そんな商売と理想の狭間で揺れ動く僕ら書店員の心に響く「でもやるんだよ」（ｂｙ根本敬）の心意気。クリエイターの人なんかにはもっと響くのかもしれません。割と普遍的なマンガだと思うんでもうちょっと売れてほしいんです。

ヴィレッジ･ヴァンガード立川ルミネ　店長 / 大山 敏樹

「誰かがカッコゥと啼く」イダ タツヒコ

■ あの世でもない、この世。この世でもない、この世。では一体ここはどこなのでしょうか・・・？まったく先の見えない展開がドキドキさせてくれます。

SHIBUYA　TSUTAYA　コミック担当 / 実松

マンガ大賞 2008 comic grand prix マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

「探偵儀式」清涼院 流水、大塚 英志、箸井 地図

■ 清涼院流水と大塚英志の世界観を踏襲したパラレルワールドを箸井地図のサラリと洗練されたタッチで描く物語です。著者の作品を知らない方でも構えることなくこの世界に引き込まれること受けあいです。著者の作品に触れたことのある方も、今まで描いていた人物イメージとのギャップを楽しめるのではないでしょうか。・主人公が存在しない（魅力的なキャラクター陣）・トリックが存在しない殺人事件・推理方法、推理手段、推理内容あげはじめればきりがないほど、（いい意味で）ぶっとんでいます。探偵ものにおける反則をふんだんに散りばめ、読者を惹きつけ飽きさせません。現在のところ一年に一冊という超スローペースな発行です。ぜひ、あなたも、次回発行を心待ちにする読者のひとりになりましょう。

web プログラマー / 岩下 梓

「竹光侍」永福 一成 松本 大洋

■ 松本大洋は重要なキャラクターとしてパッと見ると愚かな人を登場させる。それは、「大賢は大愚のごとし」といった言葉を思い出させる。そして、彼らは時には河合隼雄のいうところの「無の中心」のような場合もあるのだが、異能の持ち主であることがほとんど。例えば、花男やペコのように何か圧倒的な力を持っている。そう考えると、これもそのパターンであって、主人公の宗一郎は剣の達人であるが、それ以外はどこか抜けている。お世辞にも、世知に長けているとはいえない。だが、それが一昔前の剣劇ヒーローのようで、なんだか郷愁に浸ってしまう。そういう一点集中主義になんかあこがれるんです。

鳥取県立米子高等学校 / 野間 勤

「町でうわさの天狗の子」岩本 ナオ

■ 主人公秋姫とタケルの恋の行方も気になりますが、一巻で印象に残っているのは親友ミドリちゃんを助けに行くシーンです。セリフの間合いに鼻がツンてきました。

アバンティブックセンター京都店 / 中村 真依子

■ 舞台はちょっと田舎のとある町、主人公は天狗のひとり娘。親友や幼なじみ、憧れの男の子との甘酸っぱい高校生活がほのぼのと描かれています。登場人物が問答無用でかわいいんです…！なごみます。

恵文社バンビオ店　文芸書・文庫担当 / 大瀧 彩子

「群青学舎」入江 亜季

■ 一話一話の短編に心温まります。　忙しい毎日にほっと一息つける、そんなコミックスです。

アニメイト / 鈴木 寛子

■ 様々な「学校」にまつわる物語を描く連作短編。一口に「学校」といっても、すぐに思い浮かぶ現代の学校から中世・ファンタジー世界に至るまで、各回ごとに様々な舞台設定がされている。入江亜季作品の魅力はそのペンタッチであり、透明感のある画風はどことなくノスタルジックな雰囲気も感じさせてくれる。また、印象的なシーンではセリフではなく細かなカットでの情景描写やキャラクターの表情を見せることに重点が置かれていて、作品全体に絵物語的な独特のリズムをもたらしている点にも惹かれる。

Web サイト「最後通牒」管理人 / 高嶺 颯

「帝王」倉科 遼 関口 太郎

■ 絵が綺麗過ぎて実物との差に驚いた。

ミドリ / 後藤 まりこ

「鉄のラインバレル」清水 栄一 下口 智裕

■ ありそうでなかった本格ロボットもの。若い作者の熱がダイレクトに感じられるのがとにかくいい。豪華スタッフによるアニメ化でブレーク間近か。

毎日新聞デジタルメディア局 / 渡辺 圭

「百日の薔薇」稲荷家 房之介

■ 物語の持っている、この熱と世界観は凄い。BL の可能性の一旦を見せてくれた、血とオイルと戦車に彩られた漫画。

書店員 / お茶屋の煎

マンガ大賞 Cartoon grand prize 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一冊

「東京アリス」稚野 鳥子

■ 東京に暮らすお買い物好き、おしゃれ好きのＯＬの日常生活と恋をファッショナブルな絵柄で描写し、単行本を開くとそのフワフワ･キラキラな空気にやられます。ストーリーは王道的な要素も濃いし、マンガ的誇張はもちろんあるし、日々の生活の心地よさを保つのにお買い物がどれほど重要な位置を占めるのかという点はオトコの立場からは完全には感情移入はできないのでしょうが、こういう女子は程度の差こそあれ現実にもいますのでリアル。主人公の有栖川ふうが２巻中盤、セールで運命の一足（マーク･ジェイコブスの）に出会った経緯を独白するくだりは男子にも勉強になるはず。ある意味、生産からほぼ切り離された純粋消費者としての女子の生活はとことんまぶしくキレイで、マンガの素材としては好適なのかも。といって、ただのモノうんちくマンガにならず、モノ情報がちゃんと物語に溶け込んでいるところが作者の力量です。

全国紙記者 / 天野 賢一

「盗賊の水さし」今 市子

■ 「岸辺の唄」「雲を殺した男」に続くシリーズ３巻目。今市子は物語の空気を描くのがうまい人だと思う。「百鬼夜行抄」の湿気を帯びた濃密な空気感に対して、このシリーズは大陸らしい広がりと乾いた風を感じさせる。登場人物も国も異なるそれぞれの短編は、いずれも企みに満ちていて、この世界はどこまで広がっていくのだろうと思う。次の巻が楽しみなシリーズだ。

学校図書館司書 / 宇田川 恵理

「日常」あらゐ けいいち

■ 「あずまんが大王」から「らき☆すた」へと流れる女子高生ギャグ漫画のひとつの到達点。シンプルな絵柄でありながらも「間」や構図が巧みに計算され、そこに配置されたシュールな笑いの数々。絵柄だけで判断して読まないのは極めてもったいない。

コントユニット『アンチバッティングセンター』代表 / 増山 寿史

■ 個人的には榎本俊二の登場と同じぐらいのインパクトでした。　不条理系ギャグマンガは天才の仕事だなあと実感できる一作。　いやもう、最高です。

gekka blog/ 齋藤 正篤

■ 2007 年の最高のバカ漫画。かわいらしいキャラクターたちが繰りひろげるあまりにもシュールなありえない「日常」。バカ漫画の金字塔『魔術っ子！海堂くん‼』を超えるか？

丸善お茶の水店　コミック担当 / 松岡 賢治

「彼女のカレラ」麻宮 騎亜

■ ＳＦ物でしか知らなかった麻宮騎亜が現代物をそれも車のポルシェを題材に描いているとあって驚き読み始めた作品だが、死去した父親から譲り受けたポルシェに乗り始めた編集者の女性が、まるで知らなかった自動車とのつき合いを重ねるなかで、自動車のことを知りそしてポルシェを媒介にしていろいろな人と出会っていく様を見て、車って良いなあって思えて来る。スーパーカーやスペシャリティカーに限られるとは言えエンスー的にも満足できる情報量。最近は「週刊プレイボーイ」誌上でも毎週連載となって毎週出会えて嬉しい限り。

書評家 / タニグチリウイチ

「蔵人」尾瀬あきら

■ 名作「夏子の酒」からおよそ 20 年の時を経て、今の時代の日本酒を捉え直す意欲作。「自然の静物を描かせると日本一」と個人的には思っている尾瀬あきらの描く、稲穂の照り返しの眩しさや、古びた酒蔵の静謐な気配や、杯に注がれた酒の瑞々しい美しさに惚れ惚れする。「酒」というある種の生き物のような、自然の芸術品に挑む蔵人たちの物作りの姿勢に打たれた。

コミティア実行委員会　代表 / 中村 公彦

「不成仏霊童女」花輪 和一

■ 世が世なら、経典になっている本。創作ではなく悟り。読むと被救済の涙が流れます。

ダ･ヴィンチ編集部 / 関口 靖彦

マンガ大賞 Cartoon grand prize 2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一冊!!

「秘密 - トップ・シークレット -」清水 玲子

■ 近未来、人間の脳の映像を見ることができるようになり、犯罪捜査に使われている、という設定に興味をひかれました。脳の映像は、その人自身のフィルターを通したもののため、真実とは微妙に違っていたり、感情が入っていたり、また夢の中の映像までも見ることになります。脳をのぞく（のぞかれる？）ってこういうことなんだ…となんか考えさせられました。もちろん、ミステリーとしても十分に面白い漫画です。

日刊スポーツ新聞社・記者 / 下岡 真由美

■ 美しい絵で描かかれた残酷な事件の物語。被害者と加害者の心情、そして事件の真相。3 巻のラストは切なくて胸が痛くなります。重い読後感は決して万人受けではないと思いますが、心にズシンとくる一冊です。個人的に母親であるということが、他人事ではなく悲しくなるのです。

主婦 / 紺野 泉

「弁護士のくず」井浦 秀夫

■ 本来とっても分かりづらいはずの法令ネタを、主人公九頭元人の弁護士らしからぬ型破りな活躍で、ズバッと明快に解決していく様は痛快。一見するとふざけて、いい加減に見える言動に見え隠れする、建前じゃない、人間の本質をえぐり取るような皮肉な描写がお気に入り。

凸版印刷 / 紺野 慎一

「放浪息子」志村 貴子

■ 志村貴子さんは絵の雰囲気がとてもいい。内容は決して簡単なことではないけど、その絵柄でかなり救われているはず。少年萌えの私としては、主人公の二鳥修一がとにかくツボ。それにしても、大人に向けての思春期に起こる出来事は相当恥ずかしい思い出になると思う。

フィットワン所属・グラビアアイドルの威を借るヲタク / 喜屋武ちあき

■ 「青い花」とどっちを押してようのやら。迷うところではありますが、巻数の進んだ「放浪息子」でひとまず。小学生から中学生へ。女の子になりたい男の子と男の子になりたい女の子の普通の日常を描いた、まさに志村貴子ワールドとしかいいようのない、不思議な味わいの作品。このこたちがどうなってゆくのか、とっても気になります。

料理研究家 / 福田 里香

■ 今や彼らを親のような気持ちで見守っています。

アバンティブックセンター京都店 / 中村 真依子

■ その昔、好きだった娘の家で読んだコミックビームに連載していた作品。その時から結構注目して読んでいたが、気恥ずかしくてそっと胸のうちにしまっておいた。で、数年後。どうにもとまらなくて一気に新刊で買って読み始めた。「勢い」と「思い込み」で構成される思春期のちょっと手前の日々。そんな古き良き（？）時代を思い出させ、いい年こいたおとなが顔を赤くして深夜に読みふけっても許されるマンガ。なんだかもう、こっちがドキドキしちゃいます。

デザイナー / 橘 千尋

「僕と彼女の ×××」森永 あい

■ 男女の中身入れ替えっというありきたりな設定なのに、なぜか、はまってしまう。中身が男な女の子が、本人より女らしかったり。中身が女な男の子が、本人よりガサツで男らしかったり。そんな状態でラブもあるのが、普通に考えたら、ありえないはずなのに、楽しく読めてしまう。

SHIBUYA　TSUTAYA　コミック担当 / 実松

「僕のやさしいお兄さん」今 市子

■ 今市子さんのゲイコメディが大好きです。以前、彼女の作品で、一巻ものの大傑作「大人の問題」というまんががあったのですが、久々にその系譜を継ぐ作品です。血族のごたごたとゲイカップルの恋愛を絡めた悲喜こもごもの物語作りは、今さんの独壇場だ。義理も含め、イケメン３兄弟が織り成すスラップスティックラブコメ（と言い切ってしまいましょう）。続きが今、一番気になる作品のひとつです。

料理研究家 / 福田 里香

2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

「僕の小規模な生活」福満 しげゆき

■ 漫画家志望必見？！　かつて編集者とのやりとりをここまで詳細に記したものはあっただろうか（笑）　そしてもうひとつの見どころが「奥さん」 奥さんの描写が最高です。　福満ワールドにどんどん引き込まれていきます。　連載再開が楽しみ！！

アニメイト / 鈴木 寛子

■ 『まだ旅立ってもいないのに』から好きだったが、まさか講談社で連載するとは・・・。そのころに比べるとマニアック度が落ちたように感じるがその分読みやすくなったと思う。これも編集者さんの力でしょう。奥様の大胆さと切れっぷりがたまらない作品。

あゆみＢｏｏｋｓ仙台青葉通り店 / 土屋 修一

■ 失踪してない、失踪日記と言うべきか。離婚してない、桜玉吉と言うべきか。絶望してない、つげ義春というべきか。ダメ人間マンガの最先端。「心は開かないでおこう…」「勃起した」「そんな状況に自分がいたとは…」など、一切保身を考えない、狂気に近いほどの本音が、魂レベルの笑いにつながってます。奥さんがめちゃくちゃかわいく描かれているのにも目を奪われますが、1 巻の最後の解説文、第 24 話にたった一言「妻が好きだ！」って書いてあって、コレも本音が生み出しているかわいさかと。でもそんな奥さんも、「ずんぐりむっくりしている」と一刀両断しているところがあったりして。すごい、めちゃめちゃロックだ。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

■ マンガ家である作者の日常を描いたノンフィクションマンガ。主人公（作者）の社会不適応具合が笑えて、私に生きる元気を与えてくれます。そして自由気ままに、生活苦も臆せず生活している（ように見える）妻を見ていると、ある意味妻の鏡のように見えてくるのは気のせいでしょうか…。

施設職員 / 早道 奈美

「本の元の穴の中」天乃 タカ

■ 世界設定もストーリーも面白いです本当に面白いです。是非是非。

All Japan Goith/TA-SHI

「盆堀さん」いましろ たかし

■ 今年もっとも繰り返し読んだマンガです。人生。

ダ・ヴィンチ編集部 / 関口 靖彦

「魔王」伊坂 幸太郎 大須賀 めぐみ

■ デスノート、の新訳とも取れる漫画。ある一人のカリスマに対して 「染まらなず」 にアンチテーゼを投げかける面白みがある漫画。

デザイナー / 佐藤 優

「万福児」下吉田 本郷

■ お寺に生まれたフクシ君。今日もまた、悪戯三昧の毎日です。しかし笑いの中にもちゃんと家族の愛が描かれてて僕は大好きです。とにかく表情の描きかたもすばらしく、実はめちゃめちゃ絵うまいんじゃないか？？と思わせます (笑) 失敬。

少年カミカゼ / 和教

■ 初めて見たときは衝撃でした。すごい顔のキャラクターだな･･･、と。もうその時点で虜になっておりました。キモかわいいっていうんですかね？シュールでくだらない笑いの連続。たまにほっこりする話もあったりして。気がつくとハマっています。じっさいにこんな子がいたらさわりまくり。

恵文社バンビオ店　店長 / 宮川 元良

「夕日ロマンス」カトウ ハルアキ

■ 部下からこの漫画を読んで下さいと言われ、コピーでまとめた第 1 話を読んだとき、ヒロインの魅力に惹き込まれ、最後のオチにビックリしました。

コミックとらのあな・書籍バイヤー、「とらだよ。」SD/ 塚本 浩司

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

「預言者ピッピ」地下沢 中也

■ 地震予知のために生まれた、人類の全てをも計算できるくらいのとてつもない情報処理能力を与えられたロボットがストーリーの中心。そのロボットの目の前で、ある悲劇的な事件が起きる。その日を境に、ロボットは人間社会への関与を始め、周囲の人々のみならず人類そのものに対して大きな影響を与えていくことになる、という話。要するには、行き過ぎた人工知能がヒトの世界を大きく動かしてしまう、というSF的シチュエーションのひとつではあります。が、この漫画はそれをただの設定のひとつとせずに、むしろそれこそをストーリーの中心に据え、人工知能の生きすぎた成長とそれに伴う人間の変化をじっくり追っていく内容になっています。これだけだとなんか小難しくて退屈な印象に受け取られかねないんですが、これがなんともドラマチックで盛り上がるのだ。そのドラマを作るのは、主にロジックの対立である。ヒトとヒト、ロボットとヒト、あるいはロボット内部でのロジックの対立。この論理の応酬がドラマとなり、そこから生まれる答えが話を動かし、新たな論理を産み、そこでまた葛藤や対立が起こる、という仕組み。けれどもここまでやっといて、キャラが動かす話になっているのが面白いのだ。特に 1 巻目終盤では、実に意外性のある展開を読者に提示してきます。「ええっ！？そんなことが！」と唸っちゃう流れ。しかし 2 巻目以降に待っているのは、さらに凄い展開なんだろうな、という期待感も充分に煽ってくれます。

ひょうたん書店 / 勝田 康一郎

■ 人類が災害を回避するために開発したロボットが事故を境に自我を持ち人類の未来を予言し、選択をせまる。絶滅か進化かの選択を―。読み終わった後、「すげぇ、これどうなんの！？」と６畳間の中心で叫びました。８年間かかって単行本１冊刊行という超スローペース。生きている間になんとか完結していただきたい。

恵文社バンビオ店　店長 / 宮川 元良

「未来日記」えすの サカエ

■ 画風が今風で、ヒロインの設定などもいわゆる「ヤンデレ」とぱっと見はいわゆる「ヲタ受け」を狙った作品に見えるのに、むしろそういった設定を嫌う人でもおもしろく読むことができる作品であるとオススメできます。

メガマソ / 涼平

■ 『花子と寓話のテラー』最終話のすばらしさに圧倒されていたのですが、まだまだ成長するなんて……すげぇえぜぇ……。

文筆業 / 海猫沢めろん

「臨死!! 江古田ちゃん」瀧波 ユカリ

■ あまりにも生々しく「女」を生きる江古田ちゃんに、平素二次元美少女を愛好する方々はジンマシンのひとつも起こしてしまうかもしれない。がしかし、世の（決して全部が全部じゃないが）女性の思考や生態を学習したいと思ったら、是非読むべし。笑いながら学べます。

コントユニット『アンチバッティングセンター』代表 / 増山 寿史

■ 女性は怖いです。怖いくらい面白いです。全裸の江古田ちゃんは抜き身の刀のように危ないです。ヌルい男の幻想をメッタ突きです。

朝日新聞記者 / 小原 篤

■ 強さと脆さをあわせ持つ江古田ちゃんのモノローグに、心ゆさぶられる。笑いながら泣いてしまう。人はひとり。

ダ・ヴィンチ編集部 / 関口 靖彦

「苺田さんの話」小沢 真理

■ 宇宙から来たなぞの生命体が「憑依」したかわいらしい着せ替え人形「苺田さん」（苺田アン）と、服飾系専門学校に通う男の子・衣温の交流をかわいく・かわいく描いて単行本が宝物に見えてきます（笑い）。着せ替え人形がしゃべる、というある意味だれもが一度は夢想した世界と、細部まで描き込まれたファッションとインテリアのキュートさ、そしてそれらに囲まれた都会暮らしを生々しさを排除しつつ描き、読み手の殺伐とした現実をひととき忘れさせる癒しグッズでもあります。随所に挿入される小ネタもおかしいし。かわいい見た目で関西弁まじりのオヤジっぽい毒舌を吐く苺田さんのキャラクター造形も笑えて◎。単行本巻末のクラフト系紹介コーナーも小物好き、手作り好きにはたまらないのではないでしょうか。

全国紙記者 / 天野 賢一

マンガ大賞 2008 Cartoon grand prize マンガ読みが選ぶ2007年の一推し!!

「鈴木先生」武富 健治

■ ２００７年はこのマンガの話ばっかりしてた気がします。いろんな視点で語れるマンガなので、その魅力は一言では言い表せませんが、あまりにも逞し過ぎる鈴木先生の妄想力に、チョー笑えるんだけどーみたいなリアクションをする女子に向かって、いや、鈴木先生は深いんだよ！的な語りを入れる文化系男子もなんか間違ってる気はします。だって笑えるもん鈴木先生。雨がっぱと長ぐつ姿の教え子に萌えすぎて、たまらなすぎるぜーってアンタがたまらなさすぎだ！昼飯噴くぐらい笑うことなんてギャグマンガでもそうないですよ。ただ、物語の進め方は割とオーソドックスに、事件→推理→解決というベタな流れなんです。僕が一番魅力を感じるのは、その解決にあたる鈴木先生の授業における独自の視点でのロジックの展開に、良質にミステリに通じる謎解きのカタルシスがある所です。「あ、そういうことやったんか、なるほど。」と。最新刊で性教育を真正面から扱ってますが、そこで鈴木先生が展開する避妊教育否定論はまさにその真骨頂。ハチワンダイバーの１００倍ぐらいの量のネームを一気に読ます武富先生の力量に脱帽です。こんな時代にこんなマンガがマンガ大賞を受賞するなら…オレはもう今逝ってもいいぜ！ってぐらいの気持ちでもって支持します。

ヴィレッジ・ヴァンガード立川ルミネ　店長 / 大山 敏樹

■ 鈴木先生のあの情緒不安定ぶりが最高！あせると汗かきすぎ。ヘヴィーな展開に目が離せません。女子中生の長靴姿に萌えたり（笑）と大変濃い内容です。

高校国語教師 / 橋井 哲朗

■ とにかく過剰で真摯。あまりに絶対値が大きいので、ギャグの回路を突き抜けて感動してしまう。青臭さが一周して止揚されてるのがすごい。（現実にこんな中学教師がいたらちょっとイヤだけどなぁ。）「鈴木先生」と、そしてあとこの作者が今後どこに行くのかが猛烈に気になる。

gekka blog/ 齋藤 正篤

■ 緊迫感がこんなにも過剰なのに、なぜ笑えるのだろうか。私にとって原因は二つありそうだ。まずは、緊迫感の方向が違うときに笑うのではないだろうか。鈴木先生、女子中学生の小川に対してそれはないわ･･･、って感じで。次は、過剰すぎて笑うのではないだろうか。芸人のオーバーリアクションに笑うように、それはオーバーすぎるでしょ、って感じで。ただ、その場合には、過剰なことのみが問題であって、緊迫感に関しては問題がない。もし、これに賛同してもらえるのならば、そのような人は学校が緊迫感に溢れている場であるということをうすうす感じ取っていることになるのではないだろうか。学校が安心できるホンワカした場ではなく、緊迫感に溢れていると感じていることになる。何十人、何百人という子供たちが集まっているのだから、会社などの大人が集まる場所とはまた違った雰囲気になる。緊迫感溢れるのも当然なのかもしれない。ただ、学校を描く場合には、往々にして善の面が強調されることが多いようで、このようなマンガは少数派なのかもしれない。

鳥取県立米子高等学校 / 野間 勤

■ １巻で、ものすごく翻弄されて何？なんなのこのマンガ!?と悶々と過ごした。あんな体験ははじめてだった！２巻を読んで「確信犯！」という思いになり、３巻でまた「計算してる…と見せて、天然？」という思いがわいてきて…もうなんか…好きです！

漫画ライター / 門倉 紫麻

「惑星のさみだれ」水上 悟志

■ 等身大なのかスケールが大きすぎるのか？常にある日常の背中合わせにハンマーと姫・騎士たちが常にアクティブに展開していく様に、非常に惹かれます。姫の正体も徐々に明かされつつ、まだまだ隠し玉がありそうな続きも気になります。メディアなどに露出する機会があれば、もっと販売数も延びていく一冊で、また現状で今年一番ブレークする可能性のある作品と思っております。

八王子・マンガ王 / 日吉 雄

「ジャバウォッキー」久正人

■ 独特の画風で描かれるあまりにも趣味的なストーリー。クセのある作風ですが、そのクセモノっぷりがたまりません。

無所属マンガ好き / 山形 武大

マンガ大賞 2008 cartoon award prize マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

「ワイルドマウンテン」本 秀康

■ ポップな絵柄とは別にひどくシュールな内容がいい。菅菅彦みたいな人間を主人公にしたマンガってあまりないと思う。こういった作品自体、さすがＩＫＫＩという感じでいい。何か勉強になる漫画というわけじゃないけど、なんとなく読んで置くといい漫画だと思う。

フィットワン所属・グラビアアイドルの威を借るヲタク / 喜屋武 ちあき

■ 8 巻まで OK というマンガ大賞のレギュレーションに合わせて入れてみました。固定ファンにしか届いてなさそうですが、この作品は万人におすすめしたい。そして 5 巻まで読んでいただきたい。実に複雑な余韻を残す物語となっています。スタージョンが漫画原作書いたらこんなのかも。

無所属マンガ好き / 山形 武大

「金魚屋古書店」芳崎 せいむ

■ 漫画を読んで漫画が好きになる人がいる。その漫画好きな人にスポットをあてた漫画。主人公はいますが一話完結もので、そのつどそのつど一人の漫画好きにスポットがあたり物語が進んでいきます。一つの話で一人の人と、一つの漫画にスポットがあたるのですが、出版社も年代も、ジャンルもバラバラ。漫画への愛と偉い人たちの努力があっての連載漫画なんだろうなとしみじみしてしまいます。漫画の雑学から、中古書店での転売屋、書店の棚の並べ方、旅先での漫画の交換（この話が一番好き）といった漫画に関わる知識も身につきます。自分が読んだことのある漫画がでた時のちょっとした驚きと喜び、そうでなくても漫画に対する思いに「そうなんだよねー。」と共感できる漫画。

高校美術教師 / 佐川 由加理

■ マンガ好きとマンガが沢山出てくるマンガ。自分が大好きなマンガが出てくると本当にうれしいです。「自分の心がどんなもので出来上がってるか」という言葉は自分の本棚を見つめる度に思い出されます。

音楽プロダクション / 樋口 健

マンガ大賞
cartoon grand prize
2008 マンガ読みが選ぶ2007年の一推!!

非ノミネート作品（コメント無し）

「Ｙ十Ｍ～柳生忍法帖～」せがわ まさき 山田 風太郎

「ガゴゼ」アントンシク

「ピースオブケイク」ジョージ朝倉

「ゆるめいつ」saxyun

「らいかデイズ」むんこ

「異邦警察」すぎむら しんいち リチャード・ウー

「仮スマ」櫻井 リヤ

「誰も寝てはならぬ」サラ イネス

「女の子の食卓」志村 志保子